

小島・柳原遺跡群

NAKAMATA

中 俣 遺 跡

浅川扇状地遺跡群

OSIKANE

押 鐘 遺 跡

MAYUMIDA

檀 田 遺 跡

1991・3

長野市教育委員会

序

社会生活の変化とともに「物の豊かさ」から「心の豊かさ」が求められる今日、文化財は現代人の心の糧として欠くことのできぬ、国民的財産であると考えます。

特に埋蔵文化財は、直接土地に刻み込まれた歴史であり、当時の物質文化のみならず信仰・宗教等の精神史など、文化の始源をも内包する基準資料であり、埋蔵文化財そのものが歴史・文化を考える上での実証者といえましょう。

このたび土地区画整理事業や宅地開発、ゴルフ練習場造成事業にともない小島柳原遺跡群中俣遺跡、浅川扇状地遺跡群押鐘遺跡・榎田遺跡の3遺跡の調査を実施しました。

各遺跡とも過去の調査で周辺より重要な埋蔵文化財が発見されており、古代史研究上注目されていた遺跡であり、今回の調査でもそれぞれ多大な成果が得られました。

本書はその成果を要約し、長野市の埋蔵文化財第41集として報告するものです。この報告書が地域古代史の解明や文化財保護の一助として、学術的に関係各方面に広くご活用いただければ幸いに存じます。

最後に、発掘調査から報告書刊行に至るまで公私にわたり多大なご援助・ご指導を賜りました関係諸機関ならびに各位に心からお礼申し上げます。

平成3年3月

長野市教育委員会 教育長 奥村秀雄

小島・柳原遺跡群

中 俣 遺 跡

1991. 3

長野市教育委員会

例 言

- 1 本書は長野市中俣地区土地区画整理事業にともない実施した埋蔵文化財発掘調査報告書である。
- 2 調査は中俣地区土地区画整理組合の委託を受けて長野市教育委員会が実施した。
- 3 調査地は長野市柳原字上返町・一丁目・東過上木・上過上木に位置するが、遺跡名は小島柳原遺跡群中俣遺跡とした。
- 4 本書は矢口の指導のもとに千野が執筆・編集したが、第4章2は鶴田典昭（長野県埋蔵文化財センター）が、第4章3は町田勝則（長野県埋蔵文化財センター）が執筆した。
- 5 調査によって得られた諸資料は長野市教育委員会（長野県埋蔵文化財センター）で保管している。出土遺物の注記記号は「小島柳原遺跡群中俣遺跡」の各頭文字をとって「KYN」と表記してある。
- 6 本書は調査によって確認・検出された遺構・遺物を中心に、その基本資料を提示することに重点を置いた。

資料掲載の要領は下記の通りである。

- ・資料は検出されたものの中から時期の明確に把握しうるものを中心に掲載した。時期・性格等の不明瞭なものは資料掲載の対象から外したが、これらに関しては図面・出土遺物等遺構ごとにもいつでも閲覧しうるよう保管している。
- ・遺構・遺物は便宜的にⅠ～Ⅲ期に分けて記述した。おおよその年代観はⅠ期：弥生時代中期後半、Ⅱ期：弥生時代後期、Ⅲ期：弥生時代終末～古墳時代前期であるが詳細は下表に示した。
- ・遺構の測量は仰写真測図研究所に委託し、コーディックシステムにより1：20の縮尺で基本原図を作成し、本書では基本的に1：60の縮尺に統一してある。ただし遺物出土状況等微細を要するものに関してはこの限りではない。
- ・遺構番号は調査時の仮番号をそのまま用いた。報告に当たって再整理することも試みたが、出土遺物との対応で混乱が生じるおそれがあるため断念した。遺構検索が煩雑となったがご容赦願いたい。
- ・遺物実測図に関しては、土器1：4・石器1：3・土製品1：2・土器拓影1：3の縮尺に統一してある。
- ・出土土器観察表の記述は次の要領で行なった。番号：図版番号と一致する。法量：実際の計測値ならびに推定復元による計測値を記した。遺存度：図示した部分の遺存度を記した。色調：灰白色（A）・淡黄褐色（B）・暗黄褐色（C）・暗褐色（D）・黒褐色（E）・灰褐色（F）とし、中間的なものはA B・B Cと表示した。胎土：明らかに在地の胎土と異なるもののみ○印をつけた。

	時代	時期	関連遺跡
Ⅰ	弥生時代 (中期)	栗林 (中)	聖川堤防10号住
		栗林 (新)	旭幼稚園遺跡 徳間遺跡1・2住、湯ノ入遺跡
Ⅱ	弥生時代 (後期)	1段階	吉田高校グラウンド2・4住
		2段階	
		3段階	神楽橋遺跡
		4段階	生仁遺跡Y 8住
		5段階	篠ノ井遺跡群6号周溝墓 四ツ原遺跡30住
Ⅲ	古墳時代		車札バイパスA地点1・2住 灰塚遺跡H 1住

目 次

序	
例言	
第1章 調査経過	
1 調査に至る経過	1
2 調査の体制	2
第2章 遺跡周辺の考古学的環境	6
遺跡範囲と名称について	8
第3章 調査	10
1 A区の調査	10
2 B区の調査	19
第4章 遺物各説	104
1 土器	104
2 石器	108
3 光沢痕のある石器について	112
第5章 総括	114

挿 図 目 次

図1 調査地周辺図	図16 B-1・2区全測図
図2 周辺遺跡分布図	図17 B-3・4・5区全測図
図3-1 遺跡範囲推定図	図18 1号住居址実測図
図3-2 周辺字境図	図19 2号住居址実測図
図4 A区遺構全測図・基本土層図	図20 4号住居址実測図
図5 1号住居址実測図	図21 7号住居址実測図
図6 7・8・17・19・21・27号土壇実測図	図22 9号住居址実測図
図7 2号住居址実測図	図23 13号住居址実測図
図8 3号住居址実測図	図24 14号住居址実測図
図9 4号住居址実測図	図25 15号住居址実測図
図10 15号土壇実測図	図26 18号住居址実測図
図11 5号住居址実測図	図27 19号住居址実測図
図12 A区土壇実測図	図28 20号住居址土器出土状況実測図
図13 A区出土土器実測図	図29 20号住居址実測図
図14 A区出土土器実測図	図30 27号住居址実測図
図15 B区全測図	図31 27号住居址炭化材・土器出土状況実測図

- 図32 32号住居址実測図
- 図33 33号住居址実測図
- 図34号 36号住居址実測図
- 図35号 40号住居址実測図
- 図36 54号住居址実測図
- 図37号 23号下層住居址実測図
- 図38 1期溝・土壇実測図
- 図39 6号住居址実測図
- 図40 8号住居址実測図
- 図41 22号住居址実測図
- 図42 23号上層住居址実測図
- 図43 25号住居址実測図
- 図44 28号住居址実測図
- 図45 30号住居址実測図
- 図46 39号住居址実測図
- 図47 42号住居址実測図
- 図48 47号住居址実測図
- 図49 49号住居址実測図
- 図50 52号住居址実測図
- 図51 56号住居址実測図
- 図52 9・44・50号土壇実測図
- 図53 5号住居址実測図
- 図54 24号住居址実測図
- 図55 29号住居址実測図
- 図56 31号住居址実測図
- 図57 37号住居址実測図
- 図58 51号住居址実測図
- 図59 13号溝址土層堆積状況実測図
- 図60 13号溝址土器出土状況図
- 図61 14号溝址土層堆積状況実測図
- 図62 18・56・60号土壇実測図
- 図63 畝状遺構実測図
- 図64 1・4・7号住居址出土土器実測図
- 図65 7・13・19号住居址出土土器実測図
- 図66 20号住居址(床面)出土土器実測図
- 図67 20号住居址(床面)・同(上層)出土土器実測図
- 図68 20(上層)・18・23下層・27号住居址出土土器実測図
- 図69 27号住居址出土土器実測図
- 図70 27・36・54号住居址、10号溝址出土土器実測図
- 図71 6・7・14・46・49・47号土壇出土土器実測図
- 図72 47・57・58・59号包城出土土器実測図
- 図73 6・8号住居址出土土器実測図
- 図74 22・23上層・35・28・39・47・49・52号住居址出土土器実測図
- 図75 42・56号住居址、9・44・50号土壇出土土器実測図
- 図76 5・29・31号住居址出土土器実測図
- 図77 37・48・53号住居址、13号溝址出土土器実測図
- 図78 13号溝址出土土器実測図
- 図79 13号溝址出土土器実測図
- 図80 13号溝址出土土器実測図
- 図81 13・14号溝址出土土器実測図
- 図82 15号溝址、18・60号土壇出土土器実測図
- 図83 55号土壇、B区出土土器実測図
- 図84 B区出土土器実測図
- 図85 B区出土土器実測図
- 図86 土製品実測図
- 図87 土製品実測図
- 図88 1・2・4・9・13号住居址出土土器拓影
- 図89 7・18号住居址出土土器拓影
- 図90 18・19・20号住居址出土土器拓影
- 図91 20・27・23号下層住居址出土土器拓影
- 図92 27・32・33・36号住居址出土土器拓影
- 図93 36・40・54号住居址・14号土壇出土土器拓影
- 図94 22・46・48号土壇出土土器拓影、44号住居址
- 図95 44号住居址、2・3・9号土壇出土土器拓影
- 図96 中俣遺跡出土の石器1
- 図97 中俣遺跡出土の石器2
- 図98 中俣遺跡出土の石器3
- 図99 中俣遺跡出土の石器4

図100 中俣遺跡出土の石器 5
図101 中俣遺跡出土の石器 6
図102 中俣遺跡出土の遺跡 7

図103 中俣遺跡出土の石器 8
図104 光沢面の認められる石器
図105 剥片に残された使用の有無

表 目 次

表1 A区土壌一覧表
表2 A区出土土器観察表
表3 B区出土土器観察表1
表4 B区出土土器観察表2
表5 B区出土土器観察表3
表6 B区出土土器観察表4
表7 B区出土土器観察表5
表8 B区出土土器観察表
表9 B区出土土器観察表7
表10 B区出土土器観察表8

表11 B区出土土器観察表9
表12 B区出土土器観察表10
表13 B区出土土器観察表11
表14 B区出土土器観察表12
表15 B区出土土器観察表13
表16 B区出土土器観察表14
表17 B区出土土器観察表15
表18 出土土器観察表
表19 出土土器分類表

写真図版目次

図版1 A区1・2・3号住居址
図版2 A区4・5号住居址、15号墳
図版3 B区2・4号住居址、4号住居遺物出土状況
図版4 B区7・8・9・18号住居址
図版5 B区13・14・19号住居址
図版6 B区20号住居址、同土器出土状況
図版7 B区20号住居址、同ゆ床前土器出土状況
図版8 B区27号住居址炭化材・土器出土状況
図版9 B区23・32・33号住居址
図版10 B区36・54号住居址、10号溝址

図版11 B区10号溝址土器出土状況、57・58土壌
図版12 B区22・24・25号住居址
図版13 B区37・42・5号住居址
図版14 B区29・31号住居址、13号溝址
図版15 B区13・14号溝址、60号土壌
図版16 B区3地区
図版17 B区4・5地区
図版18 調査風景
図版19～ 出土土器

第1章 調査経過

1 調査に至る経過

長野市柳原地籍は、地理的には千曲川によって形成された自然堤防と千曲川の氾濫原が認められる。今回の調査地周辺は千曲川の氾濫原上に位置するものと考えられ、長沼1号幹線排水路沿いに畑地が分布するほかは一面低湿な水田が展開する。

昭和61年この地域において市街地の造成を目的とした、事業面積約24haにわたる長野市中俣土地区画整理事業が計画された。事業予定地は周知の「小島・柳原遺跡群」内に位置するため、長野市教育委員会は同都市開発部区画整理課の委託を受け事前に埋蔵文化財の存在の有無を確認するために試掘調査を実施することとなった。

試掘調査は長野市教育委員会が設置した長野市遺跡調査会が組織する調査団によって、昭和61年10月30日～11月1日の3日間にわたって行われた。調査は現地踏査により遺物の散布を確認した範囲内の任意の7地点について実施した。各地点における土層堆積状況はおおむね一致し、現地表下1m内外に位置する灰黑色粘土層が遺物包含層と認定された。この結果より事業面積約24ha中、掘削等の工程により埋蔵文化財に破壊の及ぶ可能性の高い道路部分約5,000㎡について、記録保存を前提とした発掘調査の必要性が確認された。

本調査は昭和63年から開始され、工事・工程・他遺跡調査日程との調整から以下の3次にわたって実施した。

- 1次調査 昭和63年9月12日～9月19日（6日間・A区）
- 2次調査 平成元年4月3日～5月16日（24日間・B-1～B-4区）
- 3次調査 平成2年3月1日～3月20日（11日間・B-5区）



調査地近景

2 調査の体制

(1) 昭和61年度の調査

試掘調査は長野市の委託を受け、長野市教育委員会が設置した長野市遺跡調査会が組織する調査団によって実施された。

長野市遺跡調査会の組織（昭和61年度）

会 長 奥村秀雄（教育長）
 委 員 米山 一致（長野市文化財保護審議会会長）
 桐原 健（長野市文化財保護審議会委員）
 清水 富一（教育次長）
 関川千代丸（社会教育課文化財専門主事）
 矢口 忠良（調査団長）

監 事 高野 覚（教育委員会総務課長）
 事務局長 吉見 敏（社会教育課長）
 局 員 吉池 弘忠（社会教育課主幹）
 山崎 博三（社会教育課主査）

調査団

調査団長 矢口 忠良（長野市立博物館主査）
 調査員 山口 明（長野市立博物館主事）
 青木 和明（長野市立博物館主事）
 中殿 章子（長野県考古学会員）
 横山 かよ子（長野県考古学会員）
 参加者 川島 邦子 藤沢 月子 丸山たまき
 丸山 悦子

(2) 昭和63年度の調査

前年度の調査から長野市教育委員会が直接事業を実施することになった。組織・業務分担は以下のとおりである。

調査主体者 長野市教育委員会教育長 奥村 秀雄
 総括責任者 市埋蔵文化財センター所長 諏訪部和彦
 庶務係 " 所長補佐 小山 正
 " 職員 青木 厚子
 調査係 " 調査係長 矢口 忠良

調査係 市埋蔵文化財センター主事 青木 和明
 主事 千野 浩
 専門員 中殿 章子
 専門員 横山かよ子
 専門主事 小松 安和
 専門主事 中沢 克己
 専門主事 大室 昂

調査員 清水 隆寿（立正大学学生）

参加者 竹元清蔵 小島忠久 田尻岩夫 岡田勇
 西 志げる 丸山美江子 丸山悦子 川島邦子 川島
 浩 中沢慶子 宮下智美 大沢寛司 出村駿一 岡田
 時子 上田たね 宮下きよ 松林伝次郎 柄沢清志
 神頭幸雄 堀内とし 水内治美

(3) 平成元年度の調査

調査主体者 長野市教育委員会教育長 奥村 秀雄
 総括責任者 市埋蔵文化財センター所長 水沢 国男
 庶務係 " 主幹 小山 正
 " 職員 青木 厚子
 調査係 " 調査係長 矢口 忠良
 " 主事 青木 和明
 " 主事 千野 浩
 " 専門員 中殿 章子
 " 専門員 横山かよ子
 " 専門主事 小松 安和
 " 専門主事 中沢 克己
 " 専門主事 大室 昂
 " 職員 今井 悦子

調査員 飯島 哲也（関西大学学生）

参加者 中野節子 中野房伊 下川照子 鈴木寛
 市川生子 齋藤澄 深沢信子 深沢百合子 宮島昭男
 前沢初子 奥村千代子 常田保子 中島芳江 徳永一
 宮沢美代子 白鳥光男 小池和幸 上野いせ子 中村
 常彦 宮沢嘉三 西沢弘晃 小越光晴 松浦サトミ
 小林ともい 越山四方太 関川幸子 大和美子 松田

なか子 上野義次 大日方保 松田と志 小林まさ子
 小林栄子 会津奈巳子 佐藤きせ 水野貞子 関夏江
 辰野政治 辰野一枝 横田よきを 佐藤徳子 吉田正
 見玉米子 渡辺好江 会津はな子 保坂けさ子 吉田
 みや子 西沢卯三郎 橋詰ときを 松尾昭子 原和子
 小山武男 小山幸子 町田清子 伝田いく美 浅品秀
 子 阿部正子 根岸由恵 竜野いつ子 横谷すま子
 西沢はつの中沢光枝 黒岩けい子 下川利雄 松田
 もと江 大沢弘 松井律子 松尾よし子 松山三郎
 待井春子

整理参加者 徳成奈緒子 岡沢治子 池田見紀 小泉
 ひろ美

執筆参加者 鶴田典昭 町田勝則

(長野県埋蔵文化財センター調査研究員)

調査の実施および報告書の作成に当たっては以下の
 方々よりご協力とご教示を得た。記して謝意を表わし
 たい。

石川日出志 石黒立人 赤澤徳明 置田雅昭 太田三
 喜 関川尚功 米田文孝 平松良雄 田嶋明人 藤田
 典夫 久田正弘 中谷克彦 山下誠一 直井雅尚 小
 山岳夫 西山克己 青木一男 前島卓

また事業主体者である長野市中俣地区土地区画整理
 組合におかれては、埋蔵文化財保護に対して深いご理
 解をいただき絶大な協力を賜った。厚くお礼申し上げ
 たい。



遺構掘り下げ



重機表土剥ぎ作業



遺構検出作業



遺構掘り下げ



①1:10000 ②1:2000 ③表層地質図(f: 泥炭層堆積物
fs: 扇状地堆積物 al: 自然堤防堆積物 al: 現河床堆積物)

図1 調査地周辺図

第2章 遺跡周辺の考古学的環境

長野市域犀川以北には、浅川扇状地遺跡群・小島柳原遺跡群という大きな二つの遺跡群が存在する。前者は浅川によって形成された広大な扇状地上に立地する遺跡群であり、後者は千曲川左岸に形成された自然堤防上に展開する遺跡群で今回調査した中俣遺跡はその北東端に位置する。

以下正式調査を経た遺跡を中心にその概要を述べ周辺の考古学的環境とする（番号は分布図と一致する）。

2 水内坐一元神社遺跡 柳原小学校新築移転事業にともない調査される。中俣遺跡と同一の自然堤防上に立地し、将来的には同一遺跡として把握される可能性が高い。弥生時代住居址4軒、古墳時代住居址5軒、平安時代以降の柱穴群・溝址等が検出されている。

（文献：長野市教委 1980『三輪遺跡』長野市の埋蔵文化財第6集）

3 小島境遺跡 弥生時代中期以降の各時代にわたる遺構が検出されており、古墳時代の周溝墓5基が検出されている。周溝墓と同時期の住居址群も検出されており、うち3軒から玉生産関係の遺物が出土している。出土土

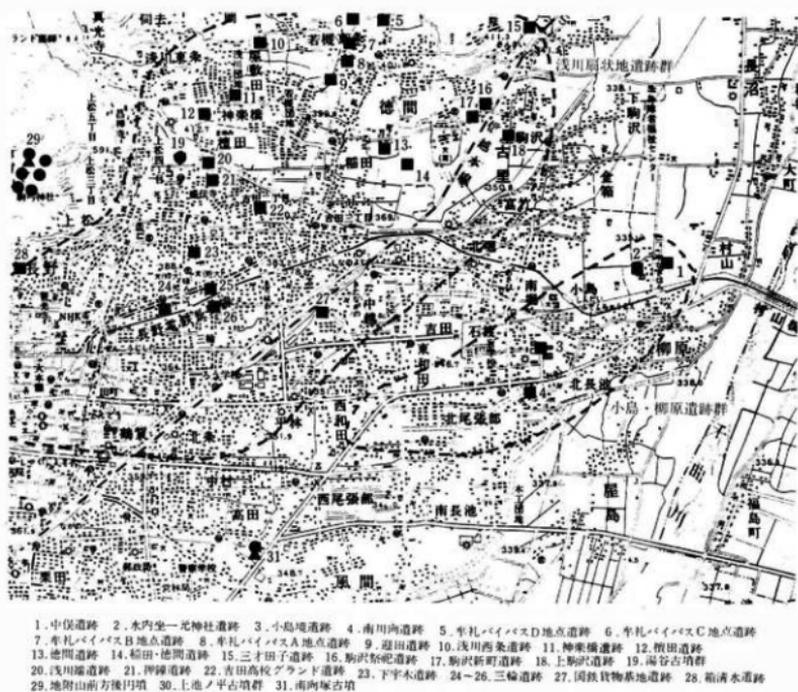


図2 周辺遺跡分布図

器群の様相には、新潟県地方からの影響が強く現われており、またS字状口縁古付甕もこれに伴出しており、千曲川流域における古墳時代初頭の土器様相の一端を示す良好な資料といえる。

(文献：青木和明 1984「小島境遺跡」〔古墳出現期の地域性〕千曲川水系古代文化研究所他)

4 南川向遺跡 小島柳原遺跡群の南西端付近に位置し、平安期の集落が検出されている。特徴的な遺物としては、緑釉陶器皿が出土している。

(文献：長野市教委1988「小島柳原遺跡群南川向遺跡」長野市の埋蔵文化財第25集)

5～8 牟礼バイパスA～E地点遺跡 主要地方道長野荒瀬原線建設事業にともない調査されたもので、縄文前期、弥生中期、古墳前期～後期、平安～中世の集落が検出されている。特筆すべきものとしていわゆる善光寺瓦(丸瓦・軒平瓦)が出土している。

文献：長野市教委1982「浅川扇状地遺跡群—牟礼バイパスA・E地点遺跡」長野市の埋蔵文化財第12集
" 1986「浅川扇状地遺跡群—牟礼バイパスB・C・D地点」長野市の埋蔵文化財第17集

10 浅川西条遺跡 駒沢川によって形成された扇状地の扇端部付近に位置する平安期集落。緑釉陶器、和鏡などが出土している。

(文献：長野市教委1975「浅川西条」長野市の埋蔵文化財第2集)

13 徳間遺跡 弥生中期終末の住居址が2軒検出されている。土地区画整理事業にともない現在調査中の14稲田徳間遺跡の一部として理解しうるもので、同遺跡では弥生中・後期、古墳前・中期、奈良、平安期の集落がかなり明瞭にとらえられている。

(文献：長野市教委1980「四ツ原遺跡 徳間遺跡 塩崎遺跡群」長野市の埋蔵文化財第9集)

16 駒沢祭祀遺跡 湧水地を選んだ古墳時代中期から奈良時代にかけての焼土・集石・土器集積を伴う7箇所の遺構が検出された。特に古墳時代中期のものは高塚・小型丸底土器等祭祀関係の遺物を中心に総数500有余の土器が投棄された状況で検出されたもので、他に鏡・剣・玉の石製模造品も出土している。

(文献：森嶋徳「長野県長野市駒沢新町祭祀遺跡」〔日本考古学年報〕19)

17 駒沢新町遺跡 祭祀遺跡の北西に位置し、平安期集落が検出されている。注目すべきものとして、平安後期の懸仏銅型とそれに伴うと考えられる工房址と推測される遺構が検出されている。

(文献：長野市教委1981「湯谷古墳群 長礼山古墳群 駒沢新町遺跡」長野市の埋蔵文化財第10集)

19 湯谷古墳群 後期古墳が7基確認されているが調査以前に湮滅したものの存在がかなり予想される。中でも最大規模と予想される第1号墳はその立地からも本古墳群の中心的存在であったことが予想され多量の土師器、須恵器、武具(直刀・刀子・鉄鍔)、馬具(轡・帯金具・雲珠)、裝飾品類が出土している。

(文献：長野市教委1981「湯谷古墳群 長礼山古墳群 駒沢新町遺跡」長野市の埋蔵文化財第10集)

20 浅川端遺跡 縄文～平安期の遺構が検出されている。縄文時代は住居址1軒、土壌1基を検出したが、住居址は前期前半、土壌は早期末までさかのぼる可能性がある。古墳～奈良・平安期の集落は南東200mほどに存在する押鐘遺跡②と同一の集落として把握しうる可能性もある。

(文献：長野市教委1988「浅川端遺跡」長野市の埋蔵文化財第29集)

21 吉田高校グランド遺跡 弥生時代後期前半吉田式土器の標識遺跡。3次にわたる調査が行われ計17軒の住居址が検出されている。住居は吉田式の単一時期で、当該期における良好な集落遺跡である。

(長野市教委1987「長野吉田高校グランド遺跡」長野市の埋蔵文化財第22集)

28 箱清水遺跡 弥生時代後期箱清水式土器の標識遺跡。明治34年長野高等女学校建設事業にともない大量に出土した土器は箱清水式として把握され、黎明期の日本弥生時代研究に大きな影響を与えた。

(文献：長野市教委1984「箱清水遺跡②」長野市の埋蔵文化財第15集 ほか)

遺跡範囲と名称について

今回の調査原因となった中俣地区土地区画整理事業は、事業面積約24haと広大なものであり、今回調査を実施した地籍の字名も上返町・一丁田・東過上木・上過上木と複数にわたる。

推定される遺跡範囲は、柳原小学校移転に伴って昭和54年に調査された水内坐一元神社遺跡の存在を考慮するならば、大きく上返町・中俣道東・土井環南・三ツ家沖地籍を中心として北東から南西へと展開することが予想される。

ただし旧地形は非常に複雑な変化が認められ、推定範囲内に連続と集落が展開するのではなく、今回の調査でも明らかなごとく、自然堤防上に形成された微高地上に拠点となる集落が複数箇所形成されることによって、広大な遺跡群が結果として構成されたものととらえられる。今回の報告では後述するごとく調査区を大きくA区とB区に二分して記述した。遺跡の形成された時期はほぼ一致するものの両者の間には遺跡の空白地帯が存在し、上述のごとく遺跡の立地する微高地が異なる可能性を考慮したからである。各調査地点の代表的な字名をとり上返町遺跡・上過上木遺跡として報告することも考慮したが、両者を分離する明確な根拠も今回の調査には把握するに至らなかった。

そこで現状では上返町～三ツ家沖地籍を中心として展開する大きな遺跡群と把握し、長野県史遺跡地名表に掲載されている遺跡番号6758中俣遺跡より、小島柳原遺跡群中俣遺跡として報告する。ただし将来的には遺跡範囲・遺跡の性格の明確化を待ってその名称については再検討されるべきものであることを指摘しておく。

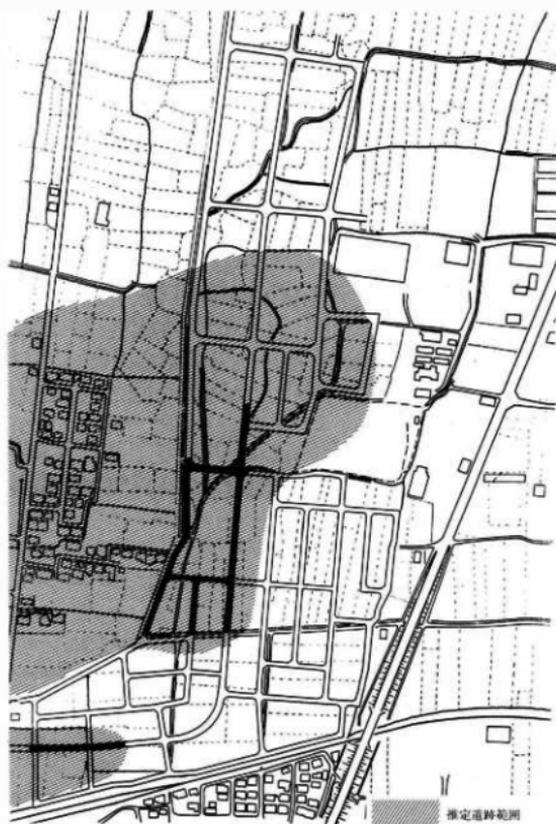


図3-1 遺跡範囲推定図



图 3-2 周边字地图

第3章 調 査

1 A区の調査

1 調査概要

A区は区画整理事業用地内に存在する自然堤防の南端部分に位置するものと考えられ、幅約5m・長さ約75m・面積約450㎡にわたる調査を行った。現地形から判断すると西側に遺跡範囲が延長する可能性は究めて高いが、東側はしだいに低湿地帯へと移行しSD4以東では包含層の存在も希薄となり、遺跡範囲からは外れるものと考えられる。A区とB区の間接地帯も、現地形にはさほど高低差はなく当初は同一遺跡範囲内と想定していたのであるが、トレンチ調査ならびにガス・水道管埋設のさいに土層の断面観察を行ったところ、包含層である黒褐色粘質土層は認められず遺跡範囲からは除外した。

現在同一の微高地と判断されても旧地形は微妙に変化していることが予想され、遺跡の立地する微高地もA区～B区へと直線的には移行しない可能性が高く、あえて調査区を二つに分割した方がよい。前節にても述べたとおり詳細は将来的な検討に委ねたい。

本調査区の土層堆積は図4にも示したとおり、基本的には4層から構成される。包含層は第III層の黒褐色粘質土層で、第IV層の青灰褐色粘質土層は地山ととらえられる。

遺構はI期～III期の各時期のものが検出されているが、住居址の分布は微高地中央付近の西側に集中し東側は溝址・土壇が主体となる。

2 I期の遺構

1号住居址(図5)

検出状況：調査区東端にて検出された住居址で、北東端、南西端は調査区外となる。形状・規模：8.10m×6.50mほどの長楕円形プランを呈し、主軸はN-37°-Wである。床面・壁：床面は壁際をのぞき特に住居中央付近が堅緻に締まっていたが貼り床は形成されていない。壁高は東壁18cm・西壁25cm・南壁18cm・北壁24cmを計り、確認面からの掘りこみは平均20cm程である。柱穴：P2～P14が検出されているが明確に主柱穴と考えられるものではなく、柱穴の配列は不明である。遺物出土状況：住居址北東隅の壁際で壺(1)が床直上より出土している。またP1・P14付近の壁際より炭化材がかなり出土している。

3号溝址(図4)

検出状況：調査区東端にて検出された北側と南側はそれぞれ調査区外となる。また北側は掘りこみが浅く不明瞭なものとなる。形状・規模：南西から北東方向に直線的に伸びる溝址で、中軸線の主軸はN-40°-Eである。確認面における幅は平均1m前後、深さは9～12cmほどの浅い溝である。掘りこみ等の形状は一様ではないが全体としての断面は浅い逆台形状を呈する。遺物出土状況：覆土内より壺(2)が出土したほかは小破片のみである。

7号土壇(図6)

平面プランは1.70×1.50mの不整形を呈する。深さ20cm程で北側は二段にわたって掘りこまれている。覆土内より若干の土器片が出土している。

8号土壇(図6)

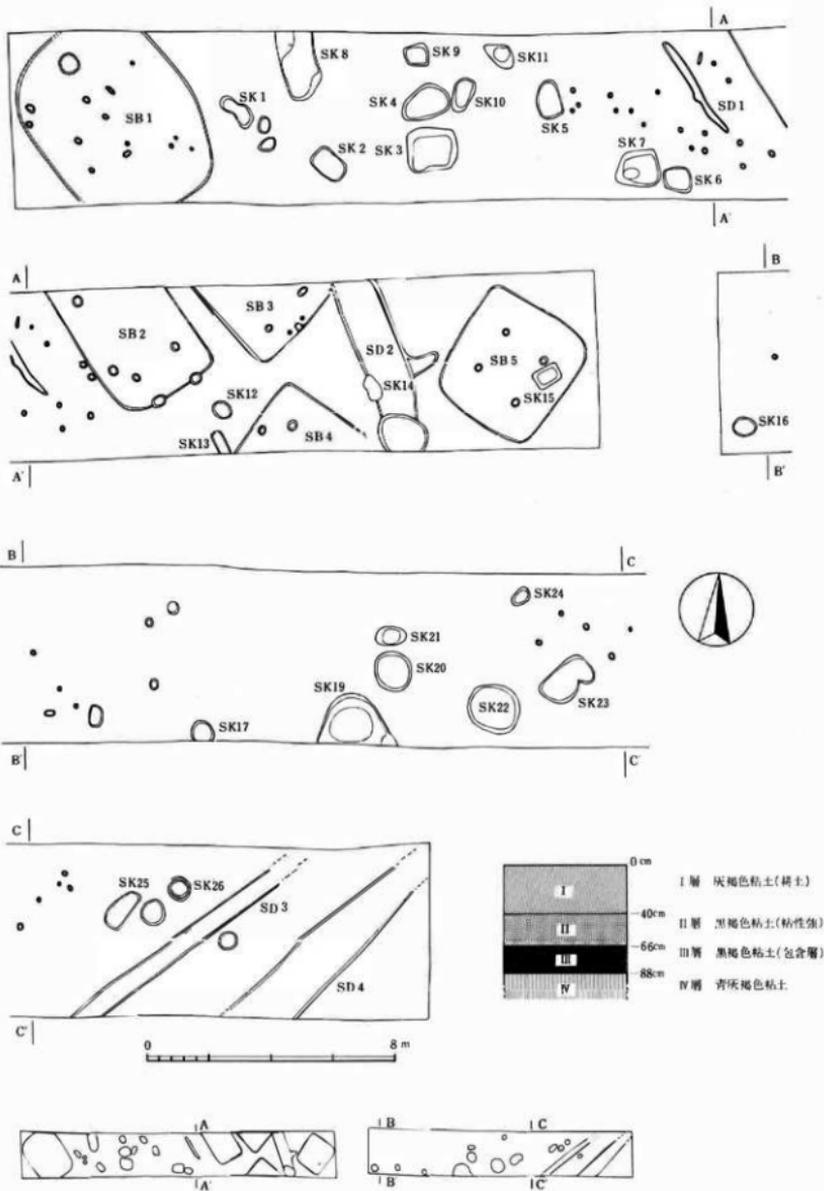


图4 A区遺構全測図 基本土層図

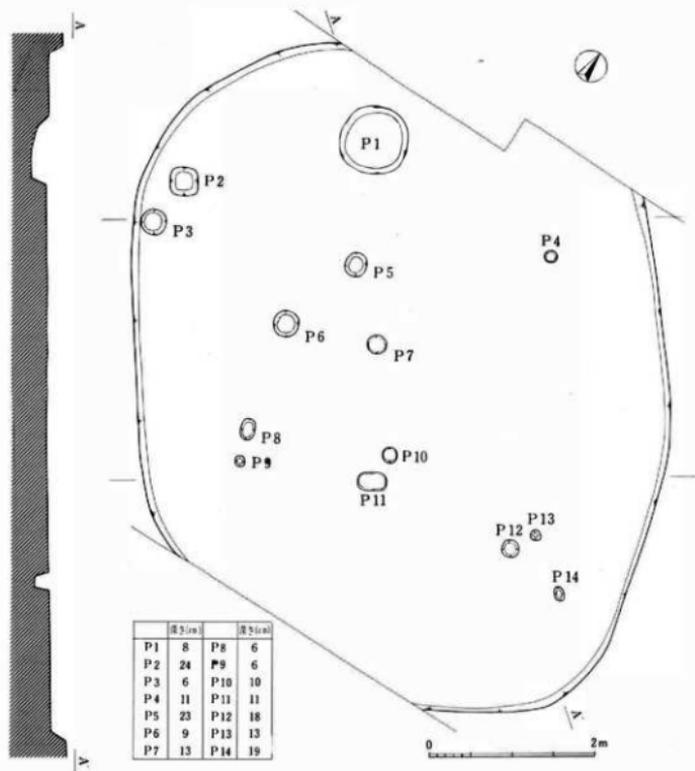


图5 1号住居址实测图

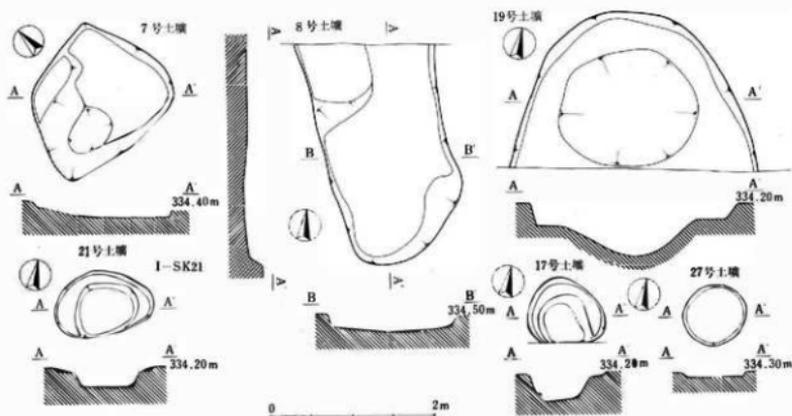


图6 7号·8号·17号·19号·21号·27号土窟实测图

北側は調査区外となるが、平面プランは1.50mほどの不整形長方形を呈する。深さ15cm程で断面は浅い逆台形状を呈する。覆土は黒褐色粘質土一層である。北側は二段にわたる掘りこみがなされ、上段は浅いテラス状を呈する。覆土内より若干の土器破片が出土している。

17号土壌 (図6)

南側は若干が調査区外となるが、平面プランは径0.90mほどの不整形円形を呈する。二段にわたる掘りこみがなされ深さは30cm程である。覆土内より甕(3・4)が出土している。

19号土壌 (図6)

南側は5号が調査区外となるが、平面プランは径2.90mほどの不整形円形を呈すると思われる。二段にわたる掘りこみがなされ上段は深さ25cmを計る。底面は湧水が著しく完全には調査しえなかったが、おそらく65cmほどの深さになると思われる。壺(5~7)・甕(8)・高坏(9)・坏(10)が覆土内より出土している。

21号土壌 (図6)

平面プランは1.20×0.80mの楕円形を呈し、二段の掘りこみがなされる。深さ24cmで覆土は黒褐色粘質土一層である。覆土内より若干の土器破片が出土している。

27号土壌 (図6)

平面プランは径0.75mほどの円形を呈し深さは5cm程と浅い。覆土より若干の土器片が出土している。

3 II期の遺構

2号住居址 (図7)

検出状況：調査区中央付近の住居址集中地区から検出されたもので、北側5号が調査区外となる。形状・規模：長軸約6.50m×短軸4.40mほどの隅丸長方形プランを呈する。主軸はN-46°-Wを計り、後述する3号・4号住居址もほぼ同一の主軸方位をとる点興味深い。床面・壁：床面は住居址中央付近を中心に比較的堅緻に締まっていたが壁際は軟弱である。確認面からの掘りこみは浅く平均7cm前後である。柱穴：P1~P3が検出されている。いずれも主柱穴と考えられ、特に

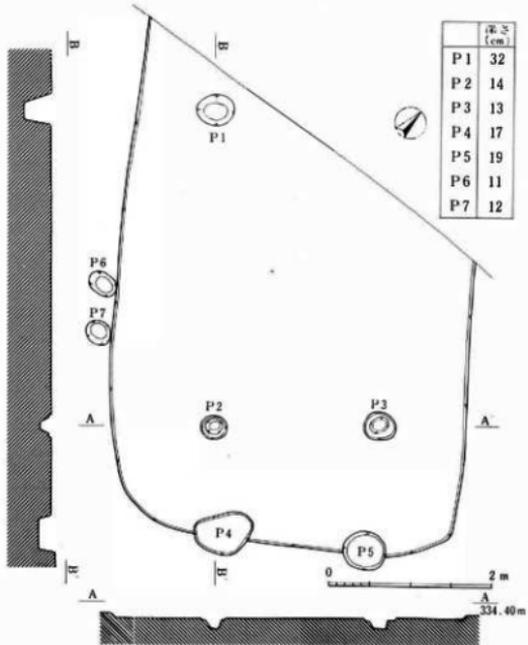


図7 2号住居址実測図

P1には柱根が遺存していた。柱穴配置は4本長方形プランである。またP4～P7は直接本住居址と関わるものか否か調査には明らかにしえなかったが、何らかの壁外施設の痕跡の可能性もある。その他の施設：炉は調査区外となって確認しえなかったが奥壁側柱穴間中央やや壁よりの位置に地床炉の存在が予想される。遺物は小破片がかなり出土しているが図示しうるものはない。

3号住居址 (図8)

検出状況：2号住居址の東側で検出されたもので、東側を2号溝址に切られている。また北側が調査区外となる。形状・規模：長軸は想定で約5.0m、短軸約4.5m程の隅丸長方形プランを呈し、主軸はN-41°-Wである。床面・壁：床面は壁際を除き全体に固く締まっていた。壁高は西壁16cm、南壁15cmで確認面からの掘りこみは平均15cm前後である。柱穴：P1～P5が検出されている。P1・P2は主柱穴と考えられ、柱穴配置は2号住居同様4本長方形プランが予想される。P3～P5は出入り■施設としてとらえられるものである。P4・P5の二本一対の支柱の中央付近に梯子受穴？としてのP3が存在するものと理解したが、P3を梯子受穴とする明確な根拠はない。炉は調査区外となり確認されていない。遺物出土状況：いずれも覆土内からの出土であるが壺口・高環口が出土している。特に高環口は形態的に北陸地方からの影響が強く何れも注目に値する。ただし壺口内面の鋭削り技法の存在を考慮するならば、本住居址はⅢ期に下る可能性もある。

4号住居址 (図9)

検出状況：3号住居址南側で検出されたもので、東側は3号住居同様2号溝址に切られる。南側が調査区外となる。形状・規模：長軸は想定で約5.0m、短軸約4.6m程の隅丸長方形プランを呈し主軸はN-58°-Wを取る。床面・壁：床は住居址中央

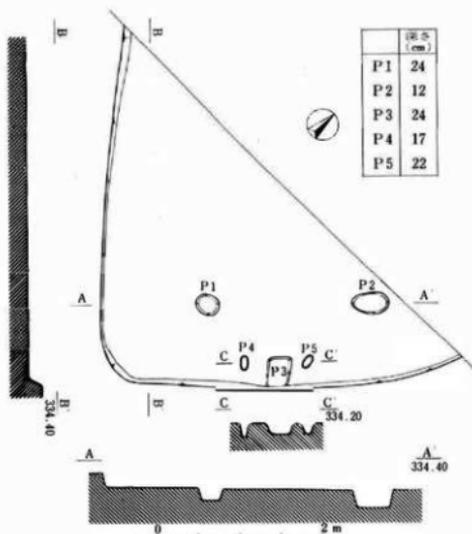


図8 3号住居址実測図

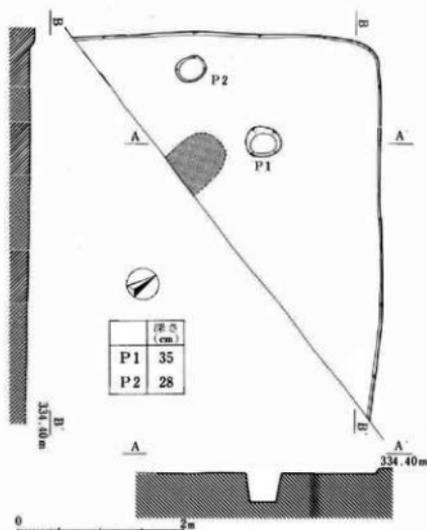


図9 4号住居址実測図

付近を中心に比較的固く締まっているが、壁際は軟弱である。壁高は北西壁5cm、北東壁4cm程で確認面からの掘りこみは平均5cm前後と浅い。柱穴：P1・P2の二本が検出されている。P1は主柱穴、P2は奥壁寄り中心軸上に配された支柱穴と考えられる。その他の施設：炉が一個検出されている。奥壁側柱穴間中央やや内側に位置し、深さ2cm程のレンズ状に掘りこぼめられた地床炉で、焼土・炭化物の堆積が確認されている。床面より壺口が出土している。

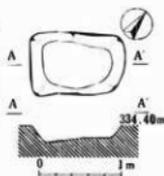


図10 15号土坑実測図

4号溝址(図4)

調査区東端で検出されたもので、同時期の遺跡範囲の東端を画する溝である可能性が高い。南西から北東へ直線的に伸びる形態を呈し、中軸線の主軸はN-47°-Eを計る。確認面からの掘りこみは10cm前後と浅く南側がしだいに深くなる。幅は平均2m程である。覆土内より土器片が出土しているが図示しうるものはない。

15号土坑(図10)

5号住居址の下に確認されたもので1.15×0.75m程の不整長方形を呈する。確認面からの掘りこみは20cm前後で断面逆台形状を呈する。墳底に接した状態で壺口が出土している。

4 III期の遺構

5号住居址(図11)

検出状況：調査区中央付近にて検出されたもので、住居址集中区の東端に位置する。形状・規模：長軸5.20m短軸4.80mの隅丸方形プランを呈し、主軸はN-32°-EとII期の住居址とは異なる。床面・壁：床は住居址中央付近を中心に比較的固く締まっていたが壁際は軟弱である。壁高はいずれも5cm前後で、確認面からの掘りこみは浅い。柱穴：P1～P4が検出されているが、いずれも主柱穴と考えられ、柱穴配置は一辺約2mの4本長方形プランである。住居址中央やや西寄りのところに炉が検出されている。深さ5cm程の

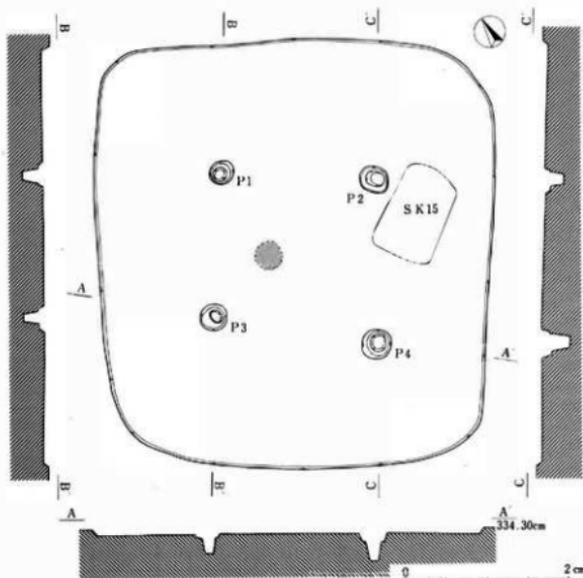


図11 5号住居址実測図

レンズ状に灰と炭化物の堆積が確認され底面はさほど焼き締まっていない。地床炉である。

2号溝址 (図4)

調査区中央付近にて検出された溝で、3号・4号住居址を切って構築され、14号土壌に切られる。南東から北西方向に直線的に伸びる形態を呈し、中心軸の主軸はN-21°-Wを計る。確認面からの掘りこみは平均30cm前後とやや深く、断面逆台形状を呈する。深さは北側に行くにつれだいに深くなる。図示しうる遺物は出土していない。

14号土壌 (図4)

2号溝址を切って構築される。1.0×0.6m程の不整長方形を呈し、深さ22cmを計る。壙底に接した状態で壺(甗)が出土している。

5 その他の遺構 (図12)

遺構名	平面形	規模 (cm)			時期
		長軸	短軸	深さ	
1号土壌	不整楕円形	150	77	25	I
2号土壌	長方形	145	95	15	I
3号土壌	方形	195	175	35	I
4号土壌	楕円形	200	125	15	不明
5号土壌	楕円形	150	105	24	II
6号土壌	方形	115	100	35	II
9号土壌	方形	95	85	14	II
10号土壌	楕円形	143	85	32	不明
11号土壌	不整楕円形	140	8.5	25	不明
12号土壌	円形	85	65	25	不明
13号土壌	長方形	112	50	30	不明
16号土壌	円形	100	80	10	不明
20号土壌	円形	150	155	35	不明
22号土壌	円形	210	190	15	不明
23号土壌	不整長方形	230	140	14	不明
24号土壌	不整楕円形	85	60	18	不明

表1 A区土壌一覧表

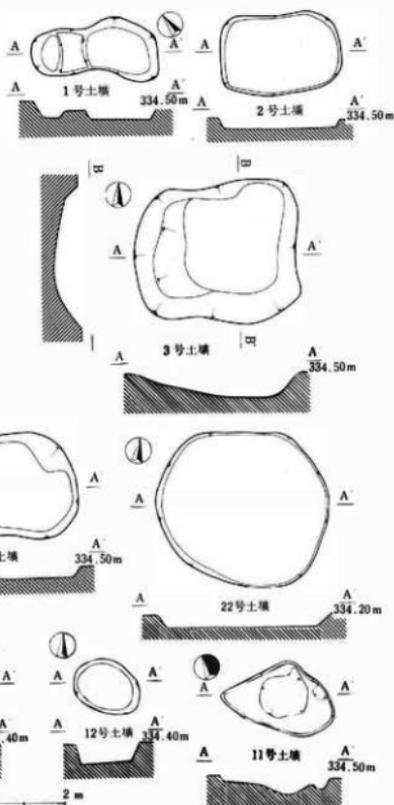


図12 A区土壌実測図

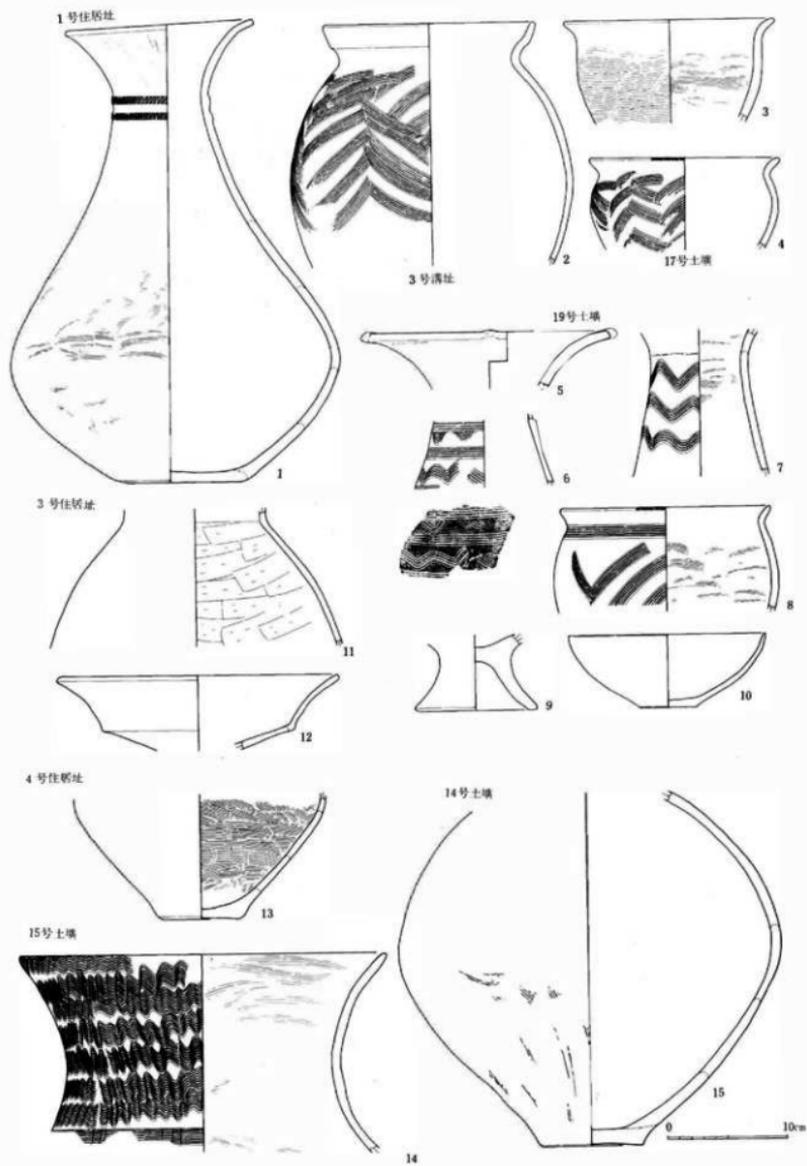


图13 A区出土土器实测图

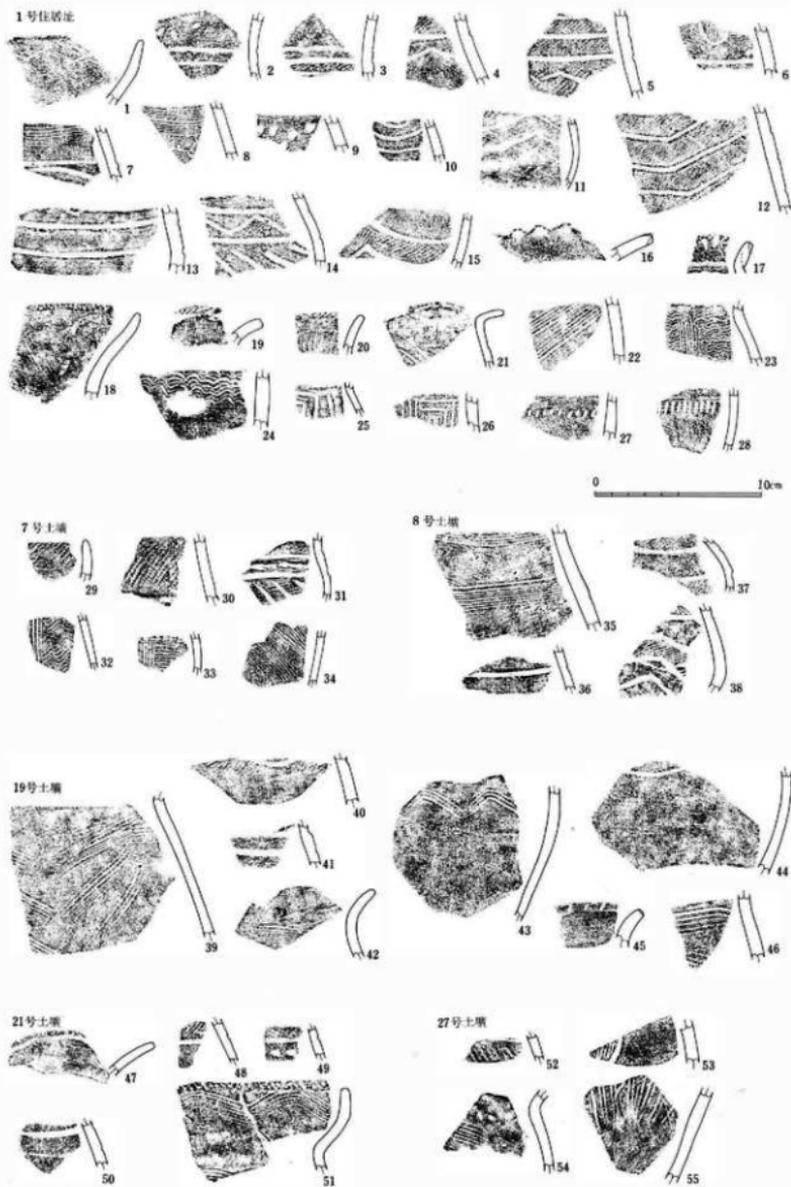


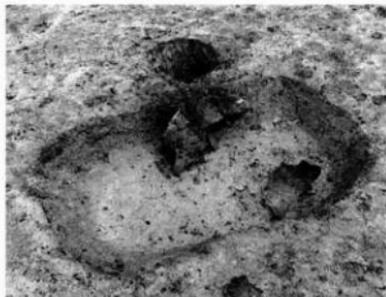
图14 A区出土土器拓影

No	器種	法量 (cm)			遺存度	色調	粘土	成形・調整・文様		備考
		口径	底径	器高				外面	内面	
1号住居址										
1	壺	15.5	10.4		2/3	C	口縁：ハケ→荒磨き 頸：隆帯2→LR縄文 胴：ハケ→荒磨き	ナテ		
3号溝址										
2	甕	17.6			2/3	CD	口縁：ナテ 胴：楕圓羽状文	ハケ→荒磨き		
17号土壌										
3	甕	17.6			2/3	CD	口縁：ナテ 胴：ハケ→ナテ	荒磨き		
4	"	16.0			1/2	D	口唇：LR縄文 口縁：ナテ 胴：楕圓羽状文(右回り)	荒磨き		
19号土壌										
5	壺	20.0			1/4	C	口唇：山形突起 口縁：ハケ→ナテ	ハケ→荒磨き		
6	壺				1/4	F	○ ハケ 楕圓状文2→楕圓直線文3	ナテ		
7	壺				2/3	C				
8	甕	17.6			1/4	D	口唇：LR縄文 頸：楕圓直線文→楕圓羽状文(左回り)	ハケ→荒磨き		
9	高坏		10.0		4/5	D	磨耗不明	磨耗不明		
10	坏	16.4	4.6	6.1	1/3	A	荒磨き・赤彩 底部：荒磨き・赤彩	荒磨き・赤彩		
3号住居址										
11	壺				1/5	C	荒磨き・赤彩	口縁：荒磨き・赤彩 胴：荒磨き→ナテ		
12	高坏	23.0			1/4	B	○ 口唇：面とり 荒磨き・赤彩	荒磨き・赤彩		
4号住居址										
13	壺		7.2		4/5	B	荒磨き・赤彩 底部：荒磨き	ハケ		
15号土壌										
14	甕	30.4			2/3	B	頸：楕圓状文(3連止め) 口縁：楕圓状文7(下→上、区画光順)	ハケ→荒磨き		
14号土壌										
15	壺		8.4		3/4	B	ハケ→荒磨き 底部周辺：荒削り	ナテ		

表2 A区出土土器観察表



1号住居址土器出土状況



15号土壌土器出土状況

2 B区の調査

1 調査概要

B区は、事業予定地内にて唯一畑地が密集して展開する微高地をなしており、調査着手以前より濃密な遺構の分布が予想されていた地点である。

またおそらく遺跡が展開する自然堤防の北東端に位置し、昭和49年度に調査を行なった本調査地より西へ400mの距離にある水内坐一元神社（柳原小学校）遺跡の存在を考慮するならば、A区もあわせ調査区以西の自然堤防上に大規模な遺跡群が展開することが予想される。

今回は道路部分の総面積3,800㎡以上にわたる調査を行なったがⅠ期～Ⅲ期の各時期にわたる多量の遺構が検出されている。

調査区が長大なため、以下便宜的に調査区を1～5区に小区分し、その概要を時期ごとに述べる。

Ⅰ期

1～3・5区において遺構の分布が認められるが、各地区にて検出された遺構には出土土器の様相から大きな時間差は認められず、ほぼ同一時期の集落址と考えてよさそうである。

分布状況からは1・2区と3・5区とに二大別することができる。2区以北の状況は掘乱等のために詳細不明であるが1区と3区の間接地帯は遺構の分布が認められない空白地帯となる。

南側の1・2区では住居址は比較的散漫な分布状況を示し、これとは対照的に北側の3区北半～5区南半は環状に密集した分布状況を示す。仮にこの二者を同一時期に併存した二つの集落として理解することが可能ならば、当該期集落研究において非常に興味深い資料となろう。

Ⅱ期

1・2区にも1軒住居址が検出されているが、分布の中心は3・4区と北側に移行する。3区と4区との間接地帯ならびに4区南半は掘乱等により不明な部分が多いが、SD13以北が主要な分布域となる。

出土土器の中に在地の箱清水式土器の伝統を残すものと古式土師器が併存する例が存在すること等考慮するならば、Ⅱ期～Ⅲ期への移行は同一集落内にて比較的スムーズになされた可能性が考えられる。

Ⅲ期

Ⅲ期同様1・2区にも若干の遺構が分布するが、分

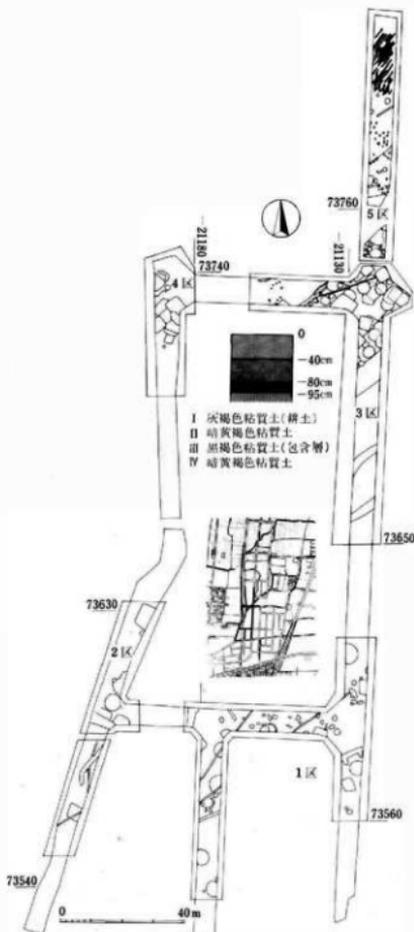


図15 B区全測図

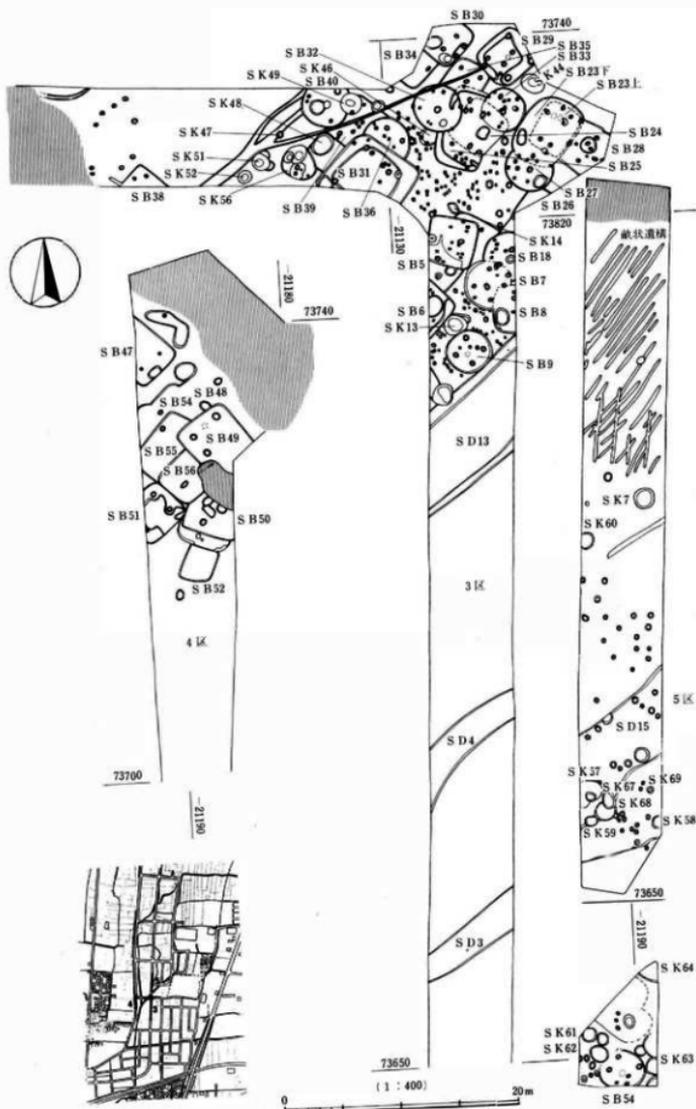


图17 B-3·4·5区全测图

布の中心は3・4区と北側にある。SD13以北が主要な分布域であるが、5区のSD15とした広大な溝状の落ち込みが集落域の北側を画している可能性が高い。住居址ならびに溝址から大量の土器群が出土しているが、東海系・北陸系を中心にながりの量の外來系土器群が含まれ、当該期の広範な交流の一端を垣間見せる。

2 1期の遺構

1号住居址 (図18)

検出状況：1区東南端で検出された住居址で、北西隅が一部調査区外となるがほぼ全堀しえた。形状・規模：長軸4.30m、短軸3.80mのやや不整な隅丸方形プランを呈する。検出当初は土壇状の落ち込み遺構かと思われたが中央付近に焼土と炭化物の堆積を有するピットが検出されたので住居址と認定した。主軸はN-21°-Wを測る。床面・壁：床面は全体に軟弱で、明瞭な床施設は認められない。壁高は東壁15cm・西壁20cm・南壁18cm・北壁16cmと、確認面からの掘りこみは平均20cm前後である。柱穴：主柱穴等検出されていないが住居址中央やや北寄りの位置に、焼土と炭化物の堆積を有する径18cmのピットが検出されている。炉とする明確な根拠はないが二段にわたる掘りこみを有し深さ19cmである。覆土内より深鉢(16)が出土している。

2号住居址 (図19)

検出状況：1区東側で検出された住居址で東側1/3程が調査区外となる。また北側を近世溝に切られる。形状・規模：径4.90m程の円形プランを呈する。床面・壁：床面は全体に軟弱で、貼り床等の施設は認められなかった。壁高は北壁16cm・西壁10cm・南壁16cmで確認面からの掘りこみは平均20cm程である。

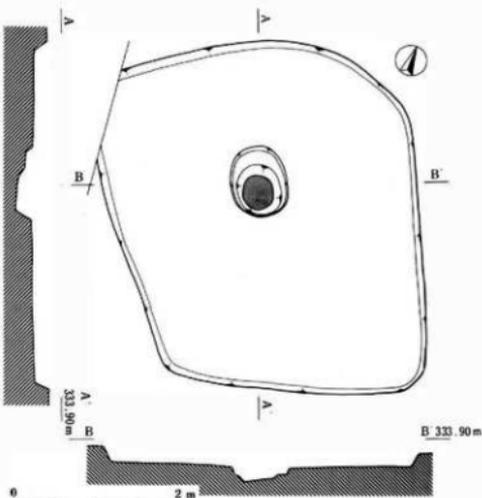


図18 1号住居址実測図

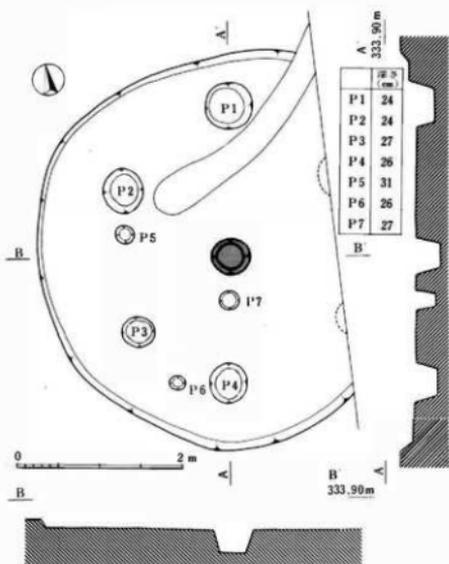


図19 2号住居址実測図

柱穴：P1～P7が検出されている。主柱穴はP1～P4で炉を中心として6本の同心円状の配列が予想される。P5～P7は支柱穴と考えられるものであるが、配置は不規則である。炉：住居中央付近に地床炉が一個検出されている。径50cm程の円形をなし、深さ27cmである。内部には灰・炭化物・焼土の堆積が認められたが底面はさほど焼き締まっていない。覆土内から土器破片が出土しているが図示しうるものはない。

4号住居址 (図20)

検出状況：1区北東端で検出された住居址で、西側1/2程が調査区外となる。本住居址より北は同時期遺構の空白地帯が広がり明確なものでは9号住居址まで遺構が存在せず、1期に併存する二つの集落が存在した可能性のあることは前節にて述べたとおりである。形状・規模：径6.90mのやや不整な円形プランを呈し、本遺跡で検出された1期の住居址の中ではもっとも大型である。床面・壁：床面は住居址中央部を中心として主柱穴間内部が比較的締まっていたが、壁際は軟弱である。貼り床等の施設は認められなかった。壁高は北側15cm・東側17cm・南側17cmを測り、確認面からの掘りこみ平均15cm前後である。覆土は7層から構成されるが、基本的にはレンズ状の自然堆積としてとらえられる。柱穴：P1～P10が検出されているが大型住居であるためか、主柱穴は炉を中心

に二重に配置される。内側はP6～P8で4本～5本の同心円状の配置が予想され、外側はP1～P5で8本の同心円状の配置が予想される。P9は規模・深さとも主柱穴と大きな変化はないがその性格は不明である。炉：住居址中央に地床炉が一個検出された。1/2が調査区外となるが径65cm程の円形を呈すると思われ、深さ14cmである。内部には灰・炭化物・焼土の堆積が認められ底面もかなり焼き締まっていた。遺物出土状況：覆土内より壺(17)・甕(18・19)が出土している。また住居址東側の壁際で床面より若干浮いた状態で磨製石鏃(6)・扁平片刃石斧(43)・打製横刃型石器(45)・打製石錐(14)が出土している。

7号住居址 (図21)

検出状況：3区にて検出された住居址で、北東は18号住居址に、南東を8号住居址に切られ一部に擾乱をうける。形状・規模：径4.40mのやや不整な円形プランを呈する。床面

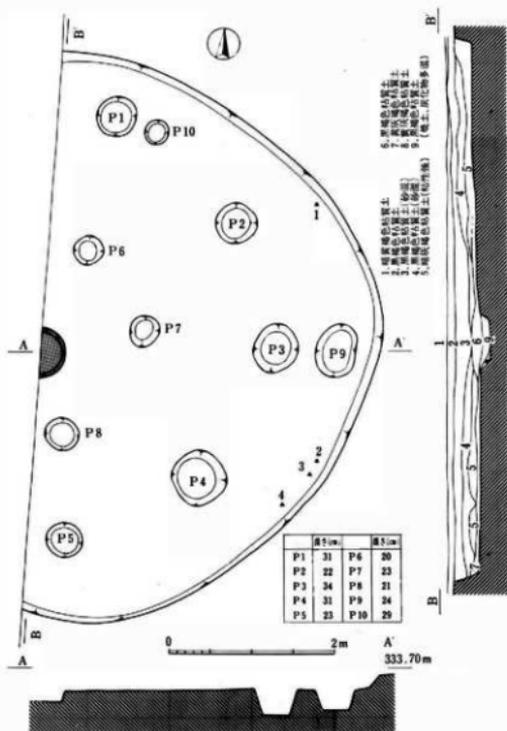


図20 4号住居址実測図

・壁：床面は全体に固く締まっており良好な状況を呈していた。壁高は西壁27cm・南壁39cmを測り、確認面からの掘りこみは平均30cm程である。西壁と南壁際に壁周溝が検出されている。南壁際のは幅15cm・長さ2.30m・深さ7cm、西壁際のは幅6cm・長さ1.50m・深さ3cm程である。柱穴：P1～P8が検出されている。主柱穴はP1～P4と考えられ、柱穴配置は一辺2.0mの方形プランである。P5・P6は住居中の軸線上に配される支柱穴

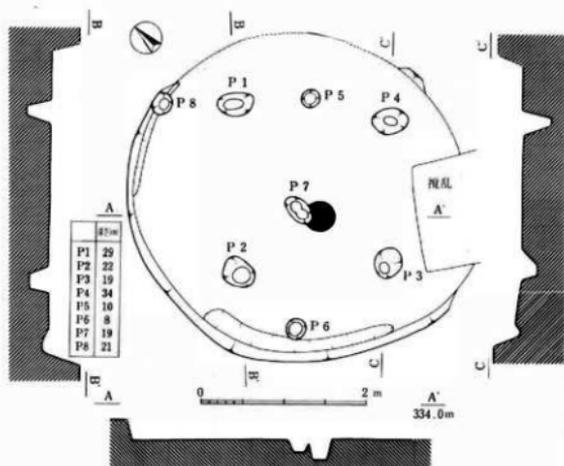


図21 7号住居実測図

と考えられ、P7もその可能性が考えられる。P8は壁際に配される支柱穴の可能性があるが他には検出されておらず詳細は不明である。炉：住居中央やや南寄りの位置に地床炉が一個検出されている。径40cm程の円形で焼土・炭化物が検出されているがさほど焼き締まてはいない。遺物出土状況：床面付近より壺(20-35)・甕(36-48)・蓋(49)・鉢(50・51)・坏(52-54)・高坏(55)が出土している。

9号住居址 (図22)

検出状況：3区住居址集中区南端で検出され、北西隅を13号土壌に切られる。形状・規模：径4.0mの円形プランを呈する。床面・壁：床は全体に堅緻に締まっており良好な状態であった。壁高は東側17cm・西側15cm・南側19cm・北側16cmで平均18cm程である。壁周溝が全周しており、幅20cm・深さ5cm平均である。柱穴：P1～P7が検出されている。主柱穴と考えられるのはP1～P4で柱穴配置は一辺1.80mの方形プランである。P5～P7は支柱穴だが配置が不規則で詳細は不明。炉：住居中央やや南寄りの位置に地床炉

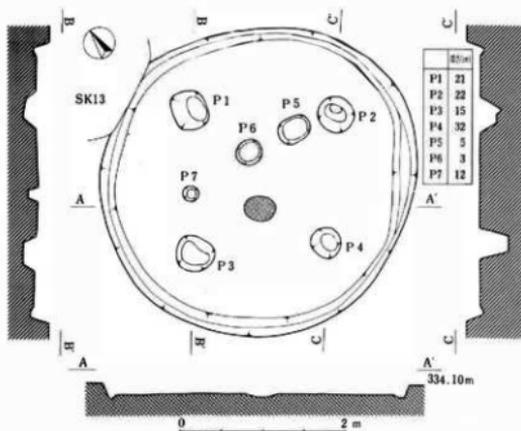


図22 9号住居実測図

が一個検出されている。40～30cm程の楕円形を呈し、掘りこみは5cm程と浅い。土器破片が出土しているが図示しうるものはない。

13号住居址 (図23)

検出状況：1区南西端で検出された住居址で西側が程が調査区外となる。形状・規模：長軸5.30m、短軸4.80mのやや楕円に近い円形プランを呈する。床面・壁：床面は全体に軟弱で不明瞭である。壁高は東側12cm・南側12cm・北側13cmで確認面からの掘りこみは平均12cm程である。柱穴：P1～P9が検出されている。P1～P4を主柱穴と考えたが、やや南側に片より、配置も不整形な点疑問が残る。P7～P9は支柱穴と考えられるがP5・P6は性格不明である。炉は検出されていない。覆土内より甕(56)が出土している。

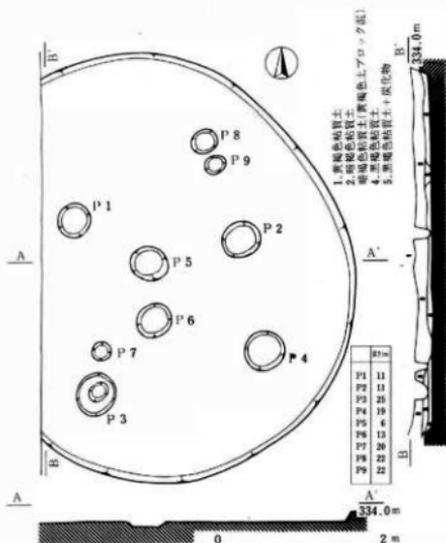


図23 13号住居址実測図

14号住居址 (図24)

検出状況：1区南西端にて検出された住居址で東側が程が調査区外となる。形状・規模：径5.10mのやや不整な円形プランを呈する。床面・壁：床面は全体に軟弱で不明瞭なものだが、住居址中央付近を中心にやや固く締まった部分も認められた。壁高は西側8cm・南側19cm・北側13cmで、確認面からの掘りこみは平均15cm程である。柱穴：P1～P8が検出されている。主柱穴と考えられるのはP1～P3で、柱穴配置は一边2.50m程の方形プランが予想される。P5～P8はそれぞれ主柱穴間に二個一対づつ配置された支柱穴と考えられる。東側は不明だが、あるいは主柱穴間に同心円状に配置されていた可能性も考えられる。P2は

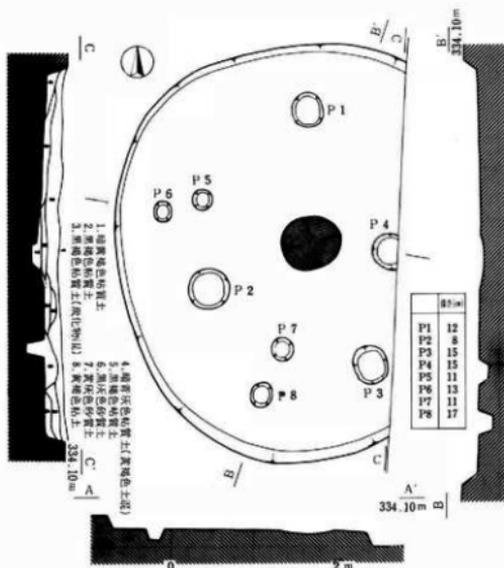


図24 14号住居址実測図

掘りこみ規模も浅く主柱穴とは考えられないがその性格は不明である。炉：住居址中央付近に地床炉が一個検出されている。75×60cmの楕円形を呈し、5cm程のレンズ状に掘り窪められている。内部には炭化物、焼土の堆積が認められた。覆土内から土器小破片が出土しているが図示しうるものはない。

15号住居址 (図25)

検出状況：1区西側で検出された住居址で東側は外程が調査区外となり、また住居址中央部を8号溝址に切られる。床面・壁：床面は全体に軟弱で不明瞭である。住居址北側の壁際に長さ2.50m、幅0.90mの浅い落ち込みが認められたが、何らかの施設であるのかまたは攪乱であるのか明らかにはしえなかった。確認面からの掘りこみは浅く壁高は平均5cm程である。柱穴：P1・P2が検出されたのみである。共に掘りこみは浅く性格不明である。その他本住居に直接関連する施設は検出されておらず、本遺構を住居址とする積極的な根拠はない。覆土内から若干の土器破片が出土しているが図示しうるものはない。

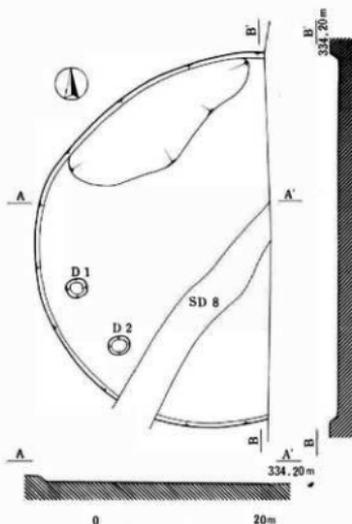


図25 15号住居址実測図

18号住居址 (図26)

検出状況：3区で検出された住居址で、7号住居址のうゑに構築されている。東側外程が調査区外となる。形状・規模：長軸5.0m、短軸4.30m程の楕円形プランが予想される。床面・壁：床面は住居址中央付近を中心に比較的堅緻に締まっていたが貼り床等の施設はなされていない。壁高は西壁21cm・南壁12cm・北壁10cmを測る。覆土は4層が認められるが基本的にはレンズ状の自然堆積ととらえられる。柱穴：P1～P10が検出されている。主柱穴と考えられるのはP1～P3で、柱穴配置は6本同心円状が予想される。P5は支柱穴と考えられる。P9は内部に焼土の堆積が確認されているが性格は不明である。P10は位置的には炉の可能性が考えられるが焼土・炭化物等確認されていない。覆土内より壺・鉢・坏(83～86)が出土している。

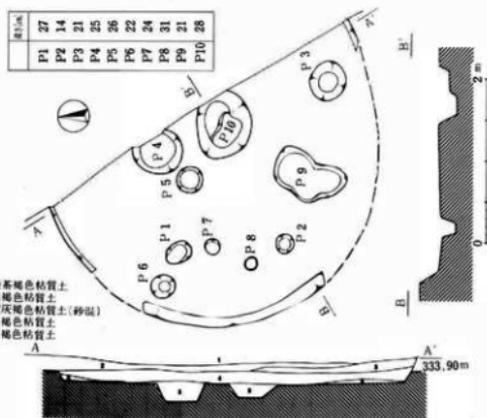


図26 18号住居址実測図

19号住居址 (図27)

検出状況：1区西側に検出された住居址で、東側4程が調査区外となり南半を2号溝址に切られる。形状・規模：径5.90mの円形プランを呈すると思われ、やや大型の住居址である。床面・壁：床面は全体に軟弱で不明瞭なものである。貼り床・周溝など特別の施設は検出されていない。壁高は西壁20cm・南壁13cm・北壁23cmを測り、確認面からの掘りこみは平均20cm程である。柱穴：P1～P9が検出されているが、主柱穴と考えられるものはP1～P5である。主柱穴配置は8本の同心円状が予想され、柱穴間の距離は平均1.50m程である。P7～P9は支柱穴と考えられるもので、特にP8・P9の位置から主柱穴間内部に方形に支柱が配される可能性も考えられる。また本住居址では炉はおそらく

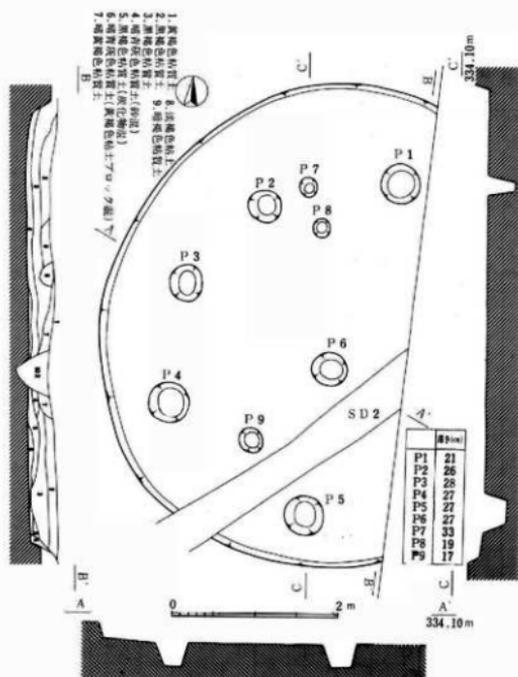


図27 19号住居址実測図

調査区外となって検出されていないが、P6の存在を考慮するならば、4号住居址同様炉の周囲にさらに柱穴が配されていた可能性も考えられよう。覆土内より壺(57)・甕(58)・坏(59)が出土している。

20号住居址 (図28・29)

検出状況：2区中央付近に検出された住居址で、北東隅は一部調査区外となりまた攪乱を受ける。B区南半で検出されて1期の住居址の中では41号住居址とともにもっとも西側に位置するもので、南側集落の西端となる可能性もある。形状・規模：径5.50mのやや不整な円形プランを呈する。床面・壁：床面は壁際を除いて全体に堅緻に締まっており比較的良好な状況であった。ただし貼り床等の特別な施設は認められない。壁高は東側43cm・西側47cm・南側36cm・北側52cmで確認面からの掘りこみは平均42cm前後と非常に深い。壁面は直に近く掘りこまれていたが、南側はやや不明瞭であった。柱穴：P1～P7が検出されている。主柱穴と考えられるものはP1～P6で主柱穴配置は6本の同心円状である。また各柱穴間の距離は平均1.80m程である。柱穴はいずれも径25cmと小さいが、掘りこみは30cm前後でしっかりしたものであった。P7は支柱と考えたが、あるいは炉に伴う何らかの施設かもしれない。炉：住居址中央やや南西よりの位置に、切りあった二つの炉が検出された。切りあい関係からは北側の炉のほうが新しい。ともに地床炉で深さは南側32cm・北側36cmとかなり深く、断面船底型を呈する。内部には炭化物と焼土の厚い堆積が確認されている。遺物出土状況：本住居址は焼土住居であり、床面直上と覆土上層からきわめて多量の土器が良好な状態で出土している。住居址の覆土は基本的には第2～5層の4層ととらえることができる。第4層は粘性の強い黒褐色粘質土で、同層下半には多量の炭化材・炭化物を含み、



図28 20号住居址土器出土状況実測図

床面直上として扱った土器も第5層に接した4層下半より出土したものである。4層上面には第3層とした薄い炭化物層が確認されており、上層出土として扱った土器群はこの層より出土している。土器の出土状況は床面直上のもに比べて比較的細かく破砕されている。住居址の埋没過程のある時点で火を焚き土器を破砕して投棄したような何らかの祭祀行為に伴うものである可能性も考えられる。床面直上より出土した土器は、土圧によって押し潰されたものが多いが比較的原形をとどめた状況で出土している。出土位置は大きく北西と南東の壁よりの地点に二分できる。出土器種の構成を比較してみると、前者は広口壺1・甕2・台付甕2・甕用蓋1・片口鉢1であり、後者は壺1・無形壺1・短頸壺1・甕2である。炉の周囲に近い北西側に煮沸用の器種が集中する点は、住居址内の空間利用を推察するうえで示唆的なあり方を示している。床面直上からは壺・甕(60・61・63・64)・甕(65-71)・坏(62)・片口鉢(72)・蓋(73)が、上層からは壺(74・75・81・82)・甕(76・80)・蓋(78)・片口(77)・高坏(79)が出土している。また覆土内からではあるが、指輪状の石製品(51)が出土している。

27号住居址 (図30・31)

検出状況：3区住居址集中区中央付近にて検出されたもので、北側4程を23号下層住居址に切られる。20号住居址同様焼火住居であるが、B区北半住居址群中で焼火住居は本住居址のみである。形状・規模：径4.30mの円

形プランである。

床面・壁：床面は住居中央付近を中心に比較的固く締まっていたが壁際は軟弱である。壁高は全体に低く確認面からの掘りこみは平均10cm前後である。柱穴はP1～P8が検出されている。比較的小型の住居址であるので、主柱穴配置は4本方形か6本の同心円状が予想されるが、検出された柱穴の位置はいずれも不規則で、主柱穴配置

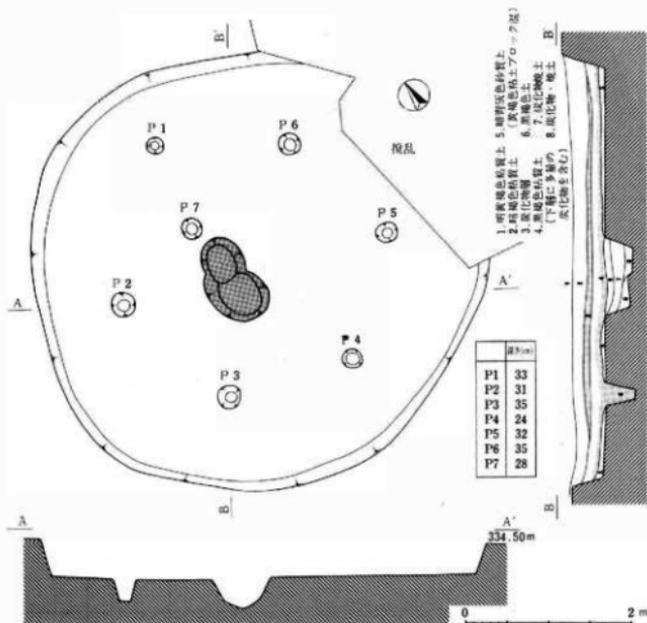


図29 20号住居址実測図

を明確に把握しえなかった。P1～P3のあるものは23号下層住居址に伴うものである可能性もある。P9は1.30×1.00m、深さ28cm程の不整形を呈する土壇状の落ち込みであるが際立った遺物の出土もなく性格は不明である。遺物出土状況：前述のごとく焼失住居であり、多量の炭化材と土器が出土している。炭化材は切り合いのない南側の壁際を中心に検出され、また土器は南東壁よりのところに集中箇所が認められる。床面直上より甕(91～102)・甕(103～106)・台付甕(107～114)・蓋(115・116)・底部穿孔鉢(117)・坏(118～120)が出土している。

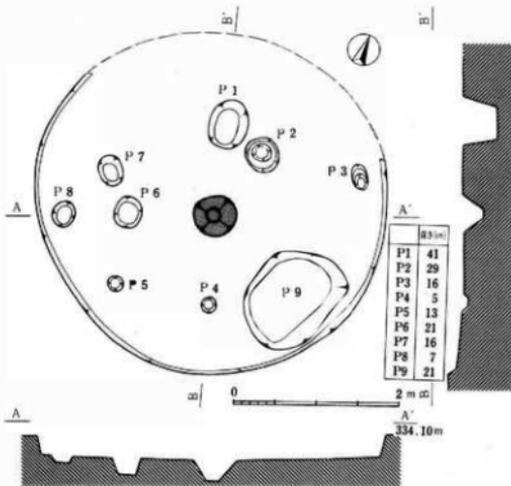


図30 27号住居址実測図

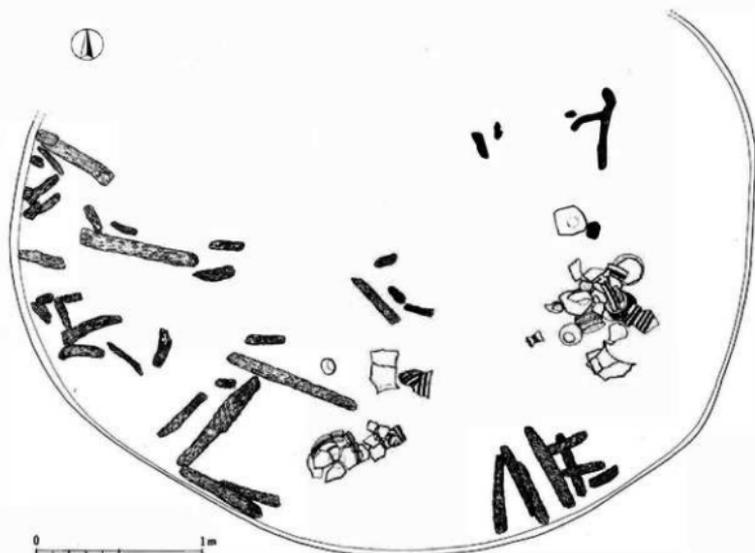


図31 27号住居址炭化材・遺物出土状況実測図

32号住居址 (図32)

検出状況：3区住居址集中区の中央付近に位置し、25号・35号住居址の下に検出されたものである。北東隅を溝址に切られる。形状・規模：径4.10m程の円形プランを呈する。床面・壁：床面は住居址中央付近を中心比較的固く締まっていたが、壁際は軟弱である。壁高は西壁39cm・南壁6cm・北壁22cmで確認面からの掘りこみは平均20cm前後である。柱穴：P1～P8が検出されているが、P1～P5が主柱穴の可能性が高くP6は支柱と考えられる。主柱穴配置は6本の同心円状が予想される。P8は深さ10cm程の不整形な落ち込みみであるが本住居に伴うものか不明である。炉は住居址中央付近に地床炉が一個検出されている。径50cmの円形で深さ10cmである。図示する遺物は出土していない。

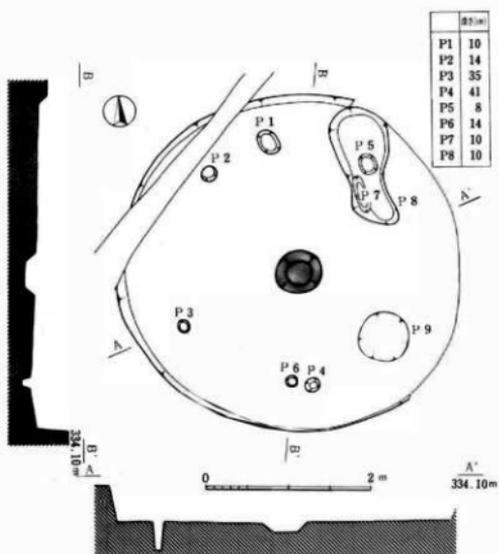


図32 32号住居址実測図

33号住居址 (図33)

検出状況：3区住居址集中区中央付近に位置し、24号・25号住居址の下に検出されたものである。形状・規模：径3.80m程の隅丸方形に近い円形プランを呈する。床面・壁：床面は全体に固く締まっていたが壁際はやや軟弱である。壁高は遺存状況のよい北側で22cmを測り、確認面からの掘りこみは平均20cm程である。南西は大半が上の住居址に破壊されかろうじて床面を確認したのみである。柱穴：P1～P12が検出されている。主柱穴と考えられるものはP1～P4で主柱穴配置は4本方形プランである。また主柱穴間の距離は平均1.80m程である。P5・P6は支柱穴と考えられる。住居址中央付近にあるP7～P9は本住居址に伴うものか不明である。壁際に検出されたP10～P12は壁支柱の可能性もあるが、いずれも北西に片より詳細不明である。北西壁際に壁周溝が確認されている。幅20cm・深さ5cm程のもので、 $\frac{1}{4}$ 円弧のみである。炉：住居址中央付近に地床炉が一個検出されている。径55cmの円形で、深さ20cmである。覆土内より土器破片が出土しているが図示しうものはない。

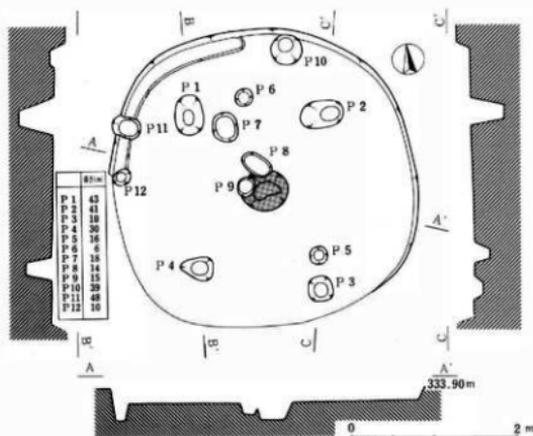


図33 33号住居址実測図

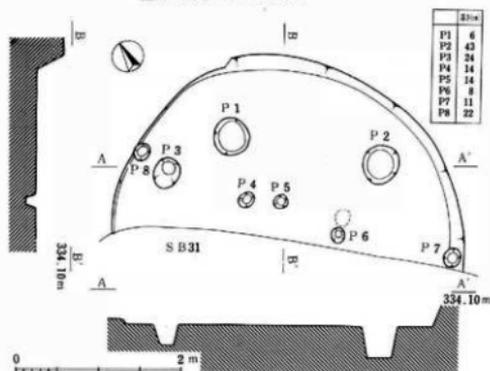


図34 36号住居址実測図

38号住居址 (図34)

検出状況：3区住居址集中区中央付近に位置する。31号・39号住居址に切られ北側 $\frac{1}{2}$ 程を検出したにすぎない。形状・規模：径4.30mの円形プランである。床面・壁：床は全体に比較的締まっていたが壁際はやや軟弱なものとなる。壁高は北側で32cmを測り、確認面からの掘りこみは平均30cm程である。西側はほとんどが39号住居址によって破壊されており、かろうじて床面を確認したのみである。柱穴：P1～P8が検出されている。主柱穴と考えられるものはP1・P2で主柱穴配置は4本方形から6本の同心円状が予想される。柱穴間の距離は1.80mである。P4～P6は支柱穴、P7・P8は壁支柱ととらえられようか。炉は検出されていないがP6の北側に若干の焼土の堆積が確認されている。覆土内より壺(122・123・124)・甕(121)・甕用蓋(124)が出土している。また(421～426)は39号住に混入していたものであるが、本住居址出土の可能性が高い。

40号住居址 (図35)

検出状況：3区住居址集中区西側で検出されたもので、B区北半に展開するI期集落の西端に位置する。39号住居址の下に検出された。形状・規模：径4.10mのやや不整な円形プランを呈する。床面・壁：床面は全体に固く締まっている。壁高は西壁15cm・南壁15cm・東壁10cmで確認面からの掘りこみは平均15cm程である。柱穴：P1～P4が検出されているが明確に主柱穴ととらえられるものはなく、主柱穴配置は不明である。P5は径1.20m・深さ45cmの不整な円形を呈する土壇状の落ち込みであるが、際立った遺物の出土もなく性格不明である。また本住居に直接伴う可能性が高い。炉：住居中央やや南寄りの位置に地床炉が一個検出されている。径70cmの円形を呈し、レンズ状に5cm程掘り窪められている。内部には焼土と炭化物の堆積が確認されている。覆土内より土器破片が出土しているが図示しうるものはない。

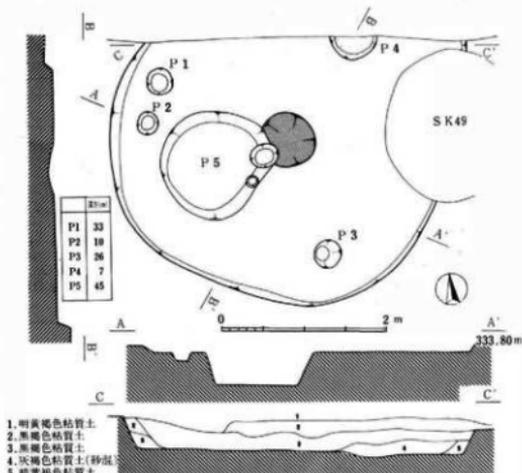


図35 40号住居址実測図

54号住居址 (図36)

検出状況：5区南端にて検出されたもので、B区北半に展開するI期集落の北端に位置する。南側は若干が調査区外となり、西側は

トレンチによって破壊してしまった。形状・規模：長軸4.0m、短軸3.40mの小判型を呈する。床面・壁：床面は住居中央部分を除いて全体に軟弱で不明瞭なものであった。壁高は北壁14cm・東壁14cmを測る。柱穴：P1～P6が検出されている。主柱穴と考えられるのはP1～P4で、主柱穴配置はやや不整な4本長方形プランを呈する。主柱穴間の距離は長軸2.0m、短軸1.70m程である。P5・P6は支柱穴と考えられるが、P5はあるいは炉に伴う何らかの施設に関連する可能性もある。炉：住居中央南寄りの柱穴間に、地床炉が一個検出されている。40cm×60cmの楕円形を呈し、5cm程のレンズ状に掘り窪められている。内部には炭化物と焼土の堆積が確認されている。遺物出土状況：床面より壺(126)・甕(127)が出土している。

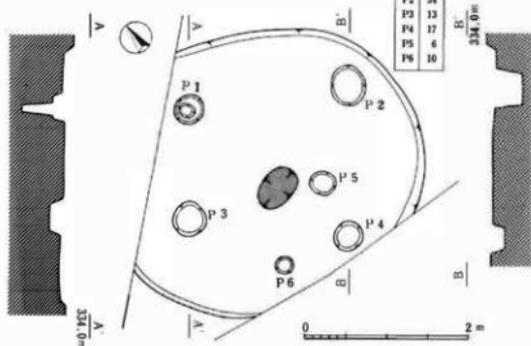


図36 54号住居址実測図

23号下層住居址

(図37)

検出状況：3区住居址中央区西側で検出された住居址で、南側は27号住居址を切り東側は28号住居址に切られる。また本住居址調査中に別の遺構の床面が検出され、これを23号上層住居址として扱った。形状・規模：長軸6.40m、短軸4.60mの隅丸方形に近い長楕円形プランである。主軸はN-7°-Eである。床面・壁：床面は全体に比較的堅緻に締まっていたが、壁

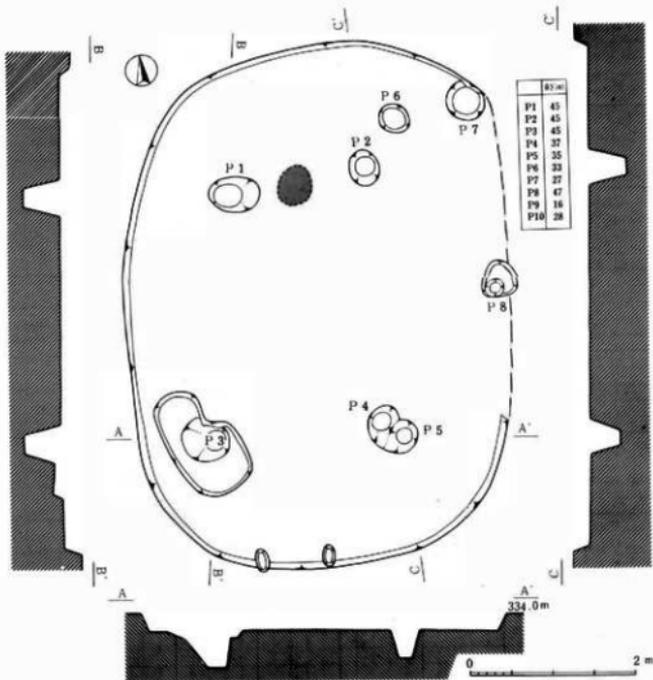


図37 23号下層住居址実測図

際はやや軟弱である。壁高は西壁23cm・北壁12cmを測り検出面からの掘りこみは平均20cm程である。柱穴：P1～P10が検出されている。主柱穴と考えられるものはP1～P4もしくはP5であり、主柱穴配置は4本長方形である。柱穴間の距離は長軸3.00m、短軸1.70mである。南壁際に検出されたP9・P10は梯子受け穴等の出入り口施設に関連する可能性が考えられる。P6～P8は本住居に直接伴おぬものかもしれない。炉：奥壁側柱穴間中央に地床炉が一個検出されている。径50cm程の不整形円形で、5cm程のレンズ状に掘り窪められている。内部には焼土の堆積が確認されている。覆土内から高坏(87)・台付甕(88・90)・甕用蓋(89)が出土している。また床面直上より鉄石英製の管玉が1点出土している。

10号溝址 (図38)

1区西側にて検出されたもので、半円形の溝址である。幅は平均40cm、深さ20cmを測る。当初住居址の壁周溝とも考えたが、他に何らの施設も検出されず、またこの溝址に直接関係すると思われる土塊・柱穴等も存在せずその性格は不明である。同じ1区中央付近にある11号溝址も同様のものと考えられる。底部に接した状態で短頸壺(128)が出土している。

6号土壇 (図38)

1区北側にて検出されたもので、長軸3.80m・短軸1.50m程の不整形円形を呈する。二段にわたる掘りこみを

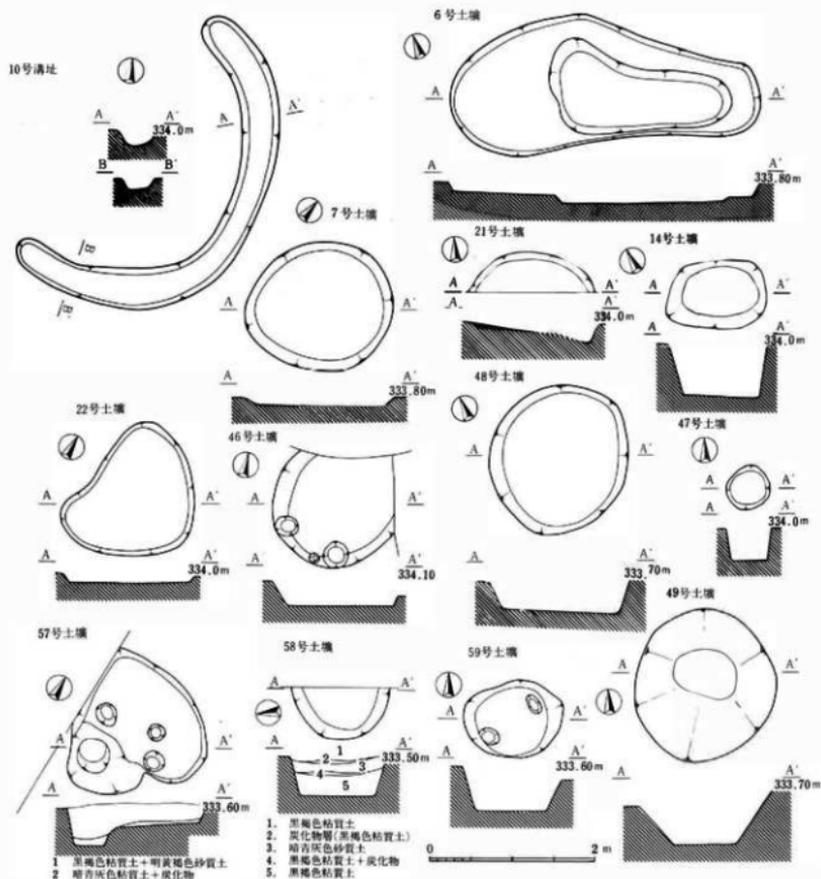


図38 1期溝・土壌実測図

有し、最深部では25cmを測る。墳底より若干浮いた状態で甕(129)・台付甕(130・133)・壺(132)・坏(131)が出土している。

7号土壌 (図38)

1区北側にて検出されたもので、6号土壌の北側に位置する。径1.80mの円形を呈し深さ10cm程である。覆土内より甕(134)が出土している。

14号土壌 (図38)

3区住居址中央付近にて検出されたもので、長軸1.20m・短軸0.85m程の不整形を呈する。確認面からの掘りこみは60cmとやや深く、断面逆台形状を呈する。覆土内より壺(135・137~140)・甕(141)・底部穿孔鉢(136)が出土している。

21号土墳 (図38)

1区中央付近にて検出されたもので、南側は1/2程が調査区外となる。長軸1.50m程の円形もしくは楕円形プランが予想される。確認面からの掘りこみは8cm程と浅いが西側壁際のみ深く落ち込み22cmを測る。覆土内より碧玉製管玉が2点出土している。出土土器は小破片が若干あるのみで時期の特定は不可能だが、1期の墓址である可能性が高い。

22号土墳 (図38)

1区中央付近にて検出されたもので、長軸1.60m程のやや不整な隅丸の三角形状を呈する。確認面からの掘りこみは浅く8cm程である。覆土内より土器破片がかなりの量出土している。

30号土墳 (図38)

1区中央付近にて検出されたもので、径1.50mの円形を呈する。確認面からの掘りこみは浅く8cmである。覆土内から碧玉製管玉が1点出土している。出土土器は若干の小破片があるのみで時期の特定は不可能だが、21号土墳同様1期の墓址である可能性が高い。

46号土墳 (図38)

3区住居集集中区中央付近より検出されたもので25号住居址に切られる。短軸1.50m・長軸2.00m程の楕円形プランが予想される。確認面からの掘りこみは30cmとやや深く断面逆台形状を呈する。覆土内より甕(142)・壺(143・144)ならびに磨製石剣の未製品が1点出土している。

47号土墳 (図38)

3区西側で検出されたもので上部を他の溝址に切られる。径50cm程の円形を呈し深さ39cmとやや深い。内部はいわゆる土器溜状を呈しており、完形の壺2点(150・151)・底部穿孔鉢1点(152)をはじめとして、かなりの量の土器破片が出土している。

48号土墳 (図38)

3区西側で検出されたもので、径1.80mの円形を呈し深さ50cmである。覆土内より土器破片がかなり出土している。

49号土墳 (図38)

3区西側で検出されたもので、40号住居址を切っている。径1.90mの円形を呈し深さ90cmである。覆土内より壺(145・147)・坏(146)が出土している。

57号土墳 (図38)

5区15号溝址の下で検出されたもので、長軸1.60m程の不整形な落ち込みである。二段にわたる掘りこみを有し最深部で深さ45cmを測る。墳底に接した状況で壺(153～155)・甕(156・157)・高坏(158・159)が出土している。

58号土墳 (図38)

5区15号溝址の下で検出されたもので東側は調査区外となる。径1.20mの円形を呈し深さ48cmである。覆土は5層よりなり、4層の炭化物層を中心に壺(160・161・163)・甕(162)が出土している。

59号土墳 (図38)

5区15号溝址の下で検出されたもので、58号土墳の南に位置する。長軸1.20m・短軸0.90mのやや不整な楕円形を呈し、深さ54cmと深い。内部に深さ10cmの2個のピットを有する。覆土より壺(164)が出土している。

3 日期の遺構

6号住居址 (図39)

検出状況：3区住居址集中区南側で検出されたもので、南西側が調査区外となる。また住居址中央部分を他の土壌に切られる。形状・規模：短軸3.50m程の隅丸長方形プランが予想される。主軸は $N-75^{\circ}-E$ を測る。床面・壁：床面は全体に軟弱で不明瞭なものである。東壁側は周溝状に一段深く掘り下げられており、幅平均50cm・深さ18cm程である。これは北隅にも認められ、西壁際も一段深く掘り下げられていた可能性がある。柱穴：P1～P5が検出されているがいずれも位置的には不規則なもので、主柱穴配置は不明である。壁高は北壁22cm・東壁17cmを測る。覆土より壺(165～168・171～173)・甕(169・170)・底部穿孔鉢(174・175)・甕用蓋(176)・高坏(177～179)・坏(180～183)が出土している。

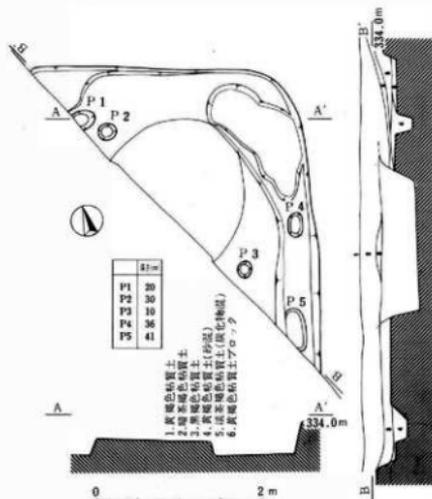


図39 6号住居址実測図

8号住居址 (図40)

検出状況：3区住居址集中区南端にて検出されたもので、東側が調査区外となる。7号住居址の上に構築されるが、土壌に切られまた一部攪乱を受けるため、調査面積はわずかに過ぎない。形状・規模：長軸4.30m程の隅丸長方形プランが予想され、主軸はほぼ南北方向をとる。床面・壁：床面は全体に比較的固く締まっていたが壁際は軟弱である。壁高は西壁23cm・南壁19cmを測り、確認面からの掘りこみは平均20cm程である。柱穴：P1～P3が検出されている。P2が主柱穴の一つとなり、主柱穴配置は4本長方形プランが予想されるが詳細は不明である。P1・P3は支柱穴であろう。他に本住居に関連する施設は検出されていない。覆土内より壺(184・185)・高坏(186・187)・甕(188・189)が出土している。

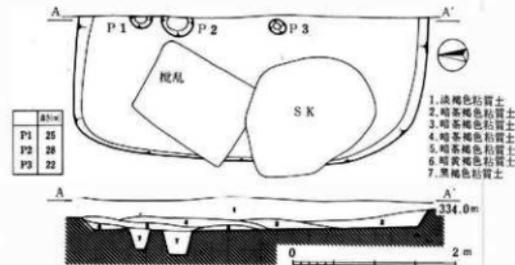


図40 8号住居址実測図

22号住居址 (図41)

検出状況：2区中央付近にて検出されたもので、西南を14号溝口に切られまた南側が調節張りの隅丸長方形プランが予想され、主軸は $N-26^{\circ}-E$ を測る。床面・壁：床面は貼り床はなされていないものの非常に堅緻に締まっており良好な状況を呈していた。壁高は北壁25cm・西壁18cm・東壁20cmを測り、確認面からの掘りこみは平均20cm程である。柱穴：P1～P4

が検出されている。主柱穴はP1・P2で主柱穴配置は4本長方形プランが予想される。柱穴間の距離は短軸で2.20mを測る。P3は住居址中心軸上に配される支柱穴と考えられる。P4は壁支柱の可能性もあるが本住居址に直接伴うものか不明である。柱穴間中央やや壁よりの部分に炭化物の堆積が認められたが、炉に伴うと考えられる掘りこみ・焼土などは認められなかった。P1内より甕(190)が出土している。

23号上層住居址

(図42)

検出状況：23号下層住居址調査中に床面の存在から確認された住居址で、壁等は破壊してしまった。形状・規模：確認された床面の範囲から、長軸4.40m・短軸3.20m程の隅丸長方形プランが予想される。主軸はN-3°-Eを測る。床面・壁：床面は貼り床はなされていないものの全体に非常に堅緻で良好な状況であ

った。柱穴：P1～P4が検出されている。主柱穴にはP1～P3が考えられる。4本長方形配列が予想されるが奥壁側の1本は検出されなかった。柱穴間の距離は長軸2.30m・短軸1.0m程である。P4は住居址中心軸上に配される支柱穴と考えられる。炉は奥壁側柱穴間やや壁よりの位置に検出されている。50×40cmの楕円形を呈する地床炉で、5cm程のレンズ状に掘り窪められている。内部には炭化物・焼土の堆積が確認されている。覆土より甕(191～193)・台付甕(194・195)が出土している。

25号住居址 (図43)

検出状況：3区住居址集区中央付近で検出されたものである。32・33号住居址のうゑに構築されたものであるが、北側は大半が24号住居

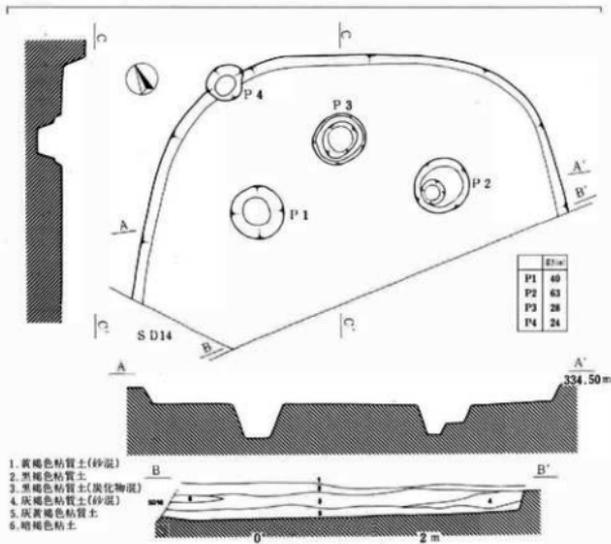


図41 22号住居址実測図

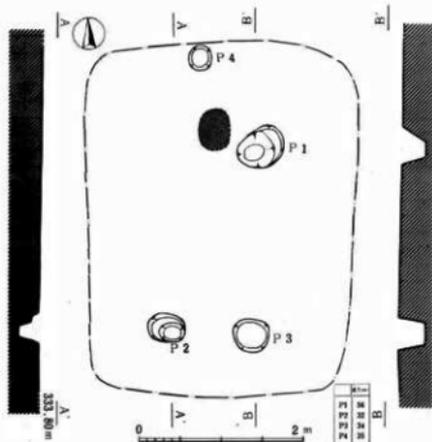


図42 23号上層住居址実測図

址に切られる。形状・規模：長軸6.80m、短軸4.30mの隅丸長方形プランでやや大型である。主軸はN-11°-Wを測る。床面・壁：床面は全体に比較的堅緻に締まっていた。壁高は東壁18cm・西壁18cm・南壁16cm・北壁9cmである。西壁南側から南壁にかけては壁際の床面が5cm程の高まりをもつ部分が検出されているが、明確なベッド状遺構とはとらえられない。柱穴：P1~P13が検出されている。主柱穴と考えられるのはP1~P4で柱穴配置は4本長方形プランで、柱穴間の距離は長軸3.15m、短軸2.0m前後である。P5・P10は住居址中心軸上

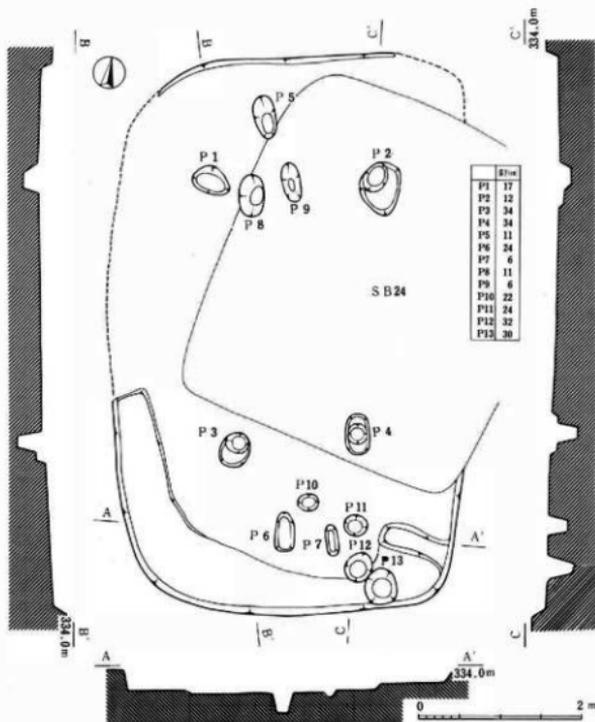


図43 25号住居址実測図

に配される支柱穴と考えられる。P6・P7は出入口施設に関連するもので梯子受け穴の可能性も考えられる。P8・P9・P11~P13は本住居に直接伴うものか否か不明であるが、P8・P9は支柱穴とも考えられる。炉等その他の施設は検出されていない。覆土内より甕(196・197)が出土している。

24号住居址 (図44)

検出状況：3区住居址集中区東端にて検出されたもので、東側は調査区外となり西側は23号住居址調査の際に一部破壊してしまった。形状・規模：一辺4.40m程の不整な方形を呈するが、あるいは東側は他遺構が切りあっている可能性もある。床面・壁：床面は全体に軟弱で不明瞭なものである。壁高は北壁14cm・南壁20cmを測る。また南壁際には壁周溝が検出されている。幅は平均20cm・深さ6cm程である。柱穴：P1~P6が検出されている。いずれも位置的には不規則なもので主柱穴配置は不明である。P7は径1.50m程の不整円形を呈する土塊状の落ち込みであるが本住居址に直接伴うものであるか不明である。覆土内より甕(198)・甕用蓋(199)・高坏(200)が出土している。

30号住居址 (図45)

検出状況：3区北端にて検出されたもので、北西1/4程が調査区外となる。形状・規模：短軸4.00m程の隅丸長

方形プランが予想され軸はN-75°-Wを測る。床面・壁：床面は住居中央付近を中心に比較的固く締まっていたが壁際はやや軟弱である。壁高は北壁10cm・東壁11cmで確認面からの掘りこみは平均10cm前後である。柱穴：P1～P7が検出されている。主柱穴と考えられるのはP1・P2で主柱穴配置は4本長方形プランが予想される。柱穴短軸間の距離は1.70mである。P3～P5は出入り口施設に関するものである可能性がある。P6・P7はともに土塊状の落ち込みであるが、直接本住居址と関係するか不明である。覆土内よりかなりの土器破片が出土しているが図示しうるものはない。

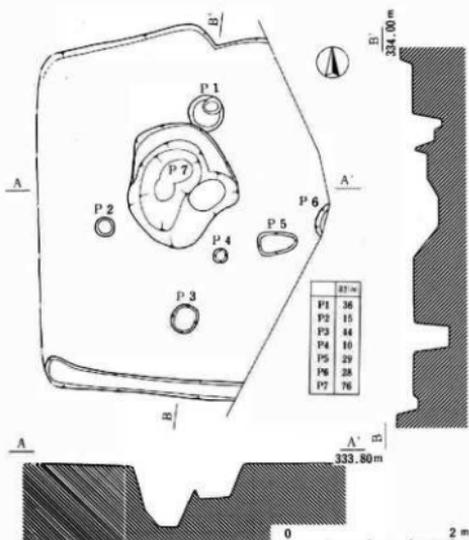


図44 28号住居址実測図

19号住居址 (図46)

検出状況：3区住居址集中区西端にて検出されたもので、36・40号住居址、49号土壌の上に構築され、31号住居址に切られる。形状・規模：長軸4.80mの隅丸長方形プランが予想される。軸はN-42°-Eを測る。床面・壁：床面は住居中央部を中心に比較的固く締まっていたが壁際は軟弱である。壁高は北壁14cm・南壁18cmを測り確認面からの掘りこみは平均15cm程である。柱穴：P1～P7が検出されている。主柱穴ととらえられるのはP1・P2で主柱穴配置は4本長方形が予想される。長軸柱穴間の距離は3.20mである。P4・P7は支柱穴の可能性ある。住居址中央やや南寄りの位置に炭化物の堆積が確認されたが焼土は認められず炉とは考えられない。覆土内より甕(201・202)・甕用蓋(203)が出土している。

42号住居址 (図47)

検出状況：2区中央付近で検出された住居址で、南側は14号溝址に切られ、西側は調査区外となる。形状・規模：隅丸方形または隅丸長方形プランが予想されるが、程度を調査したにすぎず、正確な規模は不明といわざるを得ない。軸はN-33°-

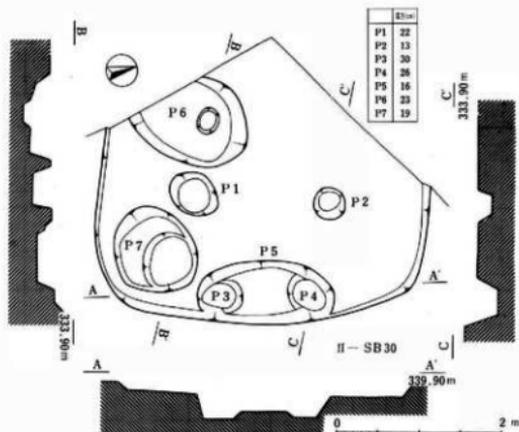


図45 30号住居址実測図

E. 床面・壁：床面は全体に軟弱で不明瞭なものである。壁高は北壁49cm・東壁20cmを測る。東側壁よりのところで幅75cm、深さ20cm程の溝が検出されているが本住居には直接関係しない。柱穴：P1～P8が検出されているが位置的にはいずれも不規則で主柱穴配置は不明である。住居中央付近に炭化物の堆積が確認されているが炉と考えられるものではなかった。覆土内より壺(210)・甕(212)・高坏(211)が出土している。

47号住居 図48

検出状況：4区北側で検出されたもので北西側1/2程が調査区外となる。形状・規模：隅丸長方形プランを呈するものと予想され、短軸4.30mである。主軸はN-38°-Wを測る。床面・壁：床面は住居中央付近を中心比較的固く締まっていたが壁際は軟弱である。壁高は東壁19cm・西壁11cm・南壁24cmで、確認面からの掘りこみは平均20cm程である。柱穴：P1～P3が検出されている。主柱穴と考えられるのはP1・P2で、主柱穴配置は4本長方形プランが予想される。短軸柱穴間の距離は1.20mである。P3は長径1.50m程の長楕円形の落ち込みであるが二段にわたる掘りこみを有する。出入り口施設に関連するピットである可能性が高い。覆土内より台付壺(204)・甕(205)・甕用蓋(206)が出土した。

49号住居 図49

検出状況：4区にて検出された住居で、南東は1/2程が調査区外となり、また一部に攪乱を受けている。形状・規模：隅丸長方形プランを呈するものと予想され、短軸は5.00mとやや大型である。主軸はN-40°-Wを測る。床面・壁：床面は全体比較的固く締まっていたが壁際はやや軟弱である。壁高は東壁19cm・西壁16cm・北壁20cmで確認面からの掘りこみは平均15cm前後である。柱穴：P1～P3が検出されている。主柱穴はP1・P2と考えられ、主柱穴配置は4本長方形配置が

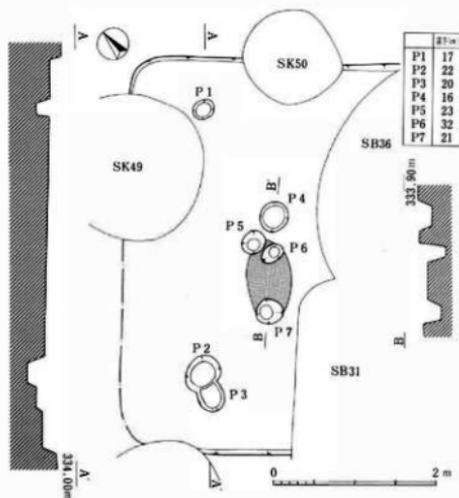


図46 39号住居実測図

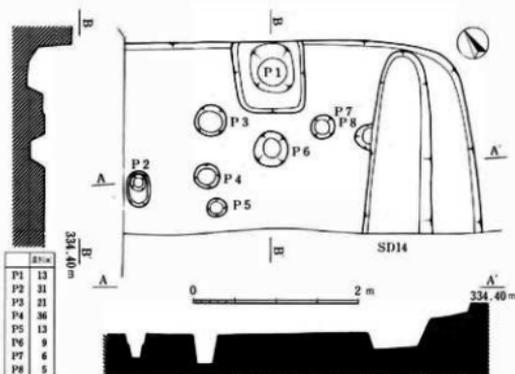


図47 42号住居実測図

予想される。短軸柱穴間の距離は2.70mである。炉：主柱穴間中央に地床炉が一個検出されている。径50cm程の円形を呈し、5cm程のレンズ状に掘り窪められている。内部に焼土と炭化物の堆積が確認されている。覆土内より甕用蓋(207)が出土している。

52号住居址 (図50)

検出状況：4区にて検出されたもので、4区の住居址群の中でもっとも南に位置する。形状・規模：長軸3.00m、短軸2.80mの不整な隅丸方形を呈する。床面・壁：床面は全体に軟弱で不明瞭なものであった。壁高は低く、確認面からの掘りこみは平均110cm程である。柱穴は確認されていない。住居址中央やや北寄りのところに長径1.80m程の長楕円形の落ち込みが検出されている。深さ5cm程であるが内部から炭化物と土器片が出土している。覆土内より高坏(208・209)が出土している。

56号住居址 (図51)

検出状況：4区南側で検出された住居址で南側を51号住居址に、北側を49号住居址に切られる。また北東隅は一部攪乱が及んでいる。形状・規模：隅丸長方形プランを呈すると予想され、短軸3.75mで

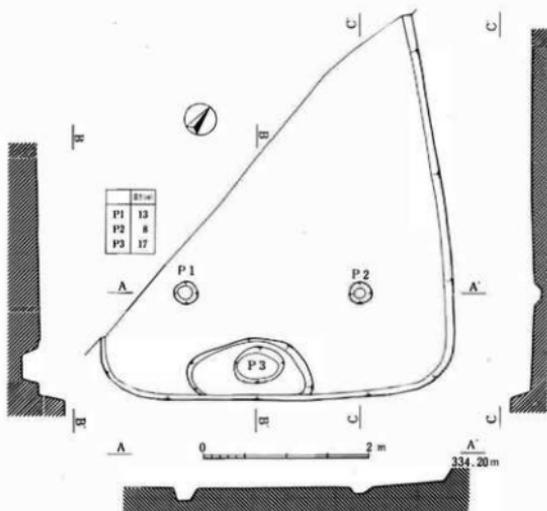


図48 47号住居址実測図

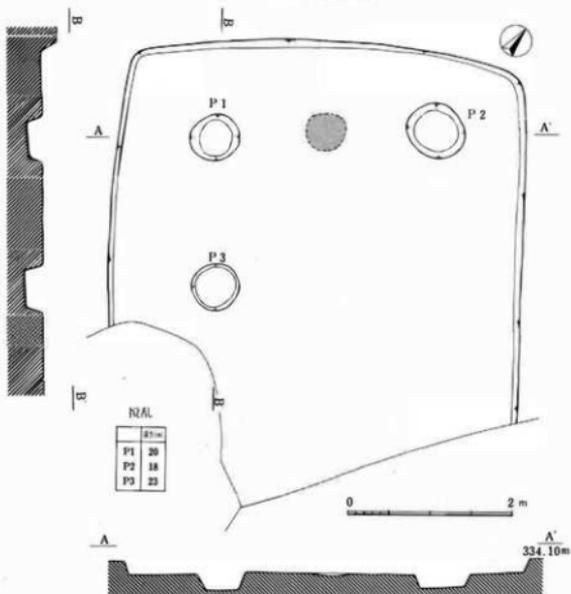


図49 49号住居址実測図

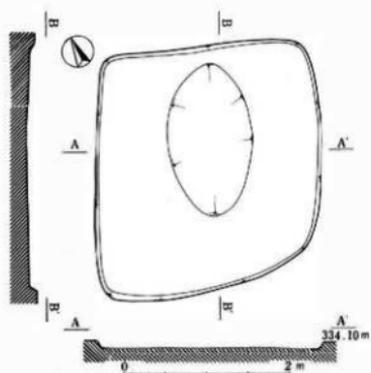


図50 52号住居址実測図

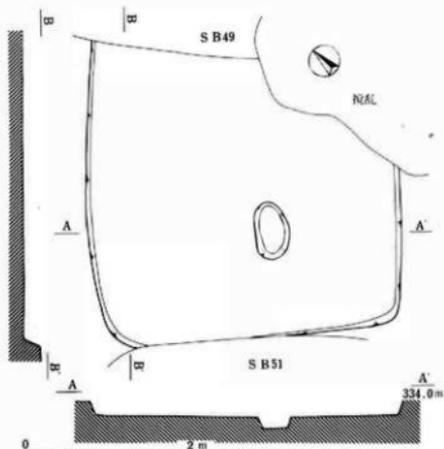


図51 56号住居址実測図

ある。床面・壁：床面は全体に軟弱で不明瞭である。確認面からの掘りこみは平均20cm程である。

柱穴：ピットが一個検出されているのみで柱穴配置等不明である。覆土内より壺（213・215）・甕（214）が出土している。

9号土壌（図52）

1区東側にて検出されたもので、北側は1号溝址に切れ、東側は若干調査区外となる。二段にわたる掘りこみを有し最深部で深さ43cmを測る。塘底よりかなり浮いた状態で壺（218）が出土している。

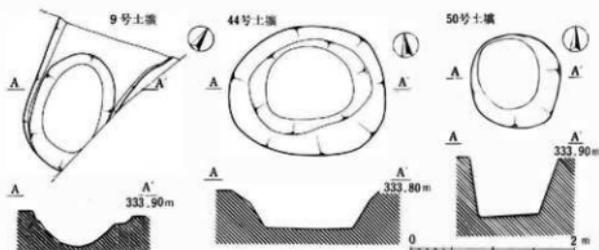


図52 9号・44号・55号土壌実測図

44号土壌（図52）

3区北東にて検出されたもので、長径1.90m・短径1.60mの楕円形を呈する。深さ50cm程で覆土内より甕（216）・高坏（217）が出土している。

50号土壌（図52）

3区39号住居址の下に検出されたもので径1.10m程のやや不整な円形を呈し、深さ75cmとやや深い。覆土内より甕（219）が出土している。

4 Ⅲ期の遺構

5号住居址 (図53)

検出状況：3区住居址集中区中央付近にて検出されたもので、西側は若干が調査区外となる。形状・規模：4.30×4.20mの隅丸長方形プランを呈し主軸はN-17°-Wを測る。床面・壁：床面は全体に比較的固く締まっていたが、壁際は軟弱なものとなる。壁高は北壁11cm・南壁10cm・東壁15cm・西壁14cmで確認面からの掘りこみは、平均10cm前後である。柱穴：P1～P18が検出されている。主柱穴はP3・P4・P9・P12と考えられ、主柱穴配置はやや不整な4本の方形プランである。P15・16の周囲の床面は土塊状にやや高くなっており、特にP15は何らかの貯蔵穴施設の可能性が考えられるが、きわだった遺物の出土はない。張り出し状に検出されたP17・18は本住居址に直接伴うものか否か不明である。覆土内より二重口縁甕(220)・短頸甕(221・222)・小型丸底埴(223)・甕(224～226)・高坏(227)・粗製器台(228)が出土している。

24号住居址 (図54)

検出状況：3区住居址集中区中央付近にて検出されたもので25・32・33号住居址を切って構築されている。形状・規模：4.30×3.90mの隅丸方形プランを呈し、主軸はN-14°-Eを測る。床面・壁：25号住居址調査中に、床面の存在から新たに検出した住居址であり、床面は全体に非常に堅緻でしっかりしたものであっ

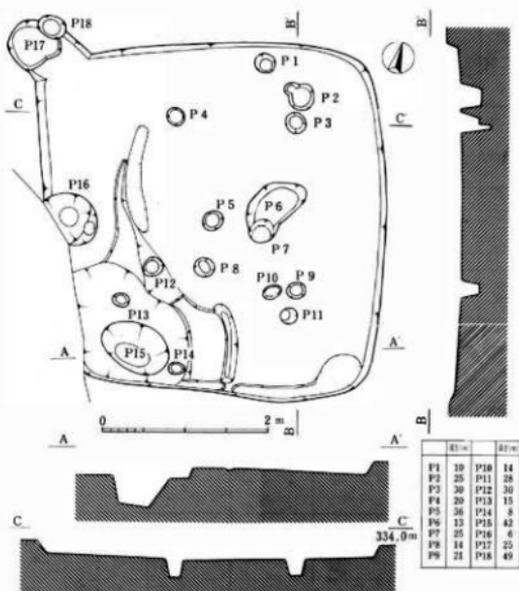


図53 5号住居址実測図

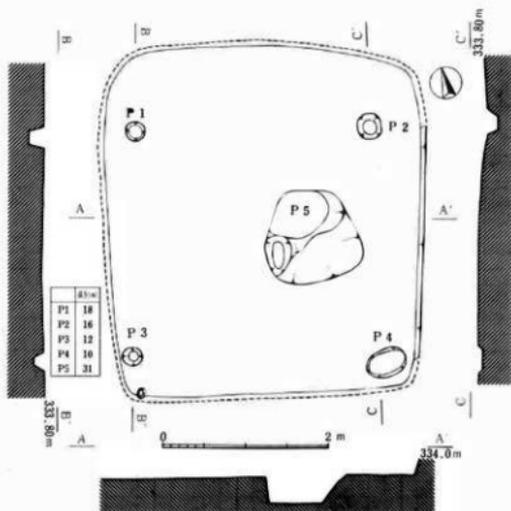
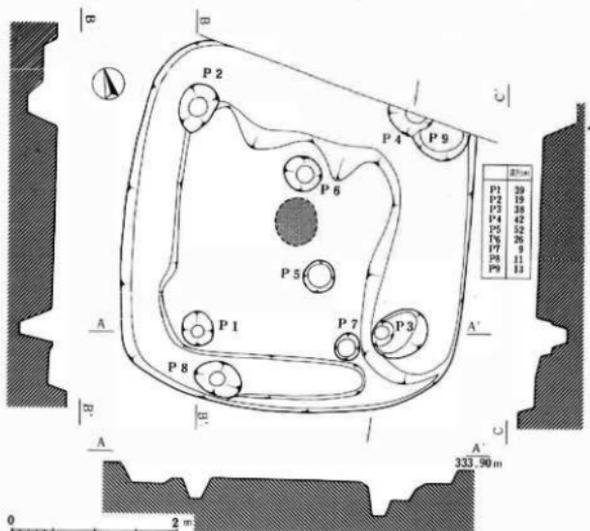


図54 24号住居址実測図

だが、壁際はやや軟弱である。壁は東壁の一部を確認したのみであるが、壁高24cmを測る。柱穴：主柱穴はP1～P4で4本方形の配列である。柱穴間の距離は2.80mを測る。P5は径1.20m程の不整な円形を呈する土塊状の落ち込みであるが、本住居に直接伴うものであるか不明である。炉等その他の施設は検出されていない。出土遺物も図示しうるものはない。



29号住居址 (図55)

検出状況：3区住居址

集中区北側で検出された

図55 29号住居址実測図

もので、北側は若干が調査区外となる。形状・規模：4.40×4.20mの隅丸方形プランが予想され主軸はN-15°-Eを測る。床面・壁：床は住居址中央主柱穴間内のみ縦竪で、壁際は周溝状に平均10cm程一段下がる。壁高は東壁15cm・西壁25cm・南壁22cm・北壁18cmで、確認面からの掘りこみは平均20cm程である。柱穴：P1～P9が検出されている。主柱穴と考えられるのはP1～P4で4本方形配列をなし柱穴間の距離は2.70m程である。P5～P7は支柱穴と考えられるが、P5・P6はあるいは炉に関連する施設の可能性もある。炉：住居址中央に地床炉が一個検出されている。径55cmの円形をなし、5cm程のレンズ状に掘り窪められている。内部には炭化物・焼土の堆積が確認されている。覆土内より直口壺(229)・甕(230)・鉢(231)・器台(232・233)が出土している。

31号住居址 (図56)

検出状況：3区住居址集中区西側にて検出されたもので、36・39号住居址を切って構築されている。また南側4程が調査区外となり、住居址中央部に攪乱を受ける。形状・規模：一辺6.90m程の隅丸方形プランが予想され主軸はN-13°-Eを測る。床面・壁：床面は29号住居址同様、住居址中央部分のみ縦竪で壁際は周溝状に平均15～20cm程下がる。壁高は北壁55cm・西壁40cm・東壁50cmで確認面からの掘りこみはかなり深い。柱穴：P1～P14が検出されている。主柱穴と考えられるのはP1～P3で、主柱穴配置は4本の方形プランが予想される。P4～P9・P11・P12は支柱穴と考えられる。住居址中央部は攪乱を受けており、炉等の施設は確認されていない。覆土内より二重口縁壺(234・235)・直口壺(236～239)・甕(240～245)・高坏(246～248・254)・底部穿孔鉢(249)・小型丸底埴(251・252)・器台(253)が出土している。

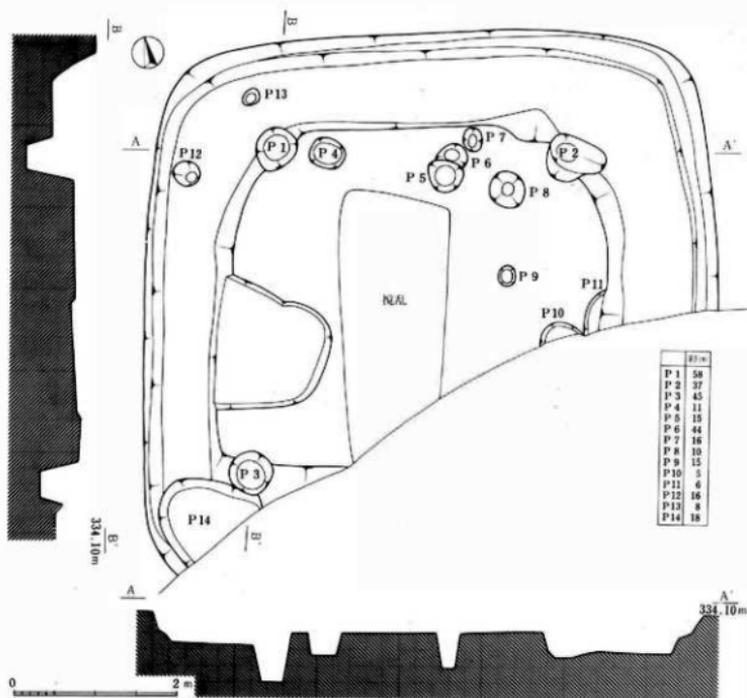


図56 31号住居址実測図

37号住居址 (図57)

検出状況：3区住居址集中区北側にて検出されたもので、25号・32号住居址の上に構築されたものであるが、これらの住居址の調査中に検出されたもので南側4程を破壊してしまった。形状・規模：一辺3.50m程の隅丸方形プランが予想され、主軸はほぼ南北方向に取る。床面・壁：床面は全体に比較的固く締まっていたが壁際は軟弱である。壁高は北壁10cm・西壁12cm・東壁8cmで確認面からの掘りこみは平均10cm程である。柱穴：P1～P4が検出されている。主柱穴と考えられるのはP1・P2で柱穴間の距離は1.90mである。柱穴配置は4本方形が予想される。炉等その他の施設は確認されていない。覆土内より台付甕 (255・256)・小型丸底埴 (257)・高坏 (258) が出土している。

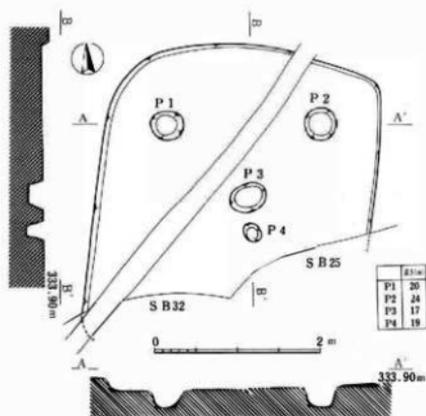


図57 37号住居址実測図

48号住居址 (図17)

検出状況：4区にて検出されたもので49号住居址の上に構築されるが、54・55号住居址に切れ、また東側は掘乱を受け形状・規模等は不明である。床面は部分的に堅緻な部分が認められたが全体に軟弱で不明瞭なものである。確認された北壁は10cmを測る。柱穴はビットが2個検出されているが、本遺構に伴うものか不明である。その他の施設は検出されおらず、本遺構を住居址とする積極的な根拠はない。覆土内より甕(259・260)・台付甕(261)が出土している。

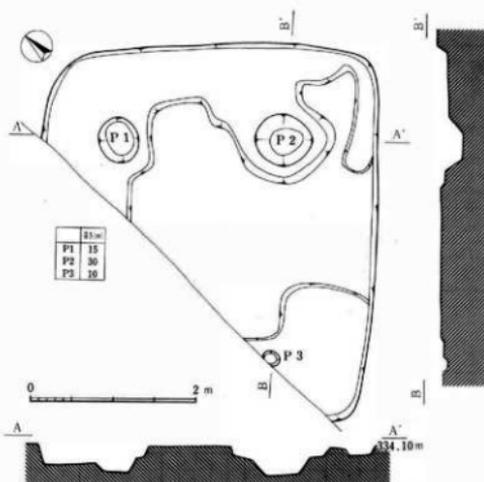


図58 51号住居址実測図

51号住居址 (図58)

検出状況：4区南側で検出されたもので北西側は調査区外となる。形状・規模：4.50×4.10mの隅丸方形プランを呈し、主軸はN-47°-Eを測る。床面・壁：床面は住居址中央部と南壁側の一部が固く締まっており、この部分を取り囲むように壁際は周溝状に10~15cm程下がる。壁高は東壁12cm・南壁15cm・北壁26cmを測る。柱穴：P1~P3が検出されておりこれらが主柱穴となると思われる。柱穴配置は4本方形プランが予想され、柱穴間の距離は2.00m程である。出土遺物は図示しうるものはない。

53号住居址 (図16)

検出状況：2区北端にて検出されたもので、東側が調査区外となる。形状・規模：一辺7m程のやや大型の隅丸方形プランが予想される。床面・壁：床面は全体に軟弱で不明瞭なものである。確認面からの掘りこみは平均15cm程である。柱穴等本遺構に直接関連すると思われる施設は確認されておらず、本遺構を住居址とする積極的な根拠はない。覆土内より台付甕(262)・甕(263・264)・高坏(265)が出土している。

13号溝址 (図17・59・60)

3区住居址集中区南側にて検出されたもので南西から北東へ直線的に伸びる形態を呈する。北側の推定流路本体の形状は、幅3.30m・溝底幅2.20m・深さ0.80mの断面逆台形状をなすが、南側はさらに幅3.50m程の二段にわたる浅いテラス状の平坦面をなしこの部分を含めた確認面での溝幅は約7.00mを測る大溝である。調査概要の項でも述べた

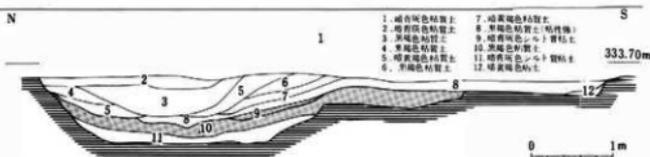


図59 13号溝址土層堆積状況実測図

とおり本溝址は3～5区に展開する当該期集落の南端を区画する溝址である可能性が高く、本溝址以南は遺構分布の空白地帯が形成される。覆土の堆積状況は下層～中層までは比較的レンズ状に近い自然の堆積状況を示すが、上層は一部再掘削されているようである。遺物は8～10層を中心に出土しており出土土器の様相からは本溝址はII期に掘削され、III期初頭に大量の土器群が投棄されたものと考えられ、その存続期間はII期～III期ととらえられる。強粘性の覆土と湧水のため調査は困難をきわめ、確実な分層発掘はなし得ず出土土器の一括性は保証し得ないが、遺物出土状況の垂直分布図に示したとおり、在地の箱溝水式系の土器と古式土師器が混在する状況で出土しており、当該期の研究に良好な資料を提示するものといえよう。



図60 13号溝址土器出土状況図

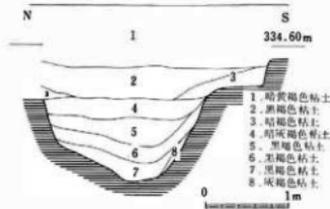


図61 14号溝址土層堆積状況実測図

壺 (266～273・277～286)・ヒサゴ壺 (274～276・333)・甕 (287・290～314・317・320・321)・台付甕 (288・289・315・316・318・319・322～332)・高坏 (334～354)・器台 (351～354)・蓋 (355・356)・片口鉢 (359)・底部穿孔鉢 (360)・坏 (358・361・362)・粗製器台 (357) が出土している。

14号溝址 (図16・61)

2区中央付近にて検出されたもので、22・42号住居址を切って構築される。北西から南東へ直線的に伸びる形態を呈する。溝流路本体の幅2.00m、深さ1.05mを測り、南側は幅0.50m程のテラス状の平坦面を有する。覆土は比較的レンズ状に近い自然の堆積状況を示し、6層を中心に遺物が出土している。壺 (364)・甕 (363・369～371)・台付甕 (365～368・372～374)・底部穿孔鉢 (375)・高坏 (376～381)・器台 (382・383)・小型壺 (384)・鉢 (385)・坏 (386・387) が出土している。

15号溝址 (図17)

5区南側にて検出したもので、溝址としたか本来的には旧地形の自然の落ち込みにも土器群が投棄されたものと考えられる。ただしこの溝を境に北側には住居址は検出されておらず、南側の13号溝址と対をなしてII～III期の集落を画していた可能性が高いものと考えられる。幅平均8.00m、深さ0.50mを測る。二重口緑壺 (388)・壺 (389～391)・甕 (392～396)・鉢 (397・398・405)・高坏 (399～401)・器台 (402)・小型丸底塔 (403・404)・粗製器台 (406～408) が出土した。

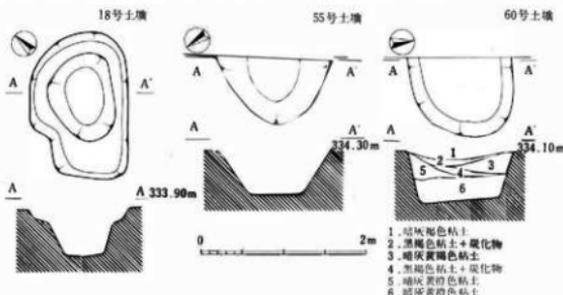


図62 18号・55号・60号土坑実測図

18号土壌 (図62)

1区東側にて検出されたもので、長径1.80m、短径1.20m程の不整な楕円形を呈する。二段にわたる掘りこみを有し最深部で60cmを測る。覆土内より壺(409・410)・台付甕(411)が出土している。

55号土壌 (図62)

2区北側にて検出されたもので、東側は1/2程が調査区外となる。径1.50m程の円形プランで、深さ60cmを測り断面逆台形状を呈する。覆土内より器台(417)・甕(418・419)・高坏(420)を出土している。

60号土壌 (図62)

5区北側にて検出されたもので、径1.30m程の円形を呈し深さ65cm程である。第6層より壺(412・413)・鉢(414)・粗製器台(415)・高坏(416)が出土している。

畝状遺構 (図63)

5区北半にて検出された。畝の主軸は北側と南側ではことなり二枚の畑地の存在が考えられる。北側N-40°-E、南側N-12°-Eを測る。覆土内からI~III期の各時期にわたる土器破片が出土しているが、いずれも小片で明確に時期決定できる根拠はない。

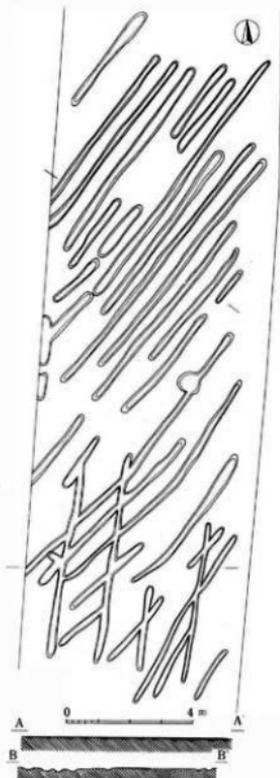


図63 畝状遺構実測図



畝状遺構全景

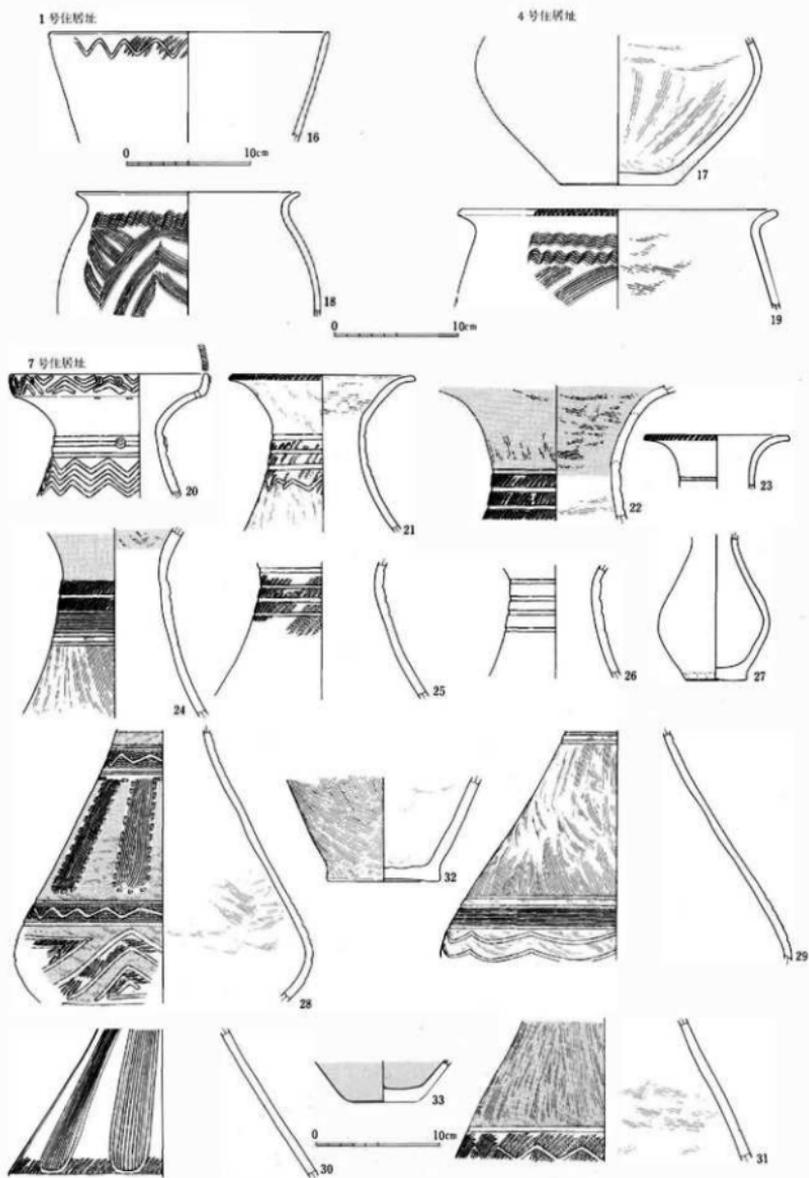


图64 1号·4号·7号住居址出土土器实测图

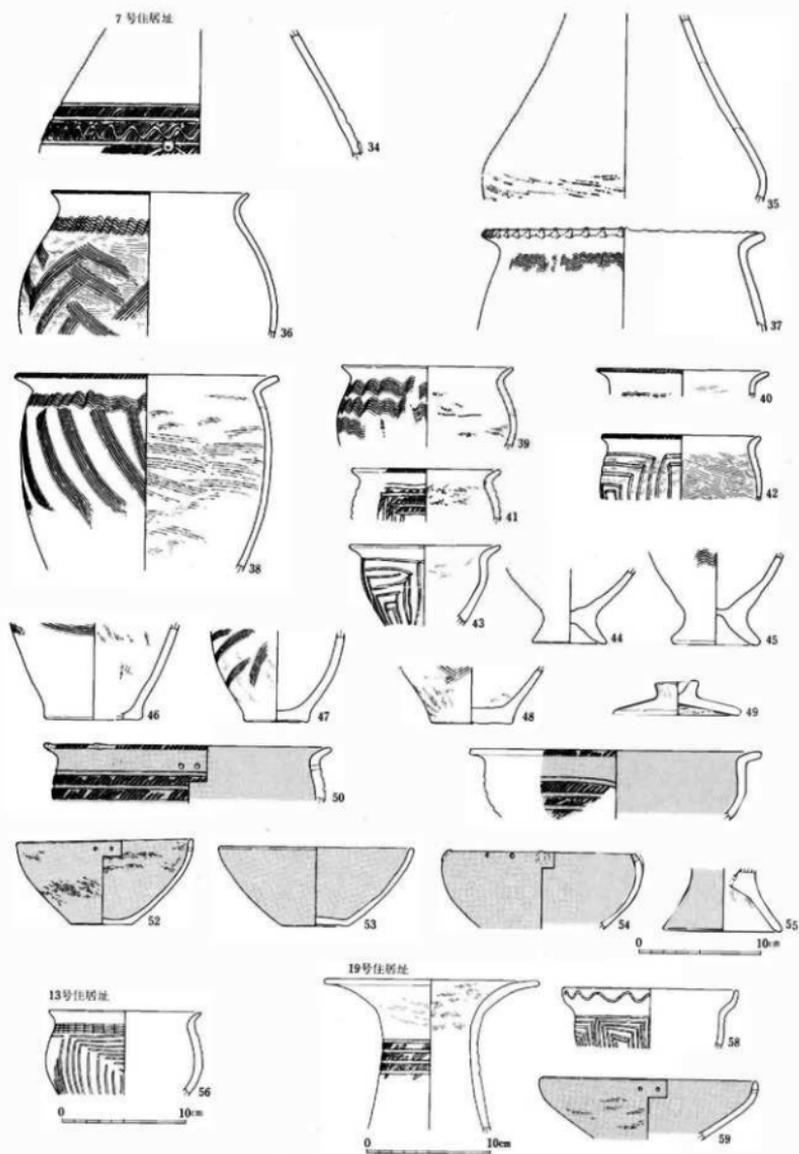


图65 7号·13号·19号住居址出土土器实测图

20号住居址(床面)

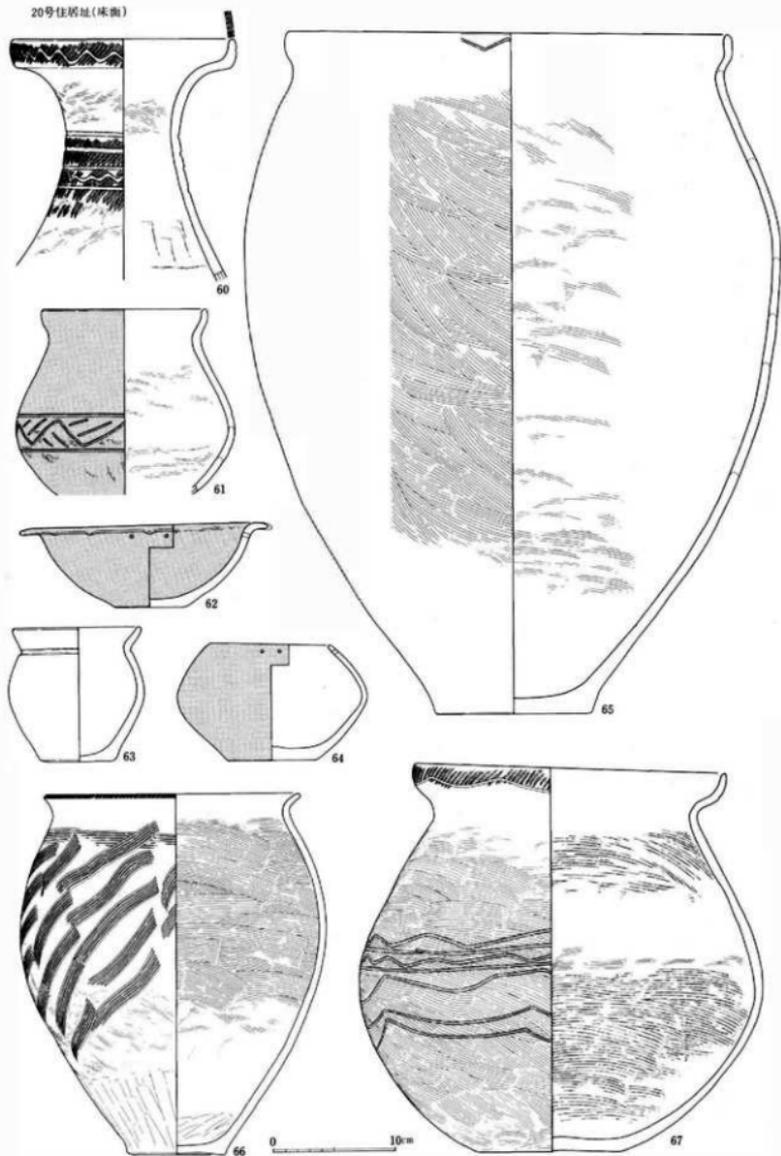
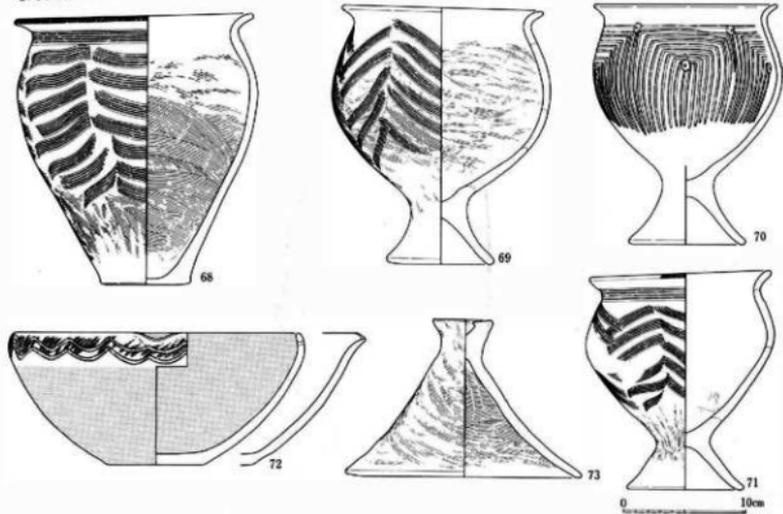


图66 20号住居址床面出土土器实测图

20号住居址(床面)



20号住居址(上层)

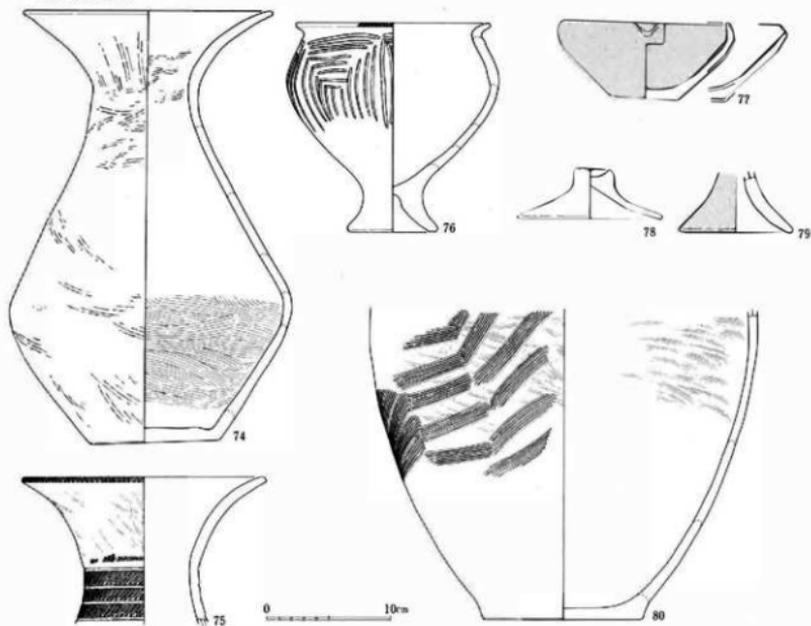
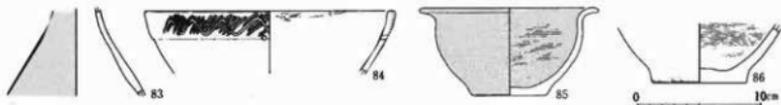
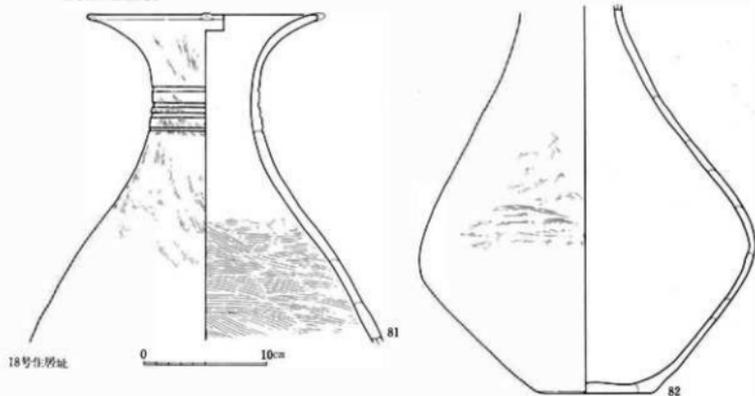


图67 20号住居址(床面)·同(上层)出土土器实测图

20号住居址(上層)



23号下層住居址



27号住居址

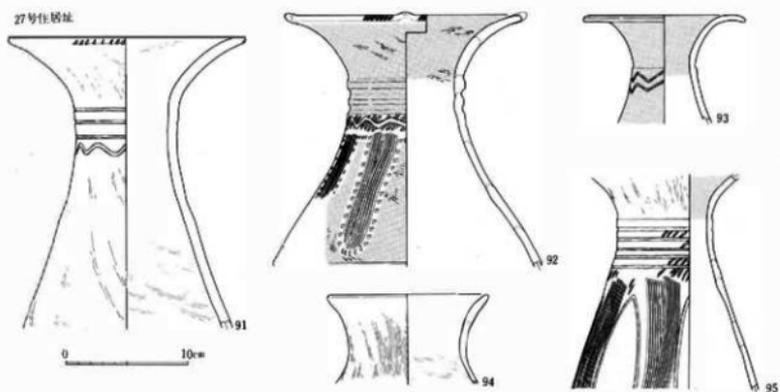


图68 20号住居址(上層)·18号·23号下層·27号住居址出土土器实测图

27号住居址

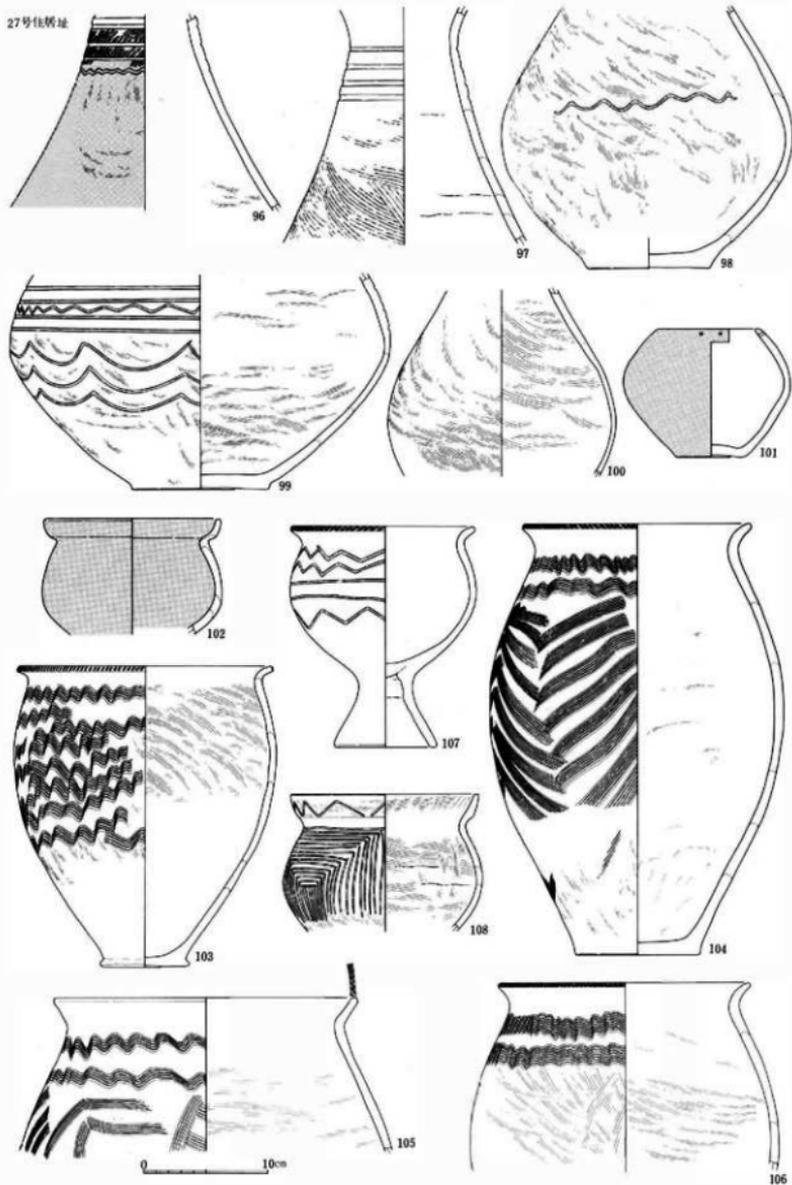


图69 27号住居址出土土器实测图

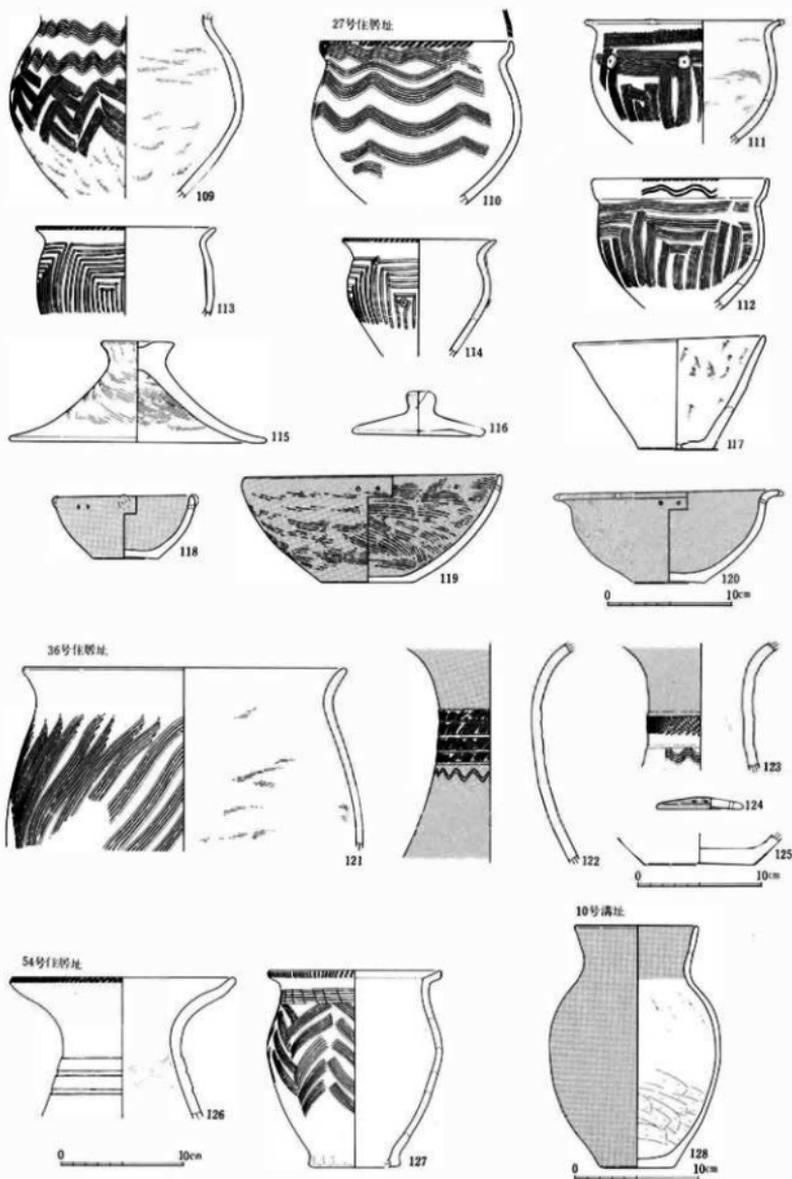


图70 27号·36号·54号住居址、10号沟址出土土器实测图

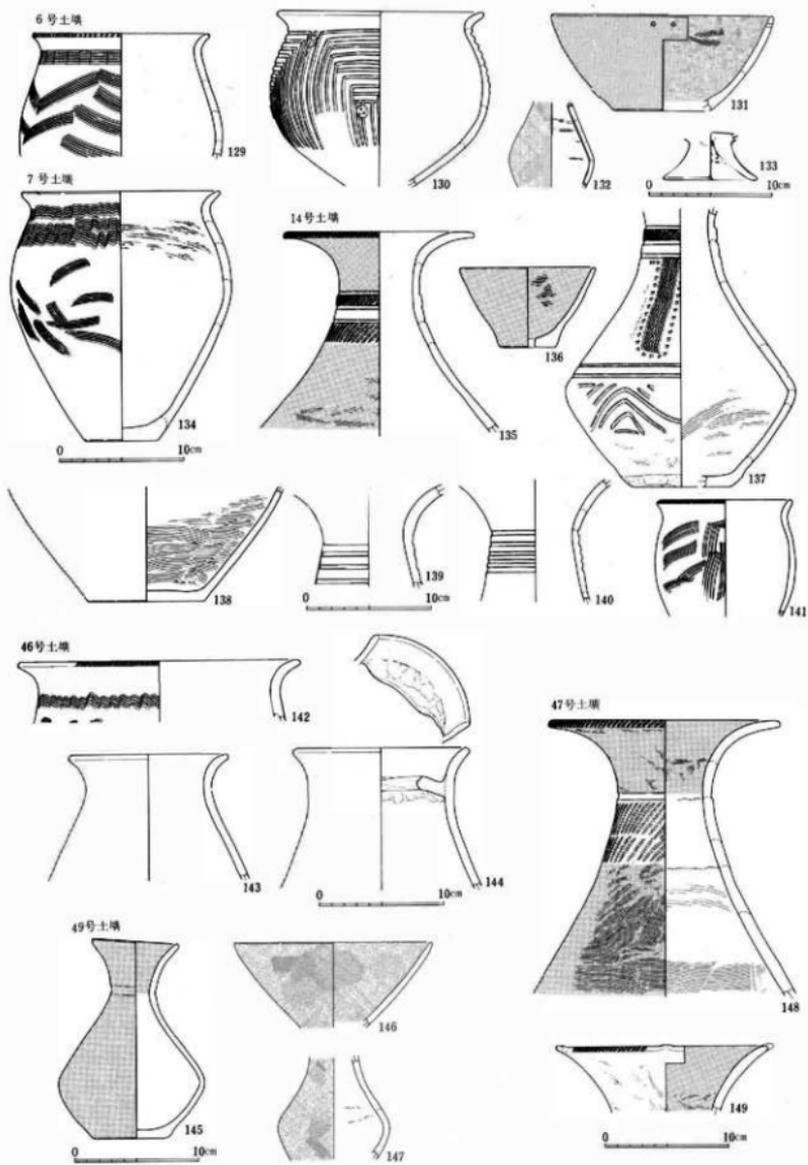


图71 6号·7号·14号·46号·49号·47号土坑出土土器实测图

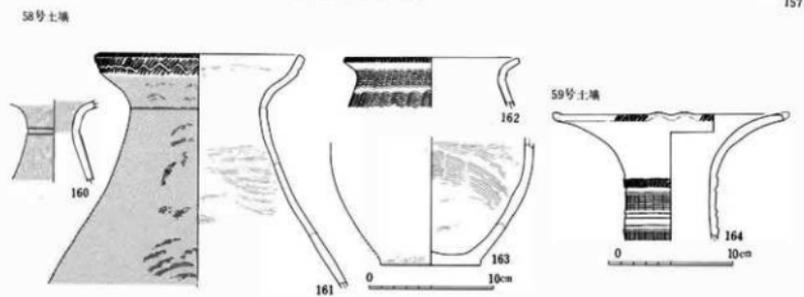
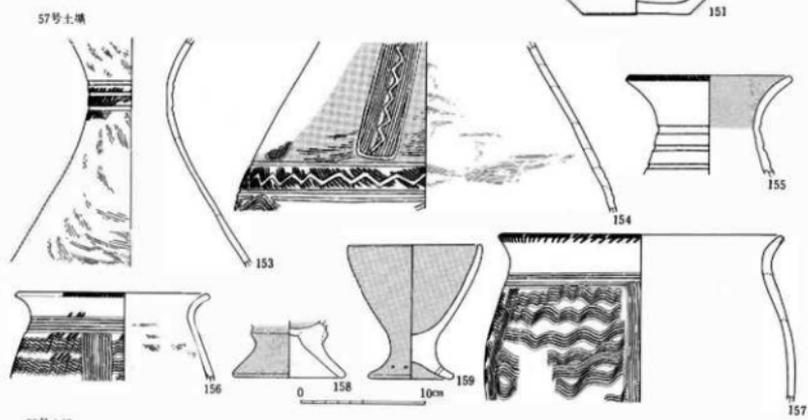
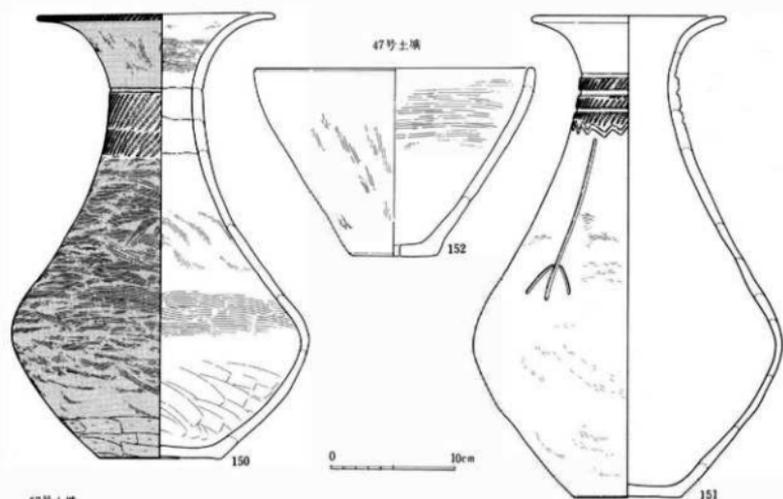


图72 47号·57号·58号·59号土坑出土土器实测图

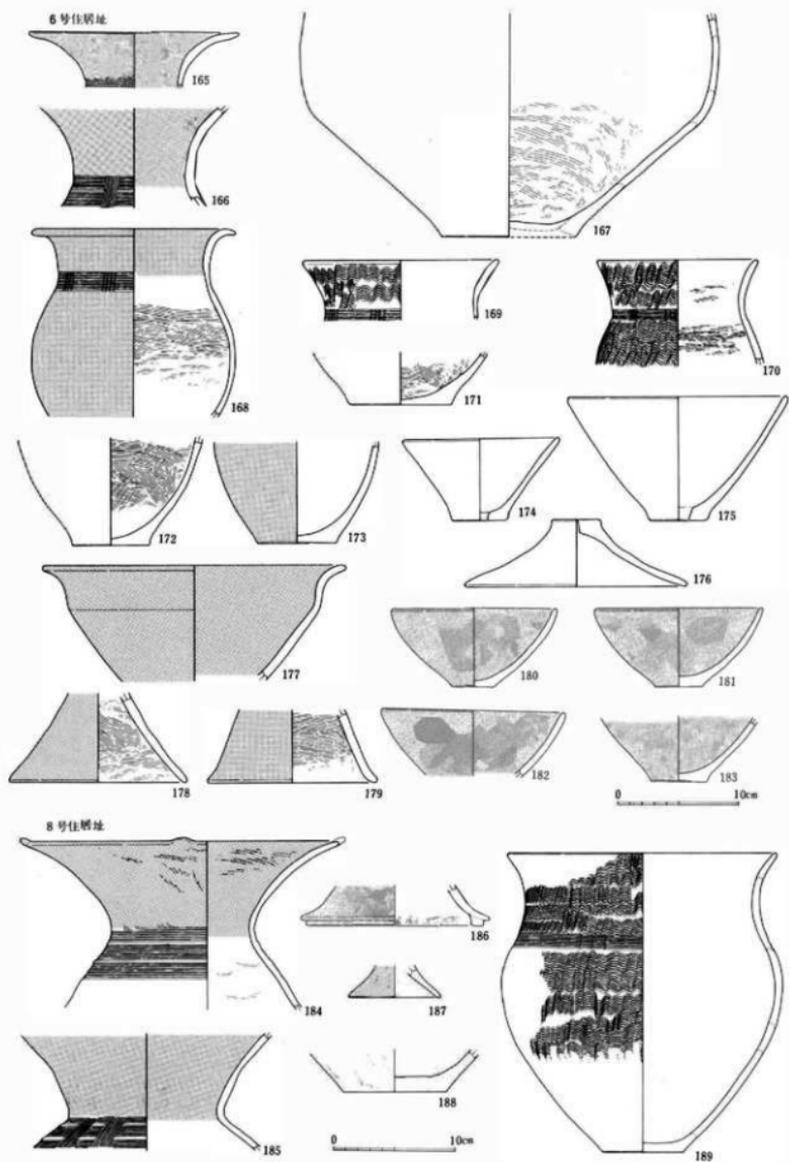


图73 6号·8号住居址出土土器实测图

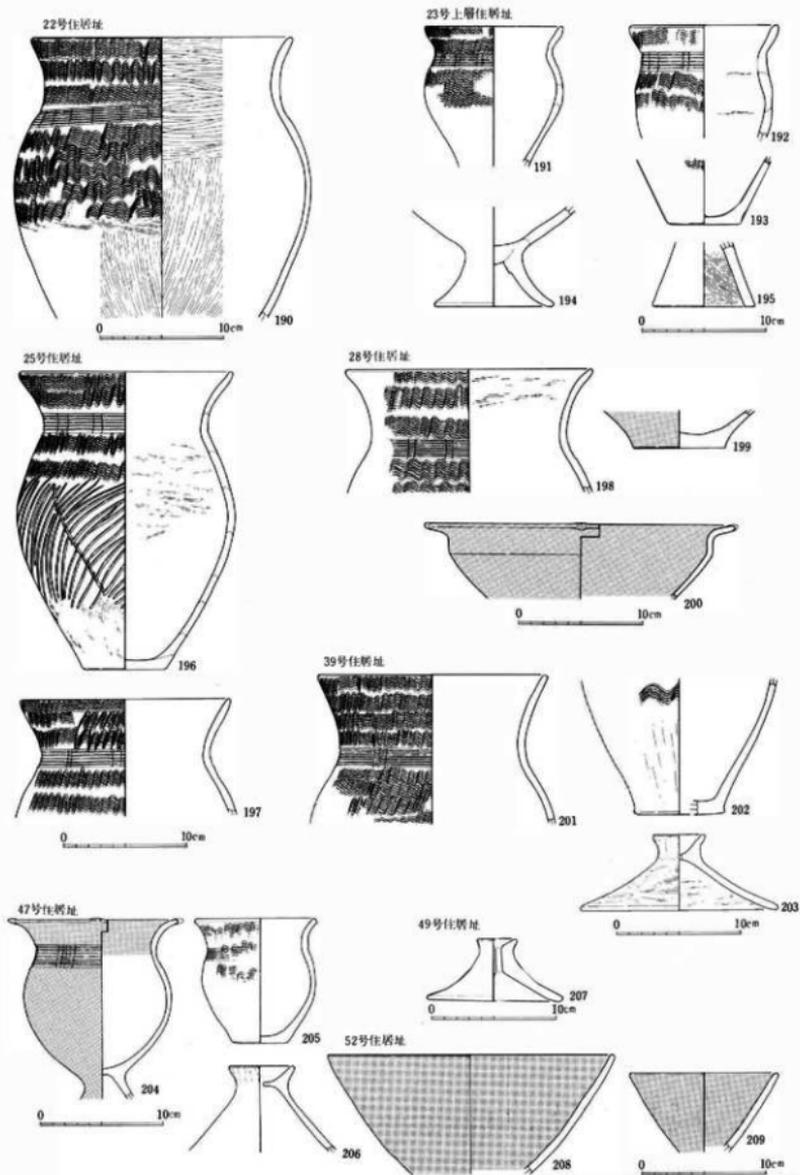


图74 22号·23号上層·25号·28号·39号·47号·49号·52号住居址出土土器实测图

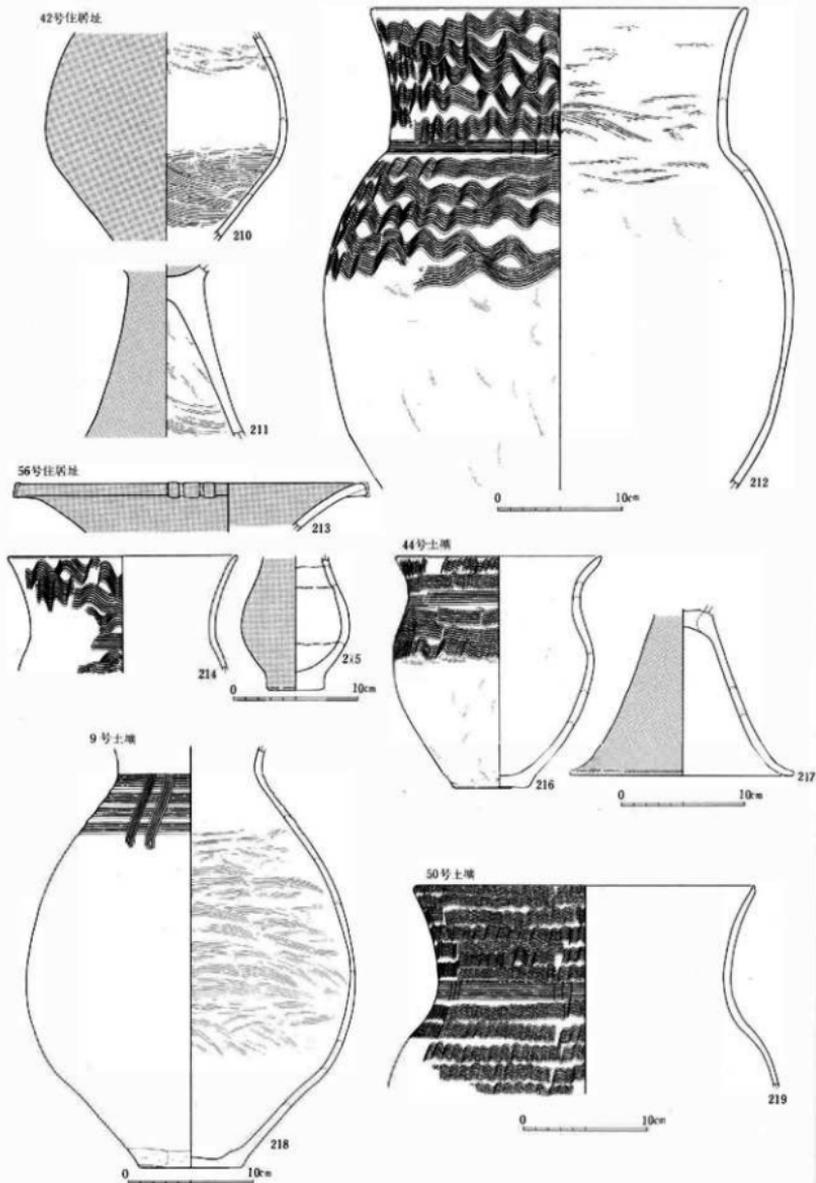


图75 42号·56号住居址、9号·44号·50号土壘出土土器实测图

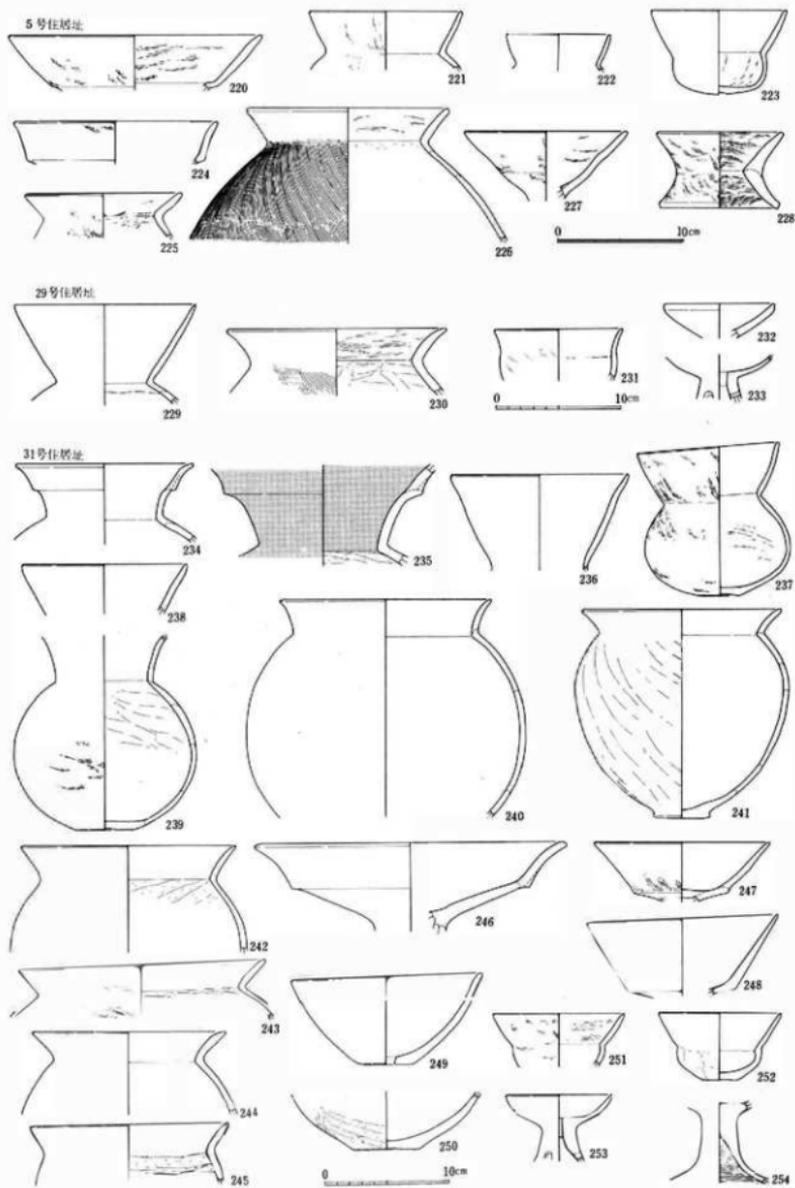


图76 5号·29号·31号住居址出土陶器实例图

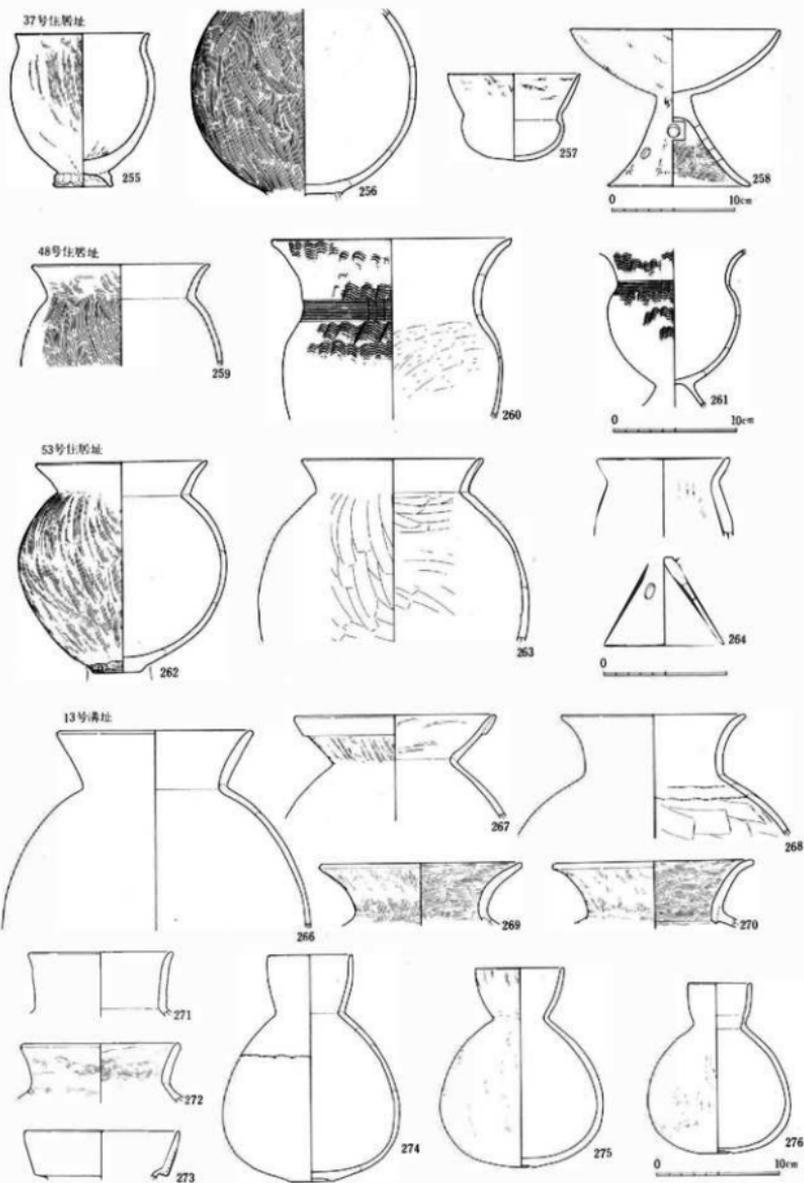


图77. 37号·48号·53号住居址、13号溝址出土土器实测图

13号溝址

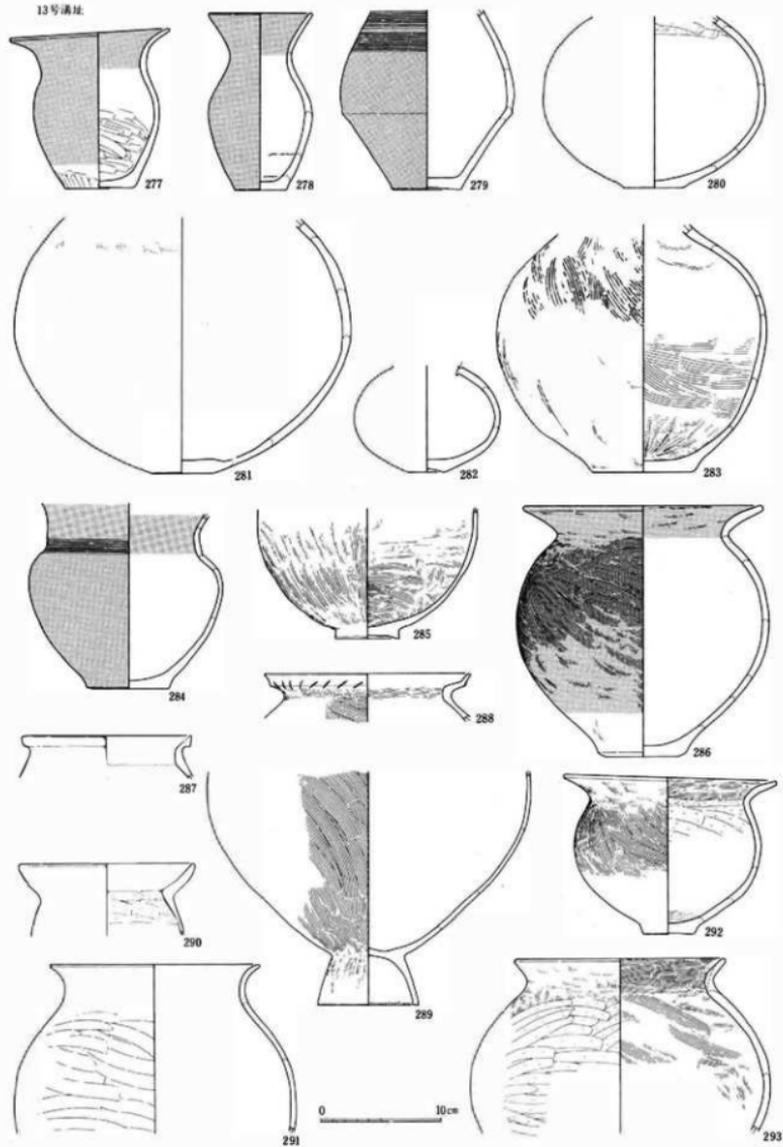


图78 13号溝址出土土器实测图

13号清址

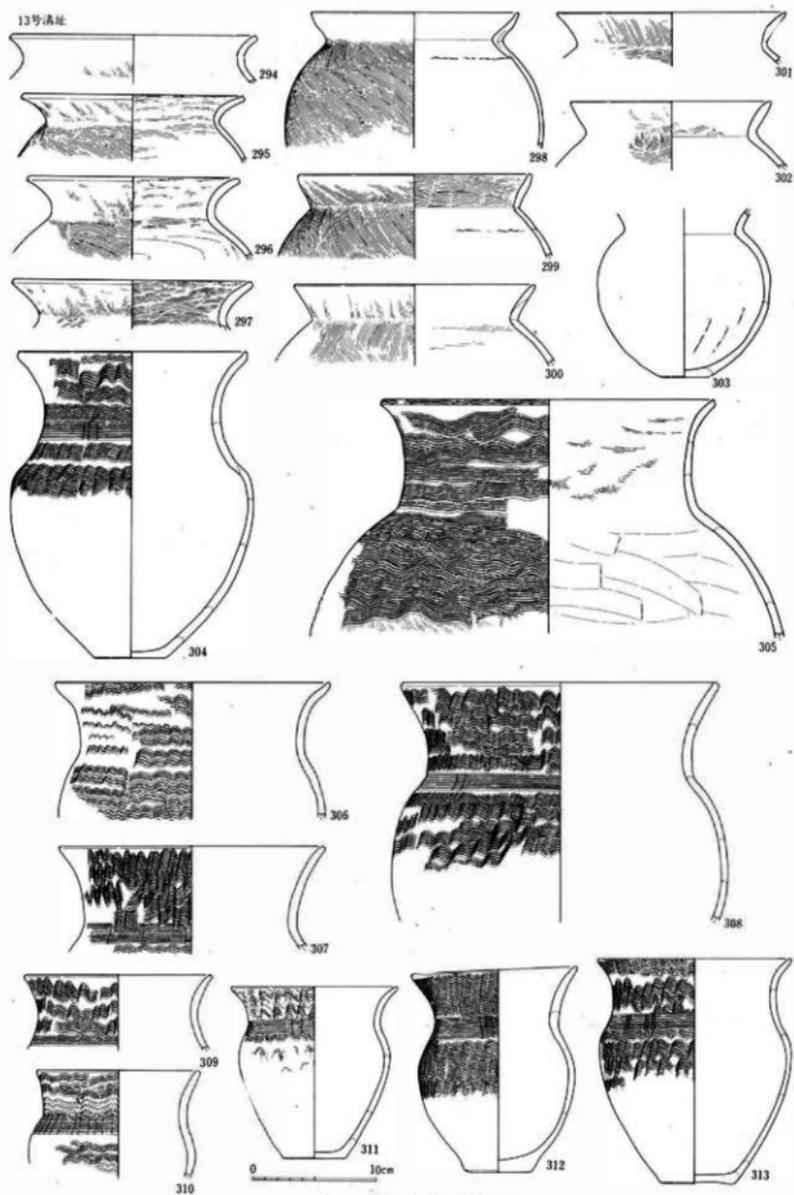


图79 13号清址出土土器实测图

13号溝址

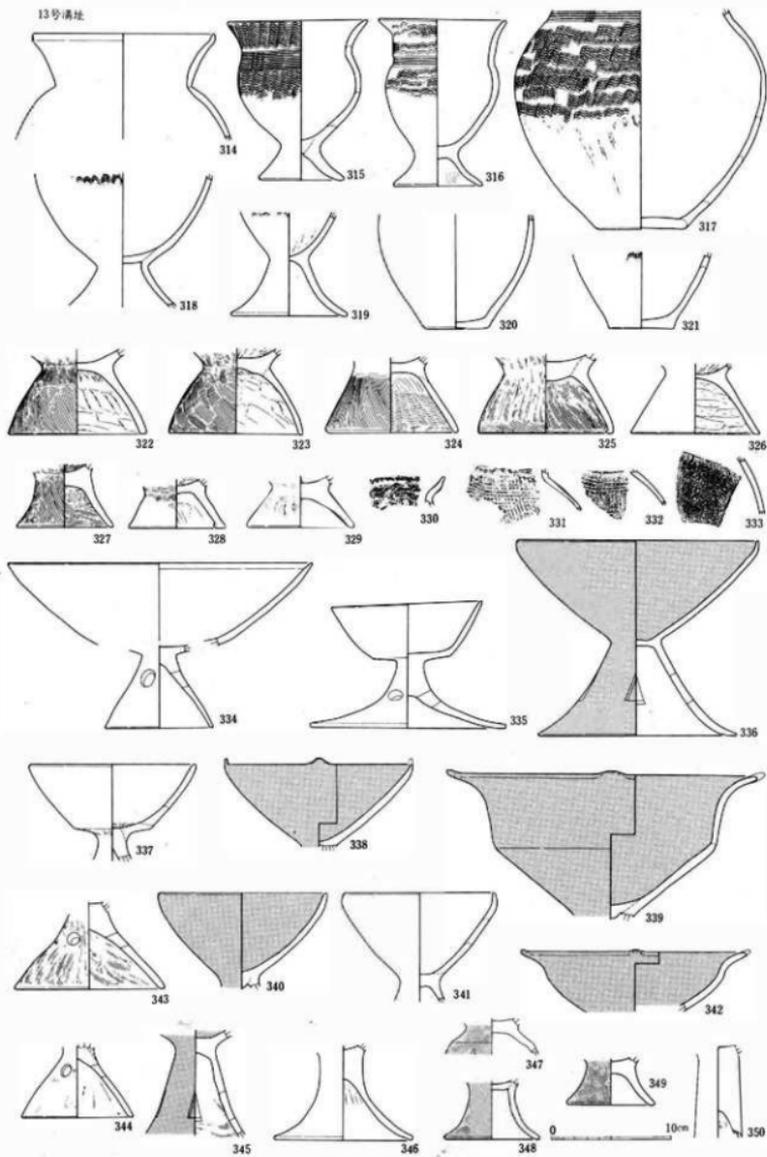


图80 13号溝址出土土器实测图

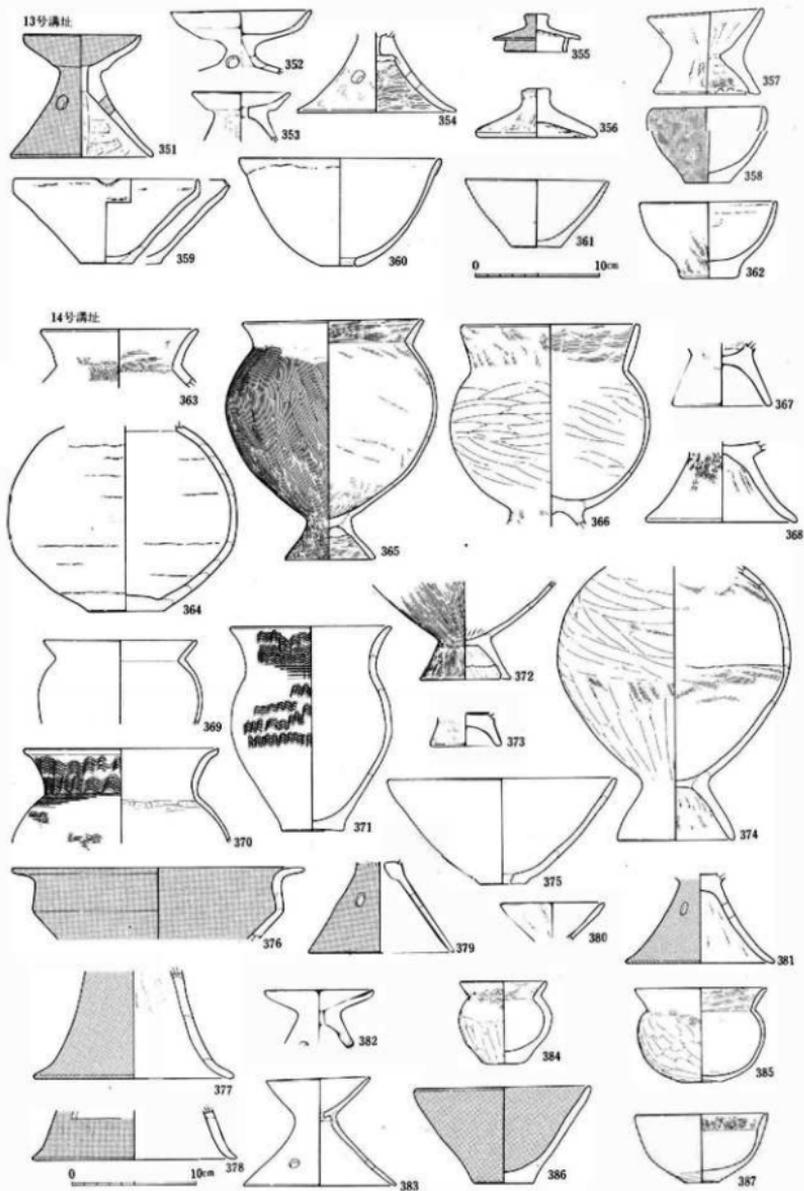


图81 13号·14号溝址出土土器実測図

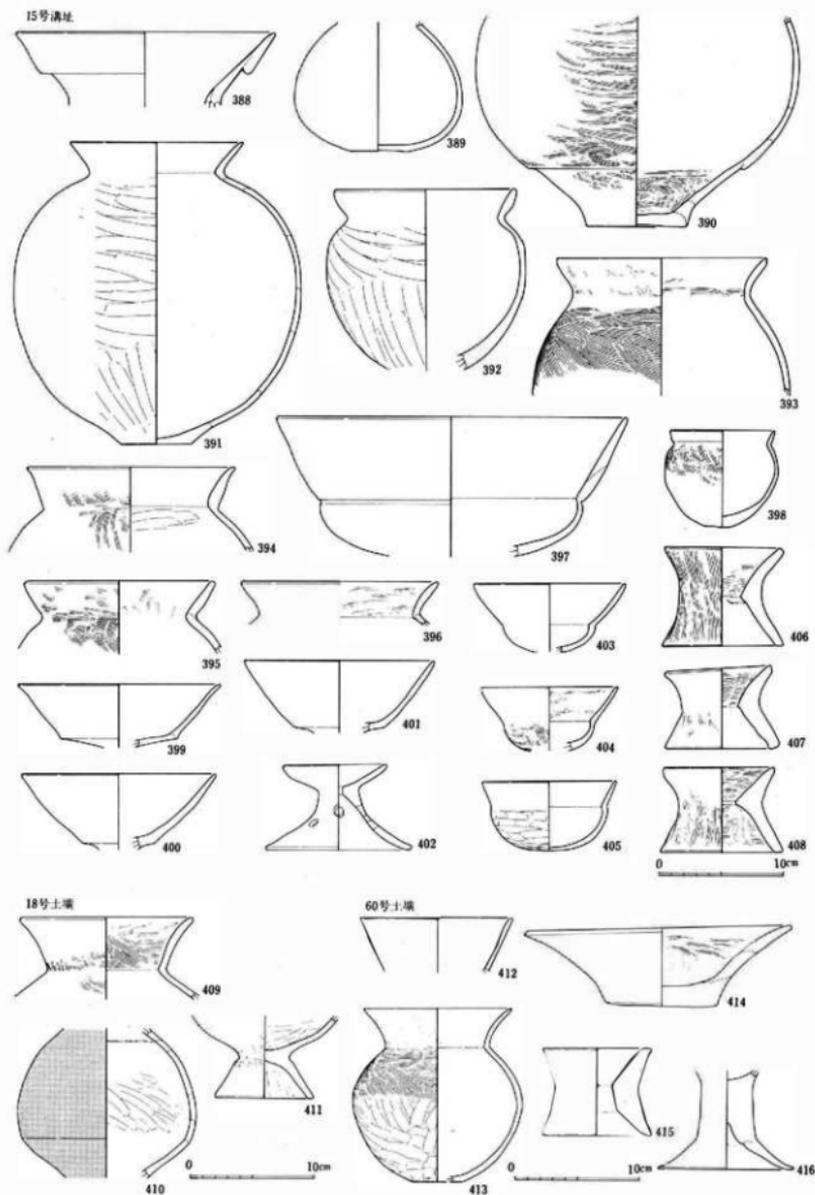


图82 15号沟址、18号·60号土壕出土土器实测图

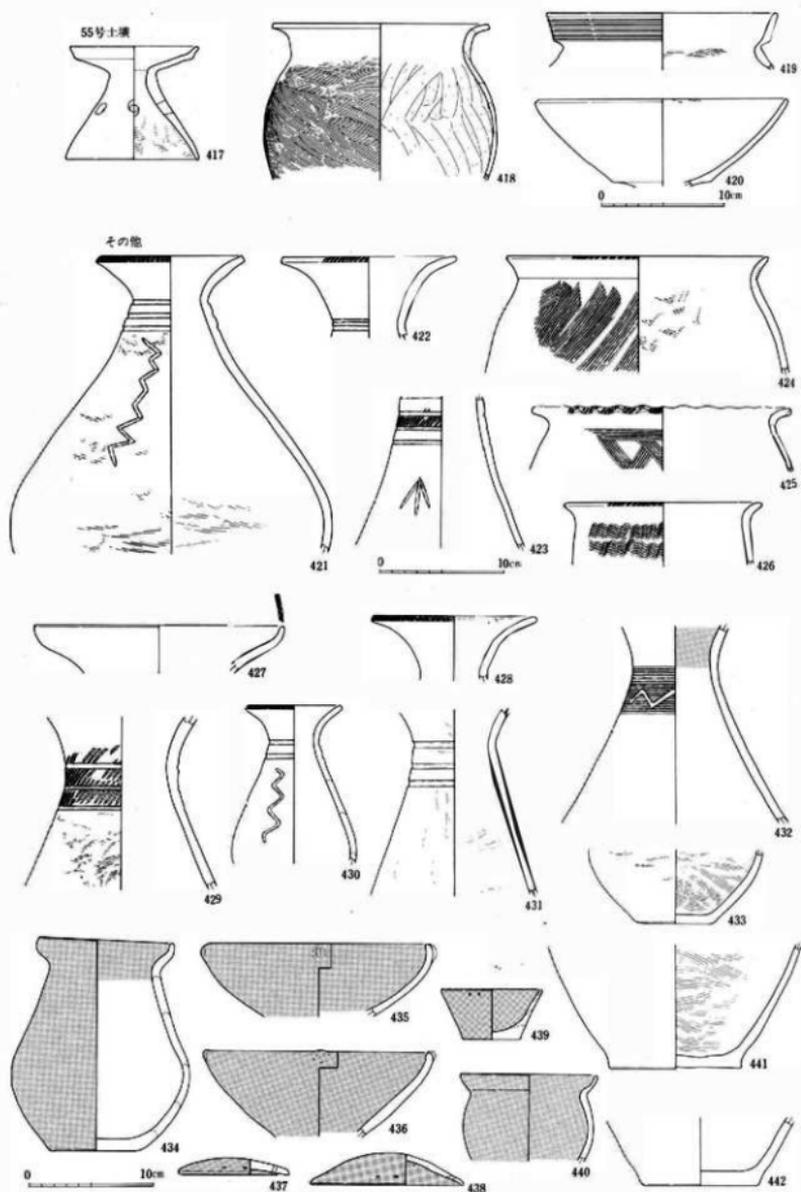


图83 55号土壌、B区出土土器実測図

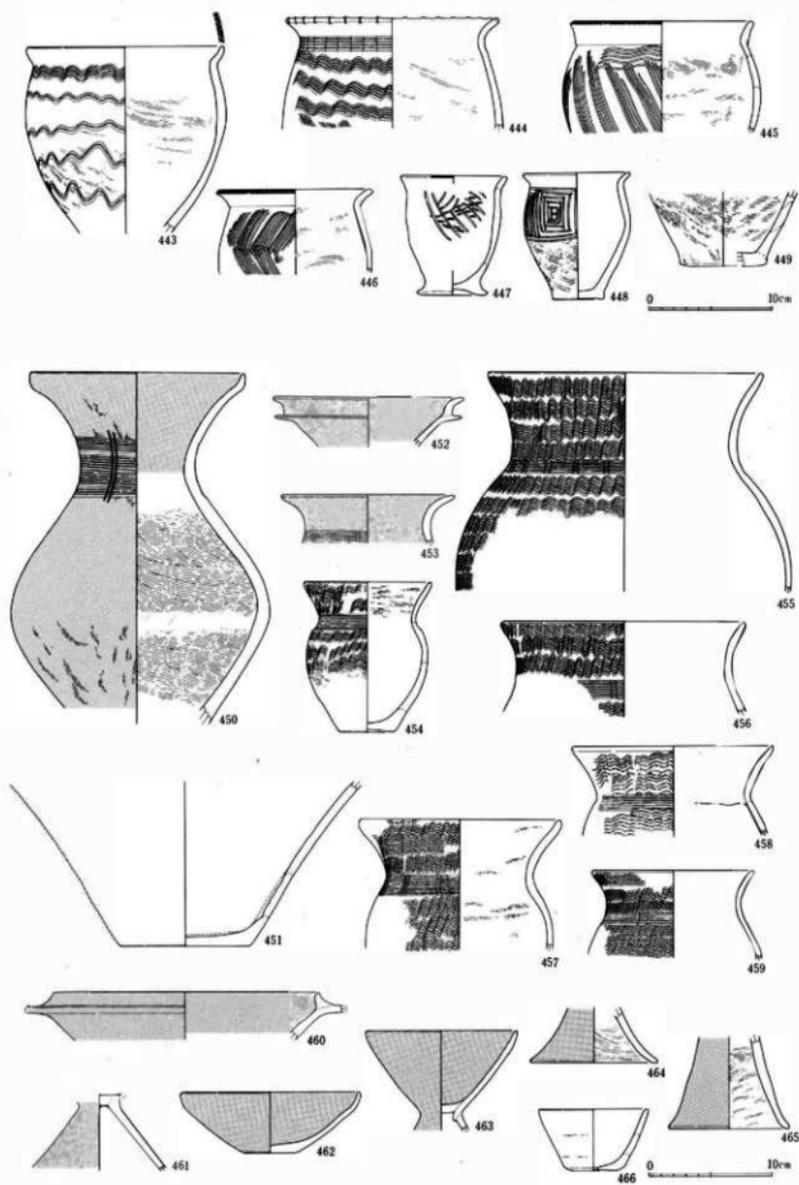


图84 B区出土土器实测图

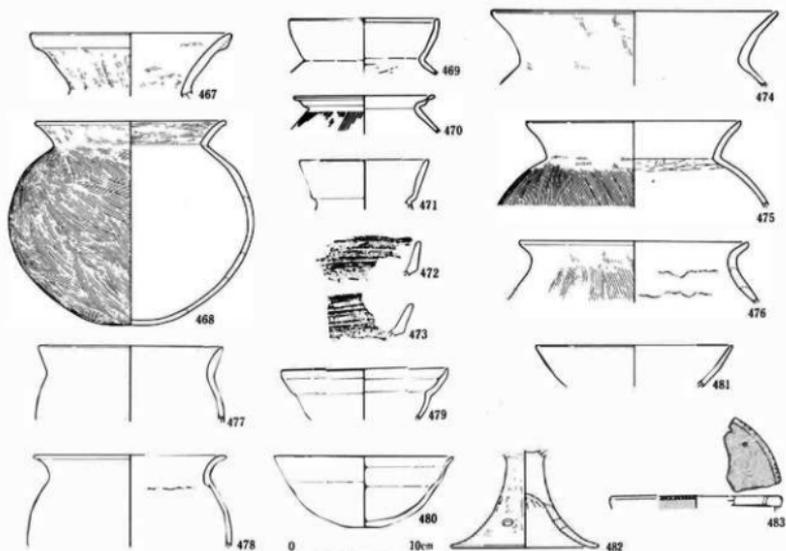


图85 B区出土土器实测图

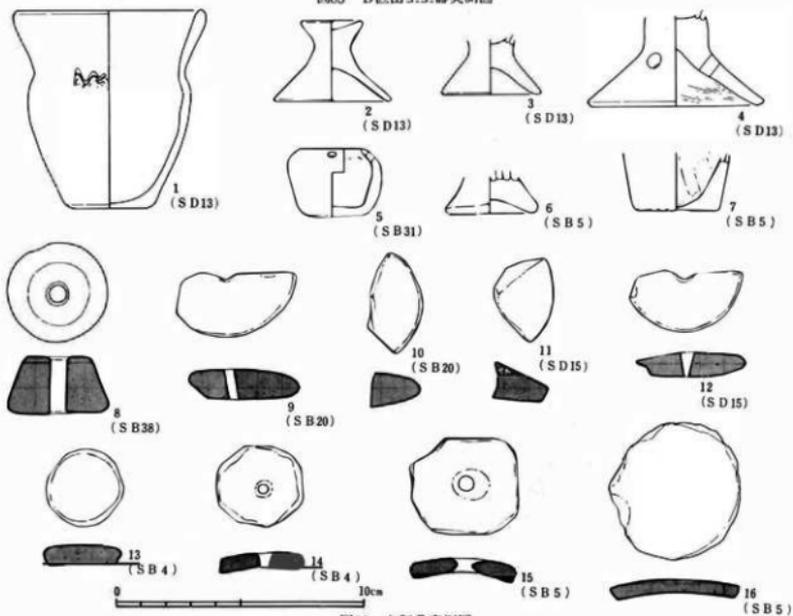


图86 土製品实测图

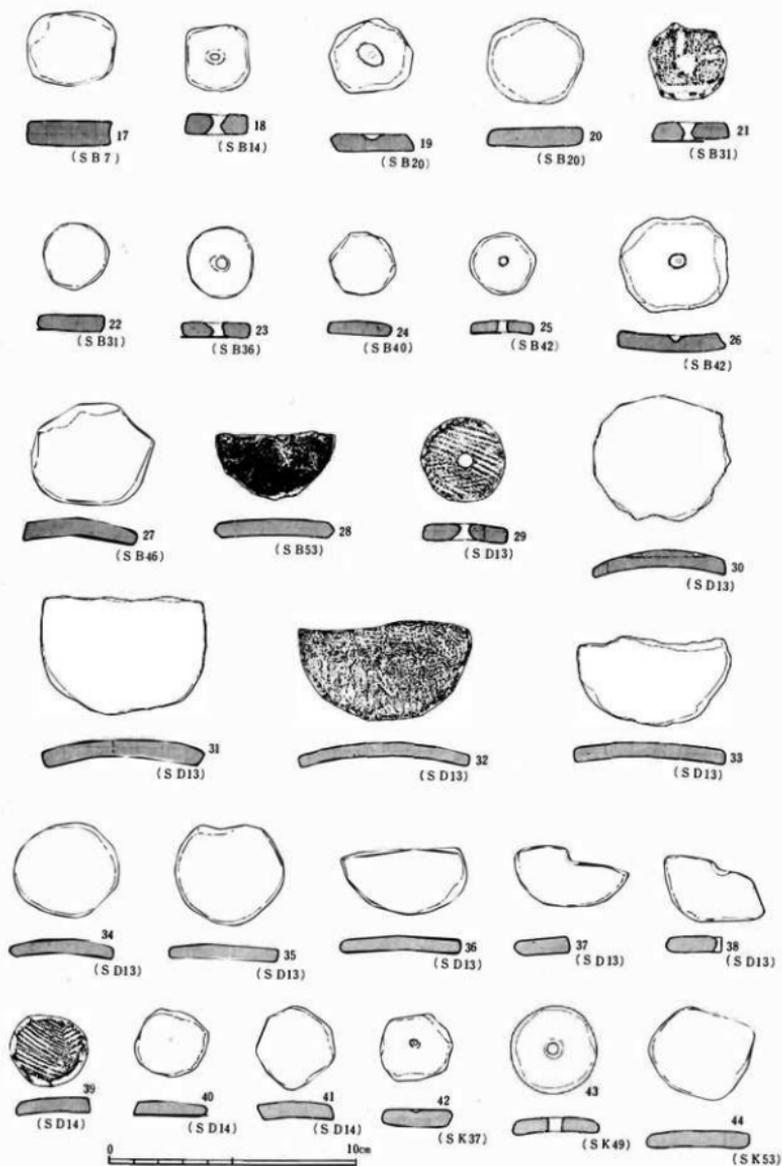


图87 土製品実測図

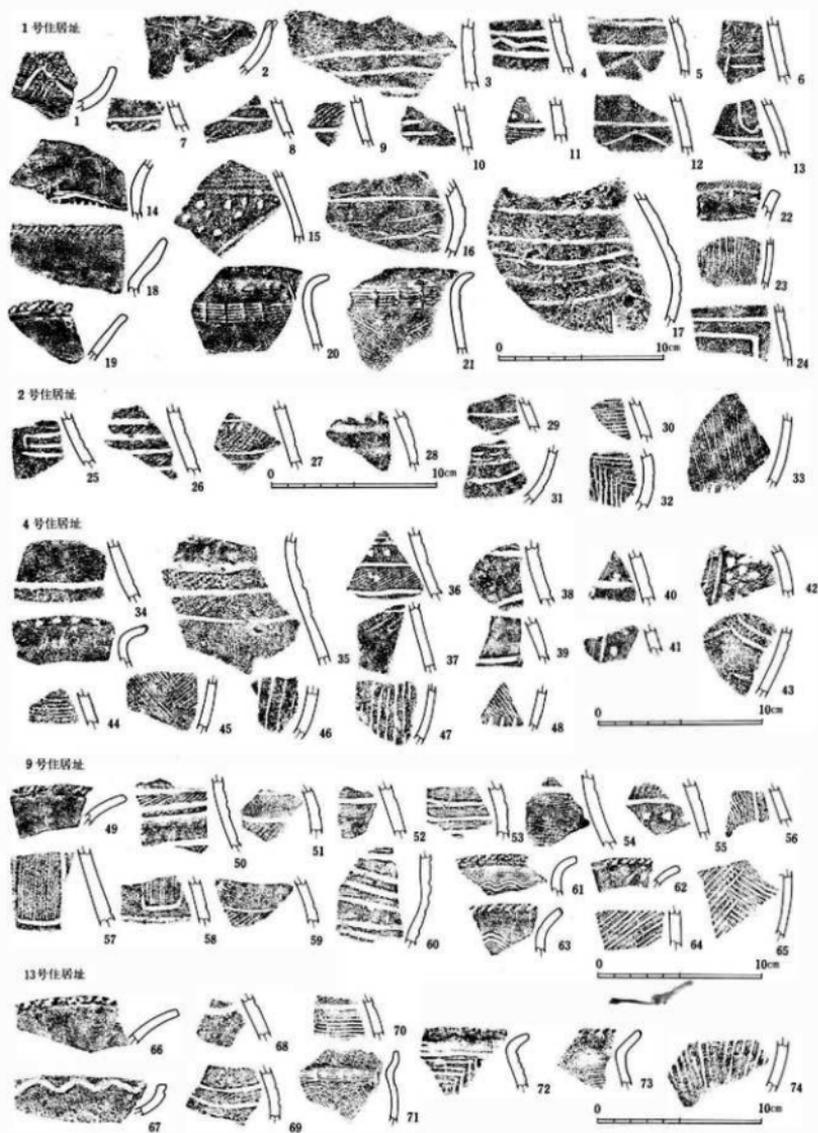
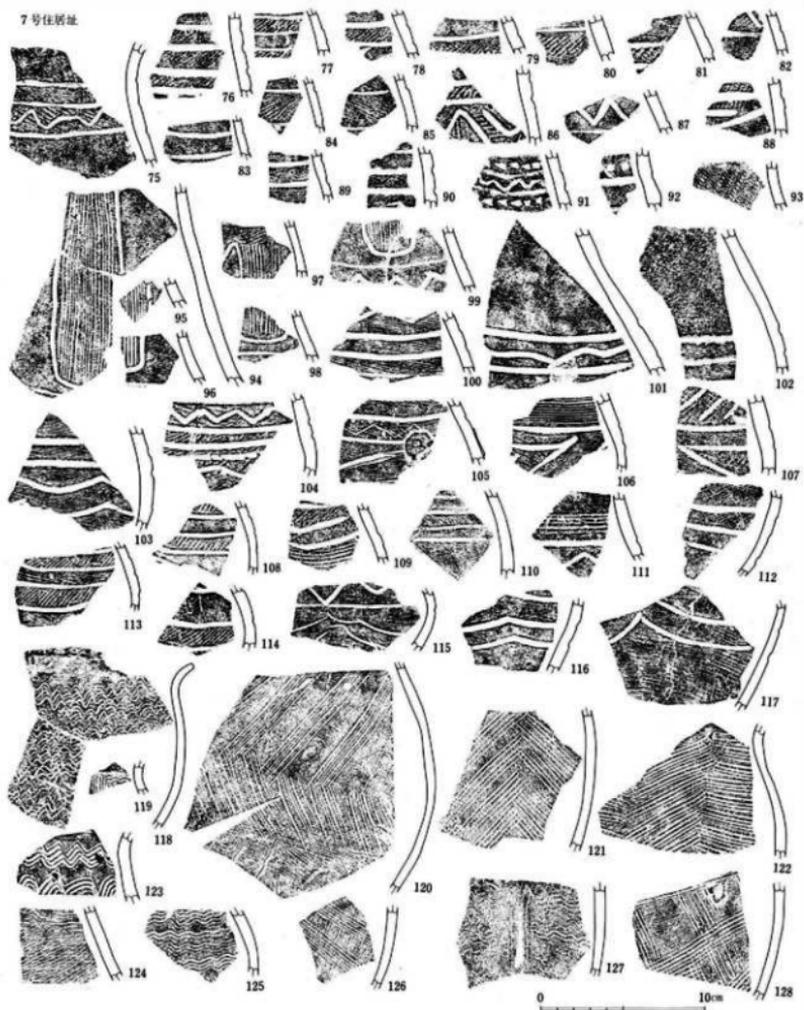


图88 1号·2号·4号·9号·13号住居址出土土器拓影

7号住居址



18号住居址

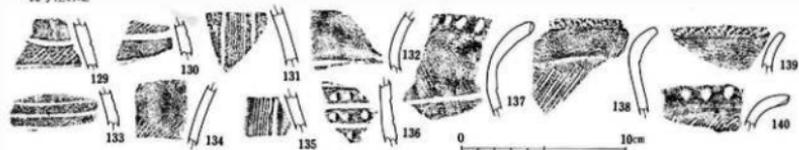
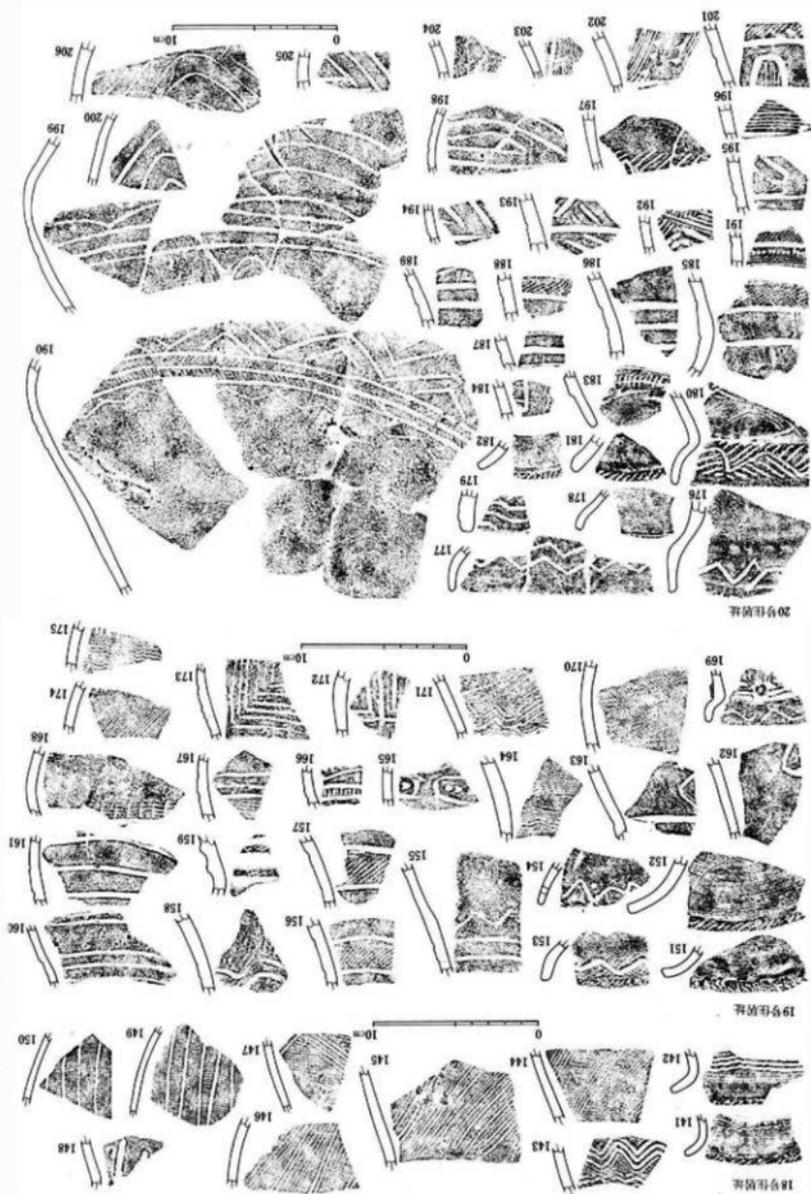


图89 7号·18号住居址出土土器拓影

图90 18号·19号·20号住居出土土器片断影



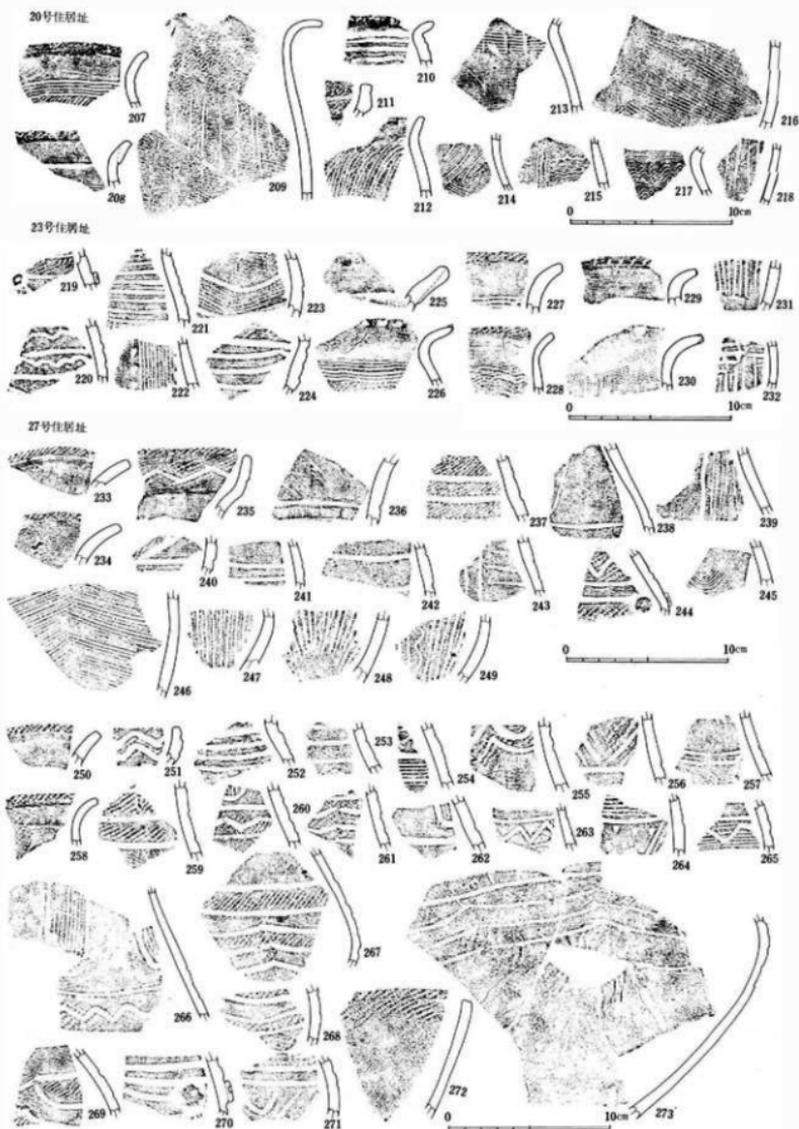


图91 20号·23号下層·27号住居址出土土器拓影

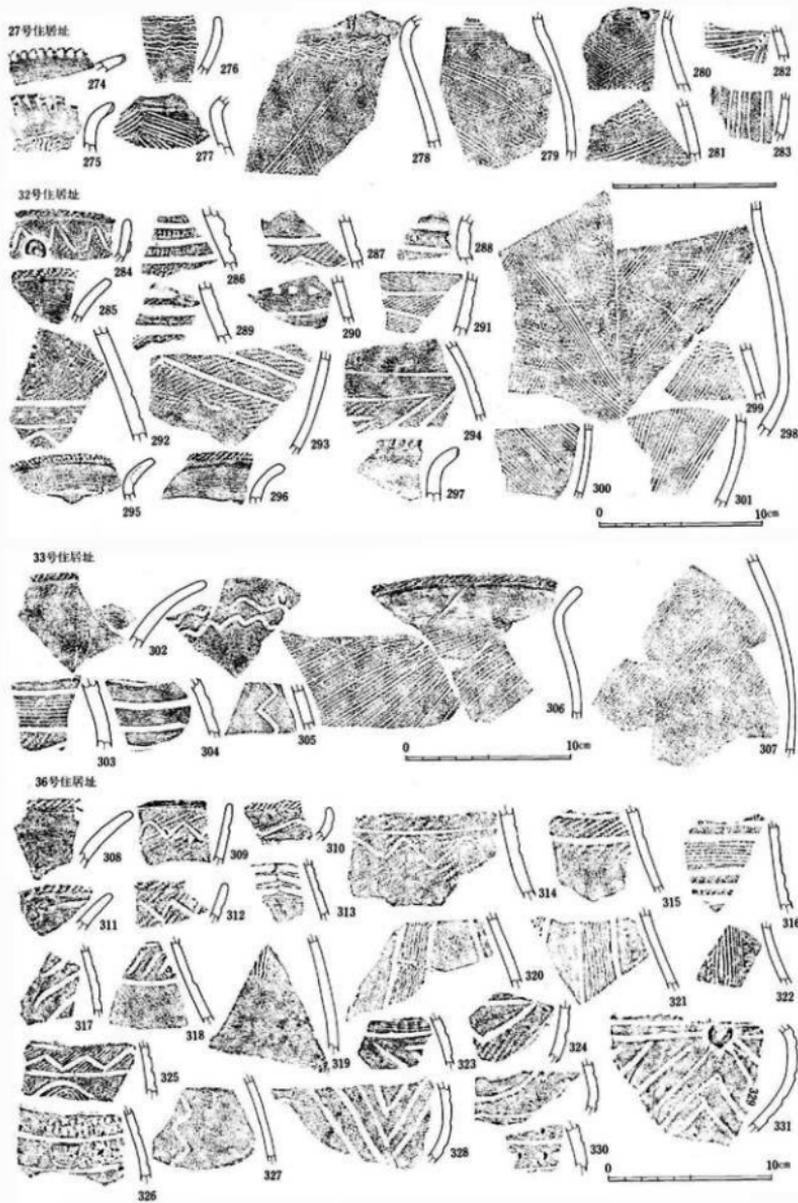


图92 27号·32号·33号·36号住居址出土土器拓影

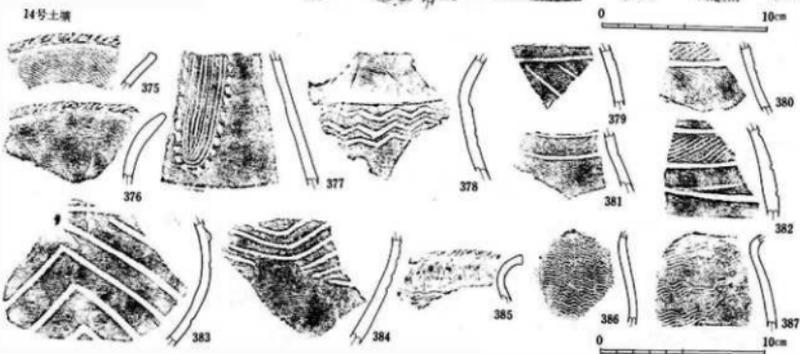
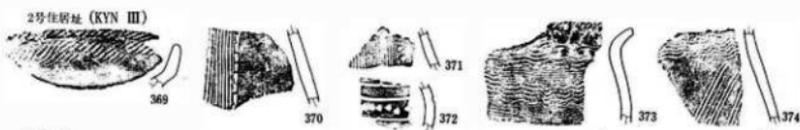
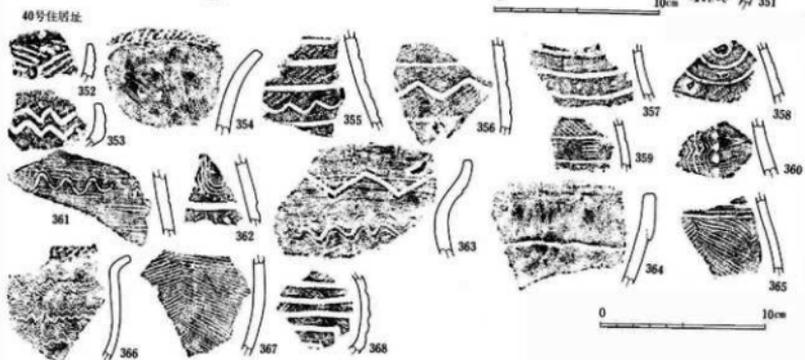
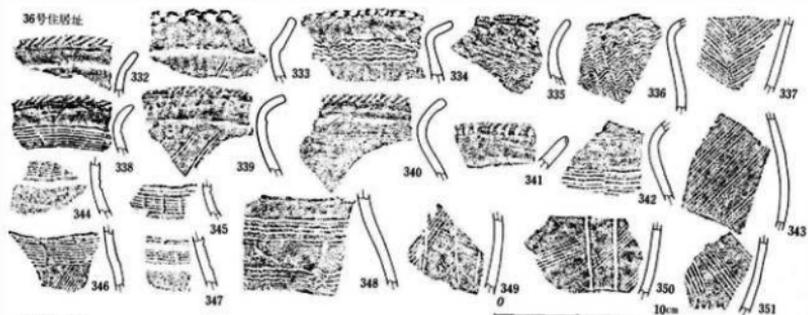


图93 36号·40号·2号住居址、14号土壘出土土器拓影

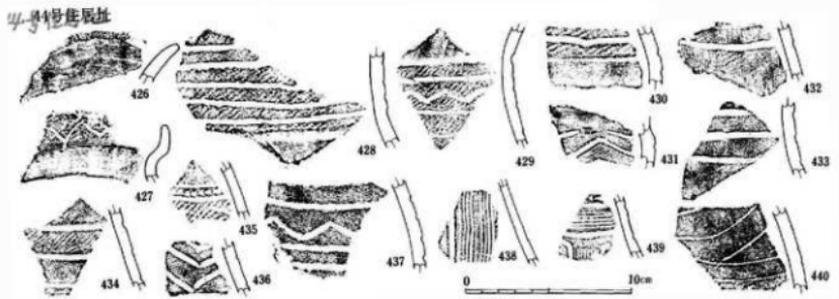
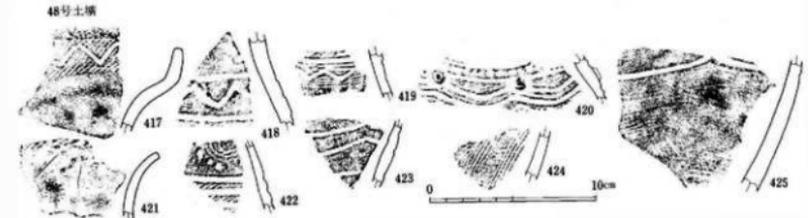
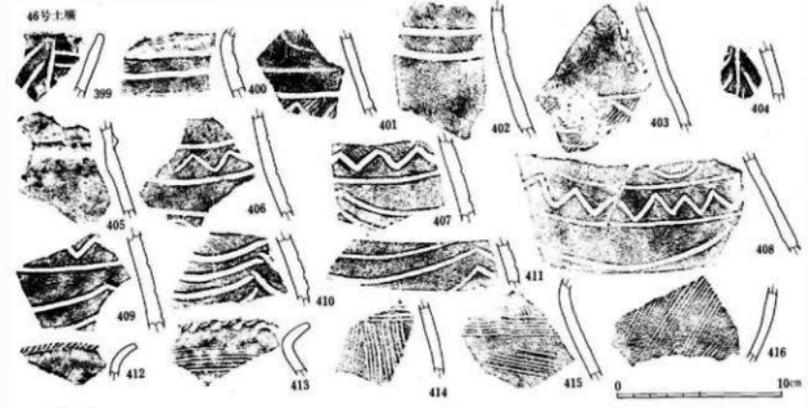
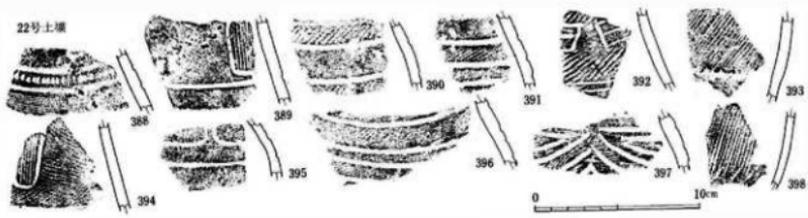
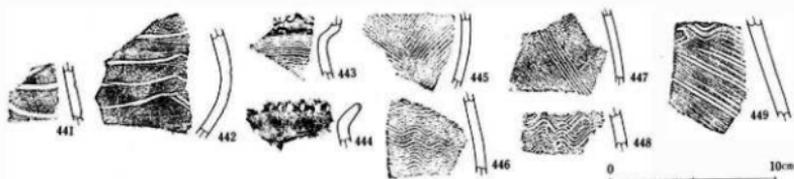
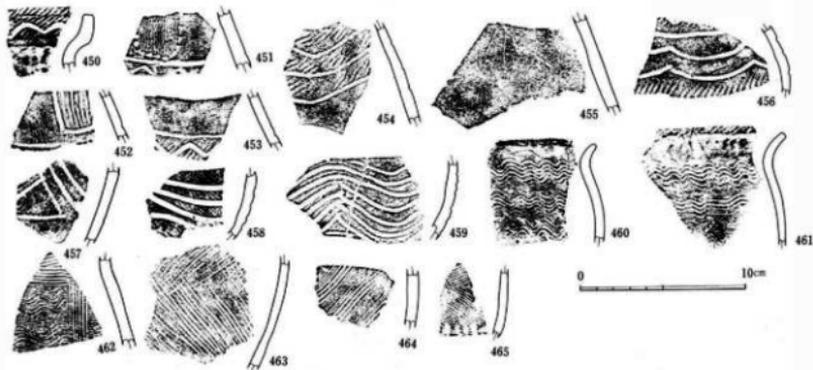


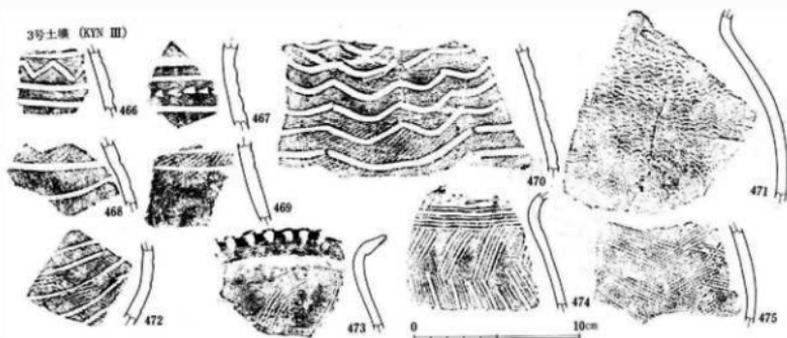
图94 22号·46号·48号土库出土土器拓影、44号住居址



2号土墙 (KYN III)



3号土墙 (KYN III)



9号土墙 (KYN III)

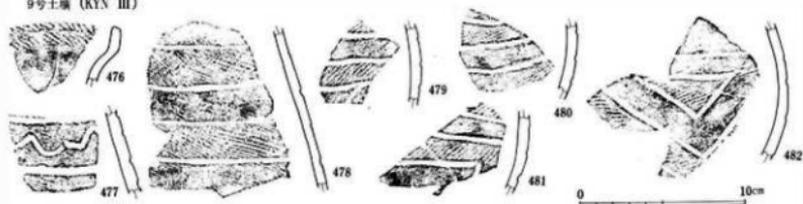


图95 44号住居址、2号-3号-9号土墙出土土器拓影

No.	器種	法量 (cm)		遺存度	色調	胎土	成形・調整・文様		備考
		口径	底径				器高	外面	
1号住居址									
16	鉢	22.9		1/4	B		LR縄文→甍山形沈線	磨耗詳細不明	横ハケ→ナデ
4号住居址									
17	盃	9.6		3/4	D		横甍磨き		ハケ
18	甕	18.3		1/4	D		口縁：横ナデ 橋板羽状文（右回り）→橋波状文		ハケ→横甍磨き
19	甕	26.0		1/8	D		口唇：LR縄文 口縁：横ナデ 橋波状文2→橋板羽状文or単斜条痕		横ハケ→甍磨き
7号住居址									
20	壺	16.3		2/3	C		口唇：ハケ 口縁：甍山形文+内形浮文 2ヶ所の繫神孔 胴部：甍直線2+甍山形文（3）+内形浮文		口縁：横甍磨き 横ナデ
21	三足	15.2		2/3	E		口唇：LR縄文 胴部：縄文地文→甍直線3 山形文1 全面赤彩		口縁：甍磨き 横ナデ
22	三足			3/4	D		口縁：ハケ→甍甍磨き 胴部：LR縄文地文 →甍直線 全面赤彩		口縁：甍磨き→赤彩 胴部：ハケ→ナデ
23	壺	11.6		3/4	D		口唇：LR縄文 口縁：甍甍磨き 胴部：甍直線		ハケ→甍磨き
24	壺			1/3	D		口縁：甍磨き 胴部：LR縄文帯2 橋直線 文+沈線区画 全面赤彩		口縁：甍磨き →赤彩 胴部：ナデ
25	壺			1/2	C		胴部：縄文地文→甍直線4 胴部：甍磨き		横ナデ
26	壺			1/2	B		胴部：ハケ→甍直線4→軽い甍磨き		ナデ
27	壺	5.0			B		胴部：甍磨き 底部：甍磨き		ナデ
28	壺			1/2	E		胴部：橋波状文→甍山形文+沈線区画 胴 彩文+沈線区画 胎土半 甍山形文		ハケ→ナデ
29	壺			1/3	D		胴部：甍直線2 胴部：橋直線→沈線区画 →甍直線文 全面赤彩		ナデ
30	壺			1/2	C		橋直線文→沈線区画 LR縄文地文		ナデ
31	壺			1/3	D		ハケ→甍磨き LR縄文地文→甍山形文+沈 線区画		ハケ→ナデ
32	壺	9.0		3/4	C		ハケ		ハケ→ナデ
33	坏	6.0		1/3	B		甍磨き・赤彩 底部：甍削り→甍磨き		甍磨き・赤彩
34	壺			完	B		甍甍磨き 縄文地文→甍山形文+沈線区画 →内形浮文		ナデ
35	壺			1/4	B		ハケ→甍磨き		ナデ
36	甕	16.0		1/4	C		口唇：LR縄文 胴部：橋波状文 胴部：橋板羽状文（左回り）		ハケ→ナデ
37	甕	23.3		1/8	D		口唇：甍削突 胴部：橋波状文1 胴部： 不明		不明
38	甕	21.6		2/3	D		口唇：LR縄文 胴部：橋波状文1 胴部：橋単斜条痕→甍磨き		ハケ→甍磨き
39	台付甕	14.0		1/3	D		口縁：ナデ 胴部：橋波状文3（上→下）		ハケ→甍磨き
40	甕	14.0		1/4	C		口唇：LR縄文 胴部：橋波状文		ハケ→ナデ
41	台付甕	12.2		1/8	D		口唇：LR縄文 胴部：LR縄文地文→コの 字重ね文		ハケ→甍磨き
42	台付甕	13.2		1/4	C		口唇：LR縄文 胴部：コの字重ね文		ハケ→甍磨き
43	台付甕	12.4		2/3	D		口縁：横ナデ 胴部：コの字重ね文		ハケ→甍磨き
44	台付甕	6.0		4/5	B		甍磨き？		ナデ
45	台付甕	7.2		2/3	D		橋波状文 甍磨き		甍磨き
46	甕	8.0		1/4	D		橋板羽状文→甍磨き		甍磨き
47	甕	5.4		2/3	D		橋単斜条痕→ナデ 底部：甍磨き		ハケ→甍磨き
48	甕	6.8		2/3	B		橋板羽状文→甍磨き 底部：甍削り→甍磨 き		ハケ→甍磨き

表3 B区出土土器観察表1